Yanaginogosho Site

The 81st Excavation Report of the Regional Government Site in Hiraizumi of the 12th Century

Takadachi

Final Report (vol. 2) from the 7th to 10th Excavation

2021

Iwate Prefectural Board of Education , JAPAN

岩手県文化財調査報告書第160集　平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡　高館跡

岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告書第160集
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

第81次発掘調査概報

高館跡

第7～10次内容確認調査　総括編2

2021

岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告書第160集
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

第81次発掘調査概報

高館跡

第7～10次内容確認調査　総括編2

2021

岩手県教育委員会

序

平泉町に所在する柳之御所遺跡は、平安時代末期の約100年間にわたり北方の王者として繁栄を誇った奥州藤原氏が残した遺跡で、特別史跡中尊寺境内、特別史跡毛越寺境内附鎮守社跡、特別史跡無量光院跡などの文化財と並び、当時の平泉の核をなしていた遺跡の一つです。本遺跡は、昭和63年から（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会が実施した一級河川北上川上流改修一関遊水地事業及び国道４号改修平泉バイパス建設事業に伴う緊急発掘調査により、大規模な掘立柱建物跡・園池跡・堀跡などが確認され、また、膨大な量のかわらけや各種木製品など、質・量ともに卓越した遺物が出土いたしました。これらの豊富な遺構・遺物により、本遺跡が『吾妻鏡』に記された「平泉館」であることが指摘されています。

本遺跡は、建設省（現国土交通省）の御理解により、平成５年には遺跡の保存が決定し、平成９年３月に『柳之御所遺跡』として国の史跡に指定されました。県では、本遺跡が国民共有の貴重な財産であるとの認識から、史跡公園として整備し後世に伝えるとともに、広く活用していきたいと考え、平成10年度から史跡整備に向けた発掘調査を実施してきました。平成22年度からは、史跡公園として公開し、これまで多くの方々に御来園いただいております。

また、平成23年に「平泉の中尊寺等の５つの資産」が世界遺産に登録されました。柳之御所遺跡は平成24年に暫定リストに登載されたことから、その価値評価に向けて活動を継続していく所存です。

また、今回は源義経終焉の伝説が残る地として古くから広く知られている高館跡の４か年にわたる発掘調査で得られた資料を考察した高館跡第７～10次の総括編２も収録し、他遺跡との比較検証を行っております。

最後に、発掘調査の実施と報告書作成にあたり、御指導・御協力を賜りました平泉遺跡群調査整備指導委員会の委員、文化庁、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所をはじめ関係各位に深く感謝申し上げますとともに、本書が平泉文化研究発展の一助になれば幸いです。

令和３年３月

岩手県教育委員会
教育長　佐藤　博

例　　言

1．本書は、岩手県教育委員会が令和元年度に実施した柳之御所遺跡整備調査事業に係る、史跡柳之御所遺跡の発掘調査の概要報告（調査期間は令和元年６月１日～10月31日）、及び高館跡第７～10次内容確認調査の遺構・遺物の事実関係を報告した総括編１に続き、多角的に考察を加えた総括編２で構成されるものである。

2．本事業は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課が主体となり、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに業務を委託して実施した。

3．遺構の呼称は、昭和63年度に（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した調査時の方法に準拠し、下記の略称を使用し、本書でも記載している。遺構名の記載については遺構略号の前に調査次数を付してある。なお、複数年次にわたる調査で明らかに同一と認定される遺構については当初の調査時の遺構名を継続して使用した。
ＳＡ：塀・柱列　ＳＣ：道路状遺構　ＳＤ：溝・堀　ＳＥ：井戸・井戸状遺構
ＳＫ：土坑・柱穴の一部　ＳＸ：その他　Ｐ：柱穴
例：81ＳＤ１　第81次調査の第１号溝

4．図版、写真図版、遺物観察表中の遺物番号は共通である。遺物の実測図については縮尺１／３を基本にし、スケールを図中に表示した。遺構遺物写真については縮尺不定である。

5．柳之御所遺跡第81次発掘調査概報本書の執筆は生涯学習文化財課柳之御所担当の菊池貴広が遺物・総括の執筆及び編集を行い、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの北村忠昭が遺構を中心に執筆を行った。
高館跡第７～10次内容確認調査総括編２は、Ⅰを菊池貴広、Ⅱを櫻井友梓・菊池貴広・半澤武彦が執筆した。なお、柳之御所遺跡第81次発掘調査概報については、文末に執筆者の名前を記載している。

6．調査成果の一部については、平泉遺跡群調査整備指導委員会で公表してきたが、本書の内容が優先するものである。

7．遺構の埋土観察、遺物の色調観察は、『新版標準土色帖』を参考にした。

8．後述する平泉遺跡群調査整備指導委員会の先生方をはじめとして、下記の機関・方々の御協力を得た。
岩手県立博物館　平泉文化遺産センター
及川真紀　鳥原弘征　菅原祐二　鈴木江利子　鈴木弘太　前川佳代　八重樫忠郎（50音：敬省略）

9．本事業に係る調査で得られた諸記録及び出土遺物は岩手県教育委員会で保管している。

柳之御遺跡第81次調査概報　目次

Ⅰ　序　　論 …… 1

1　遺跡の位置と調査経緯 …… 1
2　調査計画及び平泉遺跡群調査整備指導委員会 …… 3
3　令和元年度の調査 …… 5

Ⅱ　調査内容 …… 9

1　調　査　概　要 …… 9
2　検　出　遺　構 …… 11
3　出　土　遺　物 …… 36

Ⅲ　総　　括 …… 60

図　版　目　次

図版1　遺構　調査区 …… 67
図版2　遺構　調査区、81SK1、81SK2、81SK4 …… 68
図版3　遺構　80SC1、80SC2、25SD3・7 …… 69
図版4　遺構　25SD3・7 …… 70
図版5　遺構　25SD3・7 …… 71
図版6　遺構　25SD2 …… 72
図版7　遺構　25SD2 …… 73
図版8　遺構　25SD2、80SD1 …… 74
図版9　遺構　80SD1、25SD3・7 …… 75
図版10　遺構　80SD1 …… 76
図版11　遺構　81SD1、81SD5、80SA2、80SA3 …… 77
図版12　遺構　80SA3、81SA1、81SA2、柱穴群 …… 78
図版13　遺物　かわらけ① …… 79
図版14　遺物　かわらけ② …… 80
図版15　遺物　かわらけ③ …… 81
図版16　遺物　かわらけ④ …… 82
図版17　遺物　かわらけ⑤・国産陶器① …… 83
図版18　遺物　国産陶器② …… 84
図版19　遺物　国産陶器③ …… 85
図版20　遺物　国産陶器④ …… 86
図版21　遺物　国産陶器⑤ …… 87
図版22　遺物　輸入陶磁器・瓦 …… 88

挿 図 目 次

図1　遺跡位置図 …… 2
図2　調査区位置図 …… 6
図3　遺構配置図(全体図) …… 10
図4　81SK1・81SK2平断面図 …… 12
図5　81SK4平断面図 …… 13
図6　80SC1平面図(1/150) …… 15
図7　80SC1(25SD3・7)平面図1(1/50) …… 16
図8　80SC1(25SD3・7)平面図2(1/50) …… 17
図9　80SC1(25SD3・7)断面図(1/50) …… 17
図10　80SC2平面図(1/150) …… 21
図11　80SC2(25SD2)平面図(1/50) …… 22
図12　80SC2(25SD2)断面図(1/50) …… 23
図13　80SC2(80SD1)平断面図(1/50) …… 25
図14　81SD1平面図 …… 28
図15　81SD5平断面図 …… 28
図16　80SA2～80SA4平面図(1/150) …… 29
図17　80SA2平断面図(1/40) …… 30
図18　80SA3平面図1(1/40) …… 30
図19　80SA3平面図2(1/40) …… 31
図20　80SA3断面図(1/40) …… 31
図21　80SA4平面図(1/40) …… 32
図22　81SA1・81SA2平断面図 …… 34
図23　25SD2出土遺物(1) …… 40
図24　25SD(2)・80SD1出土遺物 …… 41
図25　25SD3・7出土遺物(1) …… 42
図26　25SD3・7出土遺物(2) …… 43
図27　25SD3・7出土遺物(3) …… 44
図28　遺構内出土遺物 …… 45
図29　遺構外出土遺物(1) …… 46
図30　遺構外出土遺物(2) …… 47
図31　遺構外出土遺物(3) …… 48
図32　遺構外出土遺物(4) …… 49
図33　遺構外出土遺物(5) …… 50
図34　34-36グリッド出土遺物 …… 61
図35　押印集成図(1) …… 62
図36　押印集成図(2) …… 63
図37　道路状遺構全体図 …… 63

挿 表 目 次

表1　発掘調査年次計画 …… 3
表2　平泉遺跡群調査整備指導委員会 …… 3
表3　平泉遺跡群調査整備指導委員会協議事項 …… 4
表4　80SC1土層対応表 …… 19
表5　柱穴一覧表 …… 35
表6　遺物観察表（かわらけ） …… 51
表7　遺物観察表（国産陶器） …… 54
表8　遺物観察表（中国産磁器） …… 59
表9　遺物観察表（瓦） …… 59

Ⅰ 序　　論

1　遺跡の位置と調査経緯

柳之御所遺跡は、岩手県西磐井郡平泉町平泉字柳御所に所在し、緯度・経度は北緯38度59分28秒、東経141度7分35秒である（図1）。遺跡の背後（北東側）には高館の丘陵があり、東に北上川、西から南かけて猫間が淵と呼称される低地によって区切られた河岸段丘上に立地する。

遺跡内の標高は南側で約25m、中心部で約27m、北側で約32mであり、北西側が高く、南東側に傾斜している。遺跡の北側の一部は北上川の流路により浸食されたと考えられるため、本来の遺跡の形状には不明な点が残る。遺跡の範囲は調査前には住宅地と田畑があった場所で、緊急調査後に岩手県による公有地化が行われている。

この遺跡は本格的な発掘調査の開始以前から奥州藤原氏に関連する内容をもつことが想定されていたが、多くは北上川の洪水等により削平を受けて失われたものと考えられていた。そのため、遺跡は一関遊水地事業や国道4号バイパス事業に伴い、大規模な発掘調査が行われることとなった。調査開始以前の予想に反して、調査当初より多くの遺構・遺物が確認され、調査の進展に伴って内容が明らかになり、その価値が高く評価されることとなった（財　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995）。この成果を受けて遺跡の保存運動が高まり、建設省（現在の国土交通省）や関係機関の尽力により遺跡の保存が決定し、治水と遺跡保護との両立が図られることとなった。その後、平成9年に史跡指定され、以降順次史跡範囲を広げながら現在に至っている。岩手県教育委員会では遺跡が国の史跡に指定されたことから、史跡公園として整備し保存活用を図るため、文化庁及び柳之御所遺跡調査研究指導委員会（現平泉遺跡群調査整備指導委員会）の指導助言を得て、平成10年度から主に未調査区域を対象とした内容確認の発掘調査を計画し、継続して実施している。これまでの調査は当面の整備対象となる堀内部地区を中心に行ってきた。これらの調査により、堀内部地区の大部分が調査され、遺構遺物の両面から研究が深化している。平成30年度には堀内部地区の総括報告書が刊行され、堀内部地区の調査は一区切りを迎え、同年より、堀外部地区の調査を開始している。この調査に先立つ堀外部地区の調査は一関遊水地事業や国道4号バイパス事業に伴い、平泉町教育委員会が行っており、報告書が刊行されている。その後も平泉町教育委員会による小規模な調査が行われてきている。なお、柳之御所遺跡堀内部地区は、平成22年より史跡公開として公開を行い、現在も史跡整備工事を継続している。

柳之御所遺跡の周辺には、西には隣接して猫間が淵跡、無量光院跡が位置し、北には高館跡、南には伽羅御所跡が接している。無量光院跡はこれまでの発掘調査で、宇治平等院と類似しつつも、細部で異なる部分が確認されている。伽羅御所跡は地名から『吾妻鏡』に記載される伽羅御所に比定する見解もある。これまで複数の地点で調査が行われ、貴重な遺物も出土しているが、小規模の発掘調査にとどまり遺跡の様相や性格を明確に示すものは確認されていない。近年の調査により周辺部で溝跡等も確認されており、区画の様相も検討されつつある。平泉町内ではこの他に志羅山遺跡や泉屋遺跡、倉町遺跡といった当時の平泉の街並みに関連する遺跡が調査されている。北上川を挟んだ東岸域や衣川を挟んで北側の奥州市接待館遺跡、白鳥舘遺跡などの調査も行われており、当時の平泉に関連する遺跡の分布範囲が周辺に広がることが明らかになり、検討が行われてきている。

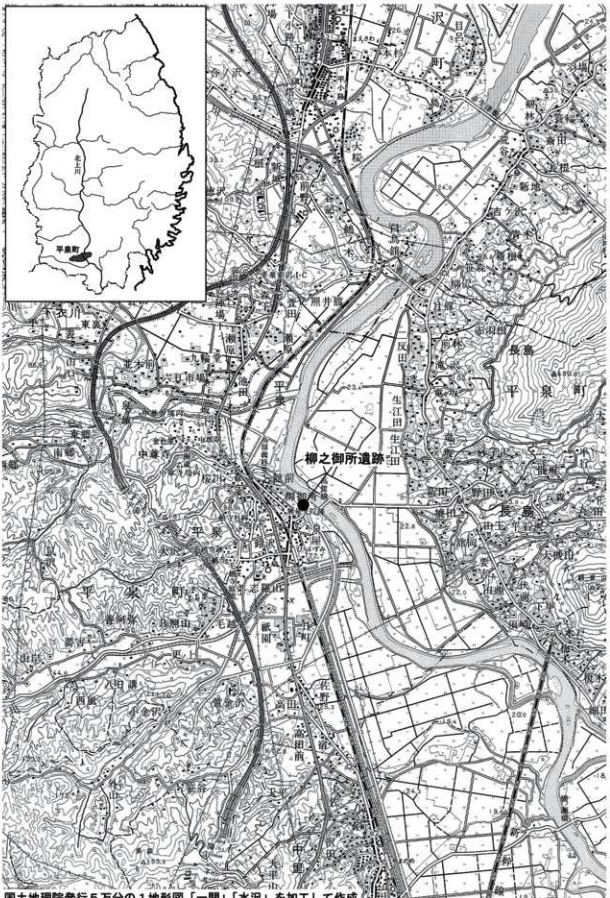


図１　遺跡位置図

2 調査計画及び平泉遺跡群調査整備指導委員会

岩手県教育委員会では柳之御所遺跡の調査を、下表のとおり計画を立てて進めている（表１）。

平成31年度・令和元年度調査（第81次）は堀外部地区の第１次計画の２年目にあたる。第１次計画は道路状遺構を中心に発掘調査を行い、道路状遺構の延伸方向の確認、構築時期の確認、道路状遺構と直交する区画との関係確認等の検討と整備に関わるデータ収集を主な目的とした。第81次調査を含む計画については表３に示した。

調査整備に関しては平成10年度から「柳之御所遺跡調査研究指導委員会」を設置し、柳之御所遺跡及び平泉遺跡群の発掘調査及び調査研究に対して指導助言を得てきた。平成12年に名称を「柳之御所遺跡調査整備指導委員会」に改め、平成15年度は世界遺産本登録に向けた周辺遺跡の検討の必要性から「平泉遺跡群調査整備指導委員会」と改称した（表２）。平成31年度・令和元年度の委員会・専門部会は表３の通り開催した。

表１ 発掘調査年次計画

	目 的		年 次	調査次数	調査内容等	調査面積	調査期間	備 考
第１次計画〈道路状遺構の検討〉	■走行方向など ■遺構密度 （年代の仮説付け） ■区画との関係	「堀外部地区と堀内部地区との関連性」について（すべて）	平成30年度	第80次	・既調査範囲での道路状遺構を再確認し、次年度以降の遺構検出の資料とする。 ・走行方向を確認し、整備検討の資料を得る。 ・未調査範囲の遺構状況を把握する。	800㎡	6月4日 ～10月31日	国庫補助 ※整備資金予算含む
			平成31年度 令和元年度	第81次	・遺構残存が良好とみられる範囲で、道路状遺構の年代検討の資料を得る。 ・道路状遺構と区画の検討資料を得る。	800㎡	6月6日 ～10月31日	県庫補助 ※整備資金予算含む
			令和２年度	第82次	・遺構残存が良好とみられる範囲で、道路状遺構の延伸方向を確認する。 ・道路と区画の検討資料を得る。 ・３ヵ年の調査を踏まえ、道路状遺構の延伸や年代等の見通しを得る。	800㎡	6月1日 ～10月31日	国庫補助 ※整備資金予算含む
第２次計画〈区画の検討〉	■区画の年代 ■区画の変遷 ■区画内の様相		令和３年度	第83次	・内部に近い範囲での区画の在り方や年代、遺構の様相を把握する。	800㎡		
			令和４年度	第84次	・遺構の種類を把握し、検討資料を得る。 ・道路状遺構南側の遺構の様相を把握する。 ・道路状遺構南側の土地利用に関する検討資料を得る。	800㎡		
			令和５年度	第85次	・未調査範囲での遺構状況を把握する。 ・区画の有無などを含めて道路状遺構北側との比較検討の資料を得る。	800㎡		
研究継続年度			令和６年度	第86次	・道路状遺構や区画の在り方、年代を確定するための補足調査（予定）。 ・関連遺跡や過去の調査との比較検討。 ・堀外部地区総括報告書を刊行。	800㎡		

表２ 平泉遺跡群調査整備指導委員会

（平成31年４月現在、役職は当時）

氏 名	役 職	専門部会
入間田宣夫	東北大学名誉教授	整備・ガイダンス
遠藤セツチ	平泉メビウスの会事務局	整備・ガイダンス
○岡田 茂弘	国立歴史民俗博物館名誉教授	保存・整備
小野 正敏	国立歴史民俗博物館名誉教授	遺構・ガイダンス
坂井 秀弥	奈良大学文学部教授	遺構・保存
斉藤 利男	弘前大学名誉教授	遺構
澤水 真一	徳島文理大学教授	遺構・整備
清水 擴	東京工芸大学名誉教授	遺構
関口 治良	古都ひらいずみガイドの会会長	保存・整備
田中 哲雄	前東北芸術工科大学教授	保存・整備
◎中村 征夫	公益財団法人人形浜文化財センター理事長	遺構
千葉 哲雄	国立歴史民俗博物館名誉教授	遺構
西村 幸夫	神戸芸術工科大学教授	保存・ガイダンス

※ ◎委員長 ○副委員長 遺構：遺構検討部会、保存：保存管理前両検討部会、整備：整備検討部会
ガイダンス：「平泉の文化遺産」ガイダンス施設整備検討部会

表３　平泉遺跡群調査整備指導委員会協議事項

回	日　時	内　　容
第１回遺構整備ガイダンス合同部会	Ｒ１．７.12	平泉遺跡群出土資料について
		「平泉の文化遺産」に係る遺産評価について
		無量光院跡の調査・整備について
		「平泉の文化遺産」ガイダンス施設（仮称）について
		世界遺産平泉の拡張（柳之御所遺跡）に関する国際専門会議及び平泉文化フォーラムについて
第１回平泉遺跡群調査整備指導委員会本委員会	R1.10.3～4	平泉遺跡群出土資料について
		「平泉－仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群－」遺産影響評価について
		接待館遺跡保存活用計画について
		平泉遺跡群の調査について
		柳之御所遺跡の調査・整備について
		無量光院跡の調査・整備について
		名勝旧観自在王院庭園の整備計画について
		「平泉の文化遺産」ガイダンス施設（仮称）について
第２回遺構整備ガイダンス合同部会	Ｒ１.12.13	「平泉－仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群－」
		柳之御所遺跡の調査・整備について
		無量光院跡の調査・整備について
		名勝旧観自在王院庭園の整備計画について
		「平泉の文化遺産」ガイダンス施設（仮称）について
第２回平泉遺跡群調査整備指導委員会	Ｒ２．２．７	「県立博物館における文化財への不適切行為事案」調査の経過報告について
		「平泉の文化遺産」関連遺跡の発掘調査報告
		柳之御所遺跡の整備について
		無量光院跡の整備について
		名勝旧観自在王院庭園の整備計画について
		「平泉の文化遺産」ガイダンス施設（仮称）整備について
		「平泉文化の総合的研究基本計画」第３期計画
		「平泉―仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群―
		接待館遺跡保存活用計画について
		「平泉の仏教的理想空間に係る国際研究会」開催報告

3 令和元年度の調査（図２）

(1) 調査体制（平成31年４月現在）

＜岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課＞

総 括 課 長	佐藤 公一
文 化 財 課 長	岩渕 計
世界遺産課長	佐藤 嘉広（文化スポーツ部文化振興課）
上席文化財専門員	平澤 武彦（文化スポーツ部文化振興課併任）
主 任 主 査	作山 雄一（文化スポーツ部文化振興課併任）
文化財専門員	大道 篤史（文化スポーツ部文化振興課併任）
文化財専門員	大関 真人（文化スポーツ部文化振興課併任）
文化財専門員	菊池 貴広（文化スポーツ部文化振興課併任）

＜（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター＞

所 長	佐々木一成
文化財専門員	北村 忠昭

(2) 調査区の位置と調査目的

令和元年度調査（第81次）は遺跡の第80次の西側に隣接する未調査範囲を主な対象とした（図２）。近年まで宅地等が所在し、これまで未調査の範囲で遺構の分布状況等に不明な点が多い。ただし、第81次調査の対象とした範囲の西側には平泉町教委委員会が実施した第12次調査、北側には第27次調査、南東側には第32次調査及び第53次調査が隣接し、多くの遺構・遺物が確認されている。

今回の調査目的のひとつは道路状遺構の位置と内容の確認である。平成３年度に実施された第32次調査において、道路状遺構を構成する29SD1に比定し得る溝跡（１号溝跡）が検出されていることや第80次調査において西側に延伸することが確認されたが、より西側の正確な位置や構築時期など不明な点も多く残されていた。また、これまで、ひとつと考えられていた道路状遺構が、ふたつあることが確認第80次調査において判明した。そのため、新たにこれらの先後関係を把握する必要性が生じてきている。そこで、延伸方向の確認と構築時期の確認、先後関係の把握をひとつの目的とした。

もう一つの目的は、道路状遺構周辺の遺構の様相が不明なことが多いことから、これらの様相の把握を目的としている。道路状遺構の北側は平泉町教育委員会が実施した調査によって区画の存在が確認され、区画のあり方によって３時期程度の変遷が想定されているが、道路状遺構の南側は未調査な区域が多いことから、遺構の分布や変遷等は不明である。そのため、特に道路状遺構の南側の遺構の把握と周囲の性格検討のための材料を得ることも目的としている。

なお、調査は遺構の分布や所属時期の確定、遺構の性格等を把握することを目的としているが、遺構の保存のために、精査の際の掘削は必要最小限にとどめている。調査終了後は、調査区全体と一部の掘削を行った遺構についてはいずれも砂の埋め戻しによる保護層を確保した上で、調査以前の地形に合わせて埋め戻しを行い、遺構の保護を図っている。

図２　調査区位置図

(3) 調査の方法

グリッド

柳之御所遺跡の調査に際しては、遺構の測量や遺物の取り上げなどの作業に際し、基準としてグリッドを設定している。このグリッドは（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが1988年から始まる緊急調査に際し平泉町教育委員会と協議のうえ設定したものである（財 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1995）。平面直角座標第Ⅹ系（旧日本測地系）をもとにした５×５ｍグリッドで、南北方向の基準線に対し真北は、西に０°11′振れる。遺跡範囲の北西端辺りが原点（０、０）となる。

なお、第49次調査まではグリッドの呼称をＸ座標方向、Ｙ座標方向の順にしていたが、第50次調査以降、その順を逆転させＹ座標方向、Ｘ座標方向の順で呼称・記載している。混乱を最小限にとどめるため、本書においてもこの方式を踏襲し、たとえば66-70（Ｙ-Ｘ）グリッドならばＸ軸方向が70、Ｙ軸方向が66を示している。以下の記載についてはこのグリッドによって調査を行い、遺物の取り上げも、近現代の改変による耕作土の出土遺物等を一部除いて、基本的にこのグリッドによって行っている。

また、本遺跡の周辺では大規模な調査の開始以降に東日本大震災により大きな地形の変動を受けている。その後に行った再測量において当遺跡内での座標変動とその数値を改めて確認している。ただし、柳之御所遺跡内での継続調査においては1988年以来進めているグリッド内での位置を示すことが調査研究の継続上有効と考えており、旧座標におけるグリッド表記を行うこととする。そのため現在の調査においても現地においては旧日本測地系の座標を基準として設定しており、発掘調査における測量及び報告書等の記載は従来の座標で行う。

局地的な調査継続としては上記のように考えられるものの、柳之御所遺跡は周囲の遺跡との関係性も研究上重要であることが認識されてきている。それらの比較や整備、その基準となる図面作成においては世界測地系の正確な座標値を把握、更新する必要性も高い。そのため、東日本大震災後の成果に基づいた改測成果を把握することで対応に努めていきたい。

表土掘削・遺構検出

今回の調査では、表土の厚さや堆積状況を把握するために一部を人力による掘削を行い、表土の厚さを確認後、重機による表土掘削を行った。表土の除去後は、鋤簾などの道具を使用して確認調査（検出作業）を行った。

遺構精査・記録

検出作業によって確認された遺構については、遺跡保護のため基本的には掘削を伴う精査は行っていない。しかし、一部の遺構については遺構の年代把握や遺物検討のために、半截等によって土層観察を行い、遺構の断面を記録した。平面図の実測は５ｍグリッドを分割した１×１ｍのメッシュを使用して手作業で行った。今次の調査で検出された遺構はもちろんであるが、既知の遺構についても、検出したものについてはあらためて平面図の作成を行っている。写真についてはデジタルカメラを使用して撮影を行った。調査区全景写真撮影に際しては高所作業車を使用して、調査担当者が撮影を行っている。

遺構名称

今次精査における遺構名は新規の遺構については頭に今回の調査次数である81を付して遺構略号を使用したが（例81SK○○）、既往の発掘調査で確認された遺構と同一であることが想定できる遺構については旧番号（既調査で命名）を本書においても使用している。具体的には道路状遺構を構成する長大な３条の溝跡は既調査で確認されている遺構と同一であることから25SD2、80SD1、25SD3・7の遺構名称を継続して用いる。

整理作業

野外調査終了後の令和元年11月１日から令和２年３月31日まで行った。遺物は水洗後に注記→接合→実測→トレース→図版作成→写真撮影の順で作業を行った。遺構については点検の後トレース→図版作成の順で作業を行った。

記載内容

この報告では、今次の調査で検出した遺構と、既知の遺構でも半裁などにより精査した遺構について記載している。

普及活動

普及活動の一環として、野外調査の全容がほぼ明らかとなった10月19日に現地説明会を行った。悪天候であったが12名の参加者を得た。そのほかに、遺跡を訪れる観光客や小学校の見学、大学生の発掘調査体験学習などを行った。

Ⅱ 調 査 内 容

1 調査概要

第81次調査区は昨年度実施した第80次調査区の西側隣接地にあたる。調査区の北側には平泉町教育委員会が実施した第27次調査（平成２年度）、西側には第12次調査（昭和57年度）、南東側には第32次調査（平成３年度）、第53次調査（平成12年度）の調査地点が隣接する。本来の地形は高館跡から延びる丘陵尾根が南東に延び、そこを境に北側は北上川へ下がり、南側は猫間が淵へ下がる地形である。公有地化以前の状況は宅地及び田畑であり、階段状に平坦に造成されている。調査対象面積は800㎡である。

第81次調査区は、堀外部地区で検出された道路状遺構（80SC1、80SC2）が延伸すると考えられる範囲で、この延伸方向と構築時期、先後関係を把握することを目的としている。また、道路状遺構よりも南側での遺構分布等の様相を把握することも目的としている。

調査区内は宅地造成時の削平などによる地形の改変が著しく、盛土層を除去すると検出面である褐色土～黄褐色粘土層が確認できる状況は北側調査区の北半部や南側調査区で顕著である。また、近世以降の陶磁器を包含する暗褐色土層を除去すると黄褐色粘土層が広範囲で確認されており、12世紀以降の土地改変が広範囲にわたっている。調査区内の基本層序は下記の通りである。

Ⅰ層　表土層・盛土層。北側調査区の南半部（南北方向Ｘ＝34ラインより南側）と南側調査区の南半部（南北方向Ｘ＝40ラインより南側）で表土層直下に近代以降の盛土層が確認される。

Ⅱ層　暗褐色土層。撹乱層や盛土層の下位に残存する旧表土層。摩滅したかわらけ細片がまんべんなく包含される土層。12世紀以降の堆積層である。上部には近世以降の陶磁器が確認されており、細分が可能である。80SC1断面図の①層や80SC2断面図の①層・②層が相当する。

Ⅲ層　黒褐色土層。第80次調査で確認された堆積層であるが、第81次調査では確認されていない。木炭小片を多く包含するとともに、略完形かわらけをはじめ大形の破片を包含する。

Ⅳ層　褐色土～黄褐色粘土層。12世紀のいわゆる地山層である。柳之御所遺跡全体の多くの範囲で遺構検出面となる土層である。道路状遺構を構成する溝跡の壁面では褐色土、褐色粘質土、黄褐色粘土が確認でき、細分が可能である。上部の褐色土は古段階の道路状遺構の堆積土に類似しており、12世紀の表土であった時期が想定される。

今回の調査における検出遺構は以下の通りである（図３）。次節では精査を行った遺構を中心に記述する。なお、出土遺物により、近代以降と判断した遺構の一部は記載を割愛した。

土　坑	10基
道路状遺構	２箇所（溝跡３条）
溝　跡	13条（道路状遺構を構成する溝も含む）
塀　跡	５条
不明遺構	１基
整地範囲	１箇所（近代以降）
柱　穴	248個（12世紀以降のものを含む）

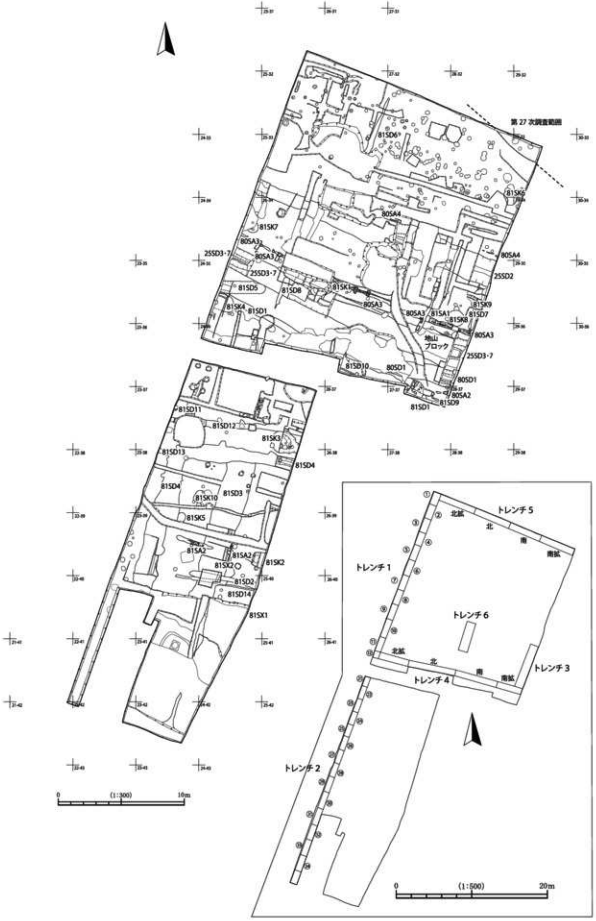

第27次調査範囲
815K6
815D6
815K7
805A9
805A7
25SD3-7
25SD3-7
815D5
815D8
815K5
805A4
805A3
25SD2
815K4
815D1
805A3
815A1
815K8
815K9
815D7
805A3
崩山ブロック
25SD3-7
815D10
805D1
805D1
805A2
815D9
815D1
815D11
815D12
815K3
815D13
815D4
815D4
815K10
815D3
815K5
815A3
815A2
815K2
815D2
815D14
815X1
0
(1:300)
10m
トレンチ5
北試
北
南
南試
トレンチ1
トレンチ6
北試
北
南
南試
トレンチ3
トレンチ4
トレンチ2
0
(1:500)
20m

図3　遺構配置図（全体図）

2 検出遺構

(1) 土 坑

81SK1（図4）

〔位置・検出状況・精査方法〕 25·26-35グリッドに位置する。道路状遺構を構成する25SD3・7の堆積状況を確認するために設定したトレンチの北側で円形を呈すると想定される古いプランを検出した。遺構の掘削深度よりも深い部分まで宅地造成による掘削が及んでおり、北側の大部分が失われている。そのため、確認できたのは、25SD3・7と重複する南側の一部のみである。南東側は25SD3・7の未掘部分と合わせ保存することとした。

〔規模・形状〕 前述のような状況であるため、詳細な規模は不明である。残存した部分から推察される開口部径は1.7m前後である。確認した深度は64cmで、開口部が残存する東側の検出面のレベルからの深さは153cmである。断面観察を行った部分での壁は60°程の角度で立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕 本遺構の北側は前述のとおりで、その掘削が湧水の確認できる砂礫層まで及んでいる。そのため、常時水に覆われる環境下で、堆積土層はグライ化しており、新鮮な面は青灰色を呈している。埋土は壁崩落土や地山流入土もしくは埋め戻し土主体の層群である。5層中には断片的な板状の材が確認される。3層は堆積時の表土層と想定される黒みを帯びる堆積土と捉えられる。断面観察箇所では攪乱の影響が大きく、検出面からの堆積状況を確認できないが、その東側では、重複する25SD3・7の壁で確認すると、人為と想定される地山ブロック主体の堆積土層が確認でき、25SD3・7構築時に埋め戻されたことが想定される。遺構の形態、堆積状況から本遺構は井戸跡と判断した。

〔重複・先後関係〕 80SC1を構成する25SD3・7溝跡と重複する。本遺構が25SD3・7に切られている。

（北村）

81SK2（図4）

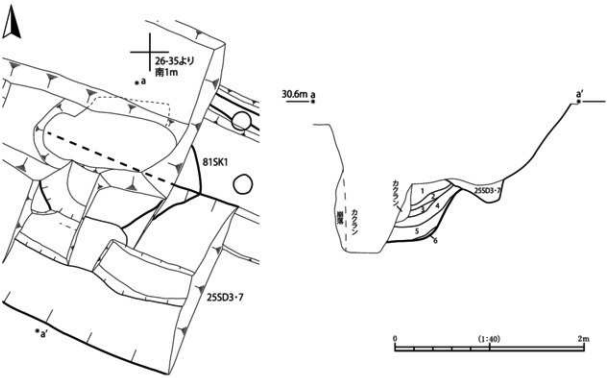
〔位置・検出状況・精査方法〕 24·25-39グリッドに位置し、西側は調査区外に広がっている。後世の宅地造成にともなう削平された地山面で、かわらけ片を包含する灰黄褐色のプランとして検出した。81SA2と重複しており、その先後関係を確認することを合わせて、西側の一部を掘削し、その他の部分を保存することとした。

〔規模・形状〕 部分的な精査であることや東側が調査区外に広がっていることから詳細な規模は不明である。確認できる南北方向は最大で1.27mである。確認した深度は35cmである。壁は45°程の角度を持って立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕 埋土はにぶい黄褐色～灰黄褐色粘土を主体とする。下部は斜面上方の北側からの堆積状況を呈する。上部は斜面下方の南側からの堆積状況を呈する。特に2層は地山ブロックの混入が顕著で人為的な堆積層と想定される。

〔重複・先後関係〕 81SA2と重複する。本遺構が81SA2を切る。

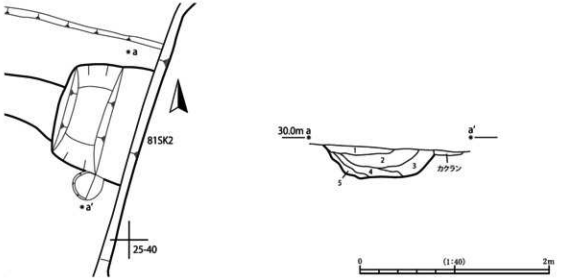
（北村）



81SK1

【81SK1】

1. 2.5Y6/4　にぶい黄色粘土　粘性中　しまりやや密　暗灰黄色粘土小～中ブロック 10%含.
2. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘土　粘性やや密　しまり中　にぶい黄色粘土層状にみられる.
3. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘土　粘性中　しまりやや疎　にぶい黄色粘土小ブロック 8%含.
4. 2.5Y5/4　黄褐色粘土　粘性中　しまり中　暗灰黄色粘土小ロック 3%含.
5. 2.5Y3/1　黒褐色粘土　粘性中　しまりやや疎　暗灰黄色粘土大ブロック 25 ～ 30%含.
6. 5Y5/4　オリーブ色粘土　粘性やや密　しまりやや密　地山と比べると軟らかい.



81SK2

【81SK2】

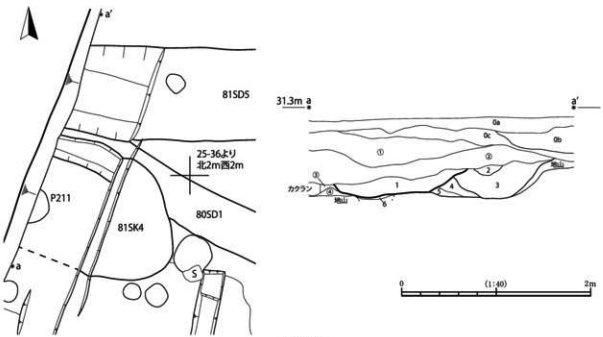
1. 10YR4/2　灰黄褐色粘土　粘性密　しまり密　浅黄色粘土(地山)小ブロック 5 ～ 7%含. かわらけ片包含.
2. 10YR4/2　灰黄褐色粘土　粘性密　しまりやや密　浅黄色粘土中～大ブロック 40 ～ 50%含. 炭化物(2 ～ 3 ㎜) 1 ～ 2%含. かわらけ小片包含.
3. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性やや密　しまり密　浅黄色粘土小ブロック 3 ～ 5%含. 炭化物(3 ～ 5 ㎜) 1%含. かわらけ小片包含.
4. 10YR4/2　灰黄褐色粘土　粘性やや密　しまりやや密　炭化物(3 ～ 5 ㎜) 1 ～ 2%含.
5. 10YR4/2　灰黄褐色粘土　粘性やや密　しまりやや密　浅黄色粘土小ブロック 30%含. 炭化物(2 ～ 3 ㎜) 1%含.

図 4　81SK1・81SK2 平断面図

81SK4（図５）

〔位置・検出状況・精査方法〕　24-35グリッドに位置する。西側は調査区外に広がっている。道路状遺構の延伸状況を確認する際に、本遺構周辺のプランが不明瞭であった。そのため、西側調査区境にトレンチを設定し、堆積状況を確認したところ、浅い土坑状の堆積を確認するとともに、同質の堆積土の広がりを確認したため、土坑と判断した。検出面は削平された地山面で、濁ったにぶい黄褐色のプランとして検出した。トレンチ部分で掘削を行っており、その他の部分は検出にとどめた。

〔規模・形状〕　西側が調査区外に広がるため、詳細な規模は不明である。調査で確認できた部分では、南北方向約1.3m、東西方向1.6mである。検出面で確認した深度は約15cmであるが、断面を観察すると、最大深度は25cmである。壁は底面から30°程の角度で緩やかに立ち上がる。



81SK4

【81SK4】

0a.	10YR4/4	褐色シルト	粘性やや疎　しまりやや疎	浅黄橙色～黄橙色ブロックとの混合層．
0b.	7.5YR4/6	褐色砂	粘性疎　しまり疎	明黄褐色砂・褐灰色粘土小ブロック含．
0c.	10YR4/2～4/3	灰黄褐色～にぶい黄褐色シルト	粘性やや疎　しまり中	明黄褐色砂小ブロック・明黄褐色土小～中ブロック 10～15%含．かわらけ小片包含．東側の暗褐色土層の上部に似る．
①.	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性やや疎　しまりやや密	地山(浅黄色～浅黄橙色粘土)小～中ブロック 15～20%含．炭化物(1～5 mm)2～3%含．かわらけ小片包含．
②.	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性やや密　しまりやや密	炭化物(1～2 mm)1～2%含．かわらけ小片包．(東側の暗褐色土層の下部に対応か)
③.	10YR4/3～4/4	にぶい黄褐色～褐色粘土質シルト	粘性やや密　しまり中	かわらけ小片包含．部分的に確認される．
④.	10YR5/3～5/4	にぶい黄褐色粘土質シルト	粘性やや密　しまりやや密	炭化物(1 mm)1～2%含．酸化鉄が集積．
1.	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性やや密　しまり中	地山(浅黄色粘土)中ブロック 3%含．炭化物粒 2～3%含．かわらけ小片包含．
2.	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性やや疎　しまりやや密	黒褐色土小ブロック 10%含．かわらけ小片包含．
3.	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	粘性やや疎　しまりやや密	炭化物(2～3 mm)3～5%含．かわらけ小片包含．灰黄褐色土が鹿ノ子状に混入．
4.	10YR5/3	にぶい黄褐色粘土質シルト	粘性やや密　しまりやや密	炭化物(3～5 mm)3～5%含．かわらけ小片多く包含．灰黄褐色土が鹿ノ子状に見られる．
5.	2.5Y7/6	明黄褐色粘土	粘性やや密　しまり中	灰黄褐色土小ブロック 3～5%含．黄褐色砂混入．
6.	10YR4/2	灰黄褐色粘土質シルト	粘性やや密　しまりやや疎	地山小～中ブロックとの混合層　炭化物 3～5 mm含．

1:81SK4　2・3:81SD5　4・5:80SD1　6:81P211

図５　81SK4 平断面図

〔埋土・堆積状況〕　埋土は灰黄褐色土が鹿の子状に混在するにぶい黄褐色シルトの単層である。
〔重複・先後関係〕　80SD1、81SD5、81P211と重複する。本遺構がこれらの遺構を切る。

（北村）

(2)　道路状遺構

80SC1（25SD3・7）（図6～9）

〔位置・検出状況・精査方法〕　第80次調査で確認された遺構の続きで、西側20m分の延伸が確認された。第80次調査の報告書では道路状遺構に並行して確認された塀跡が本遺構を道路状遺構として認識する大きな要素の一つであるため、一連の遺構として報告したが、塀跡は場の区画を目的とした機能を有するものであることから塀跡の項で記載することとする。今年度の調査では南側の道路側溝に当たる29SD1が後世の削平により確認できなかったため、確認できたのは、25SD3・7のみになる。今年度の調査区においても北側には80SA3が確認されている。本遺構は、24-34～28-36グリッドに位置し、西北西-東南東方向に走行する帯状範囲として検出した。検出面は後世の宅地造成や開出に伴う削平された地山面である。既往調査区では、25SD7を25SD3の造り替え若しくは浚渫と想定しているが、本調査区内でも第80次調査区と同様、一体化しており、25SD3・7としている。精査は、必要に応じて数カ所（今次は3カ所）のトレンチを設定して、様相の確認を行っている。
〔規模・形状〕　確認できた延長は20mである。本遺構は、24-34～26-35グリッドでは、これまで確認されている向きよりやや北側に振れ、北西-南東を向く。27-36グリッド周辺より西側では、これまでと同じように、西北西-東南東を向く。走行方向は上幅の中央付近で計測すると、24-34～26-35グリッドでは、N-65°-Wとなり、27-36グリッドより西側ではN-71°-Wとなる。上幅は1.68～2.68mで、西側程狭くなっている。堆積状況を確認した部分での深度は0.86～1.08mである。溝断面形は造り替えや浚渫が行われているため、一様ではないが、走行方向が変化する西側ではV字状を呈する傾向があり、東側ではある段階でV字状を呈することがあるものの、概ね逆台形状を呈する。
〔埋土・堆積状況〕　堆積状況については、トレンチ毎に記載する。

25SD3・7a-a'（図9）

28-36グリッドの調査区際で観察した。図の右側が猫間が淵跡側になる。7～23層が本遺構の堆積土である。当該遺構部分を概観すると、11～16層と19・21層間が不連続になっており、少なくとも新古の2時期が想定される。19～22層は古期と推察される段階の堆積層である。この段階の溝は両壁の底面付近に地山の連続的な崩落土層と推察される地山ブロックを多量に包含する堆積土が確認でき、流水等の影響による堆積の過程で壁の崩落を伴い、埋没したものと推察される。上部の堆積には酸化鉄の集積が顕著に見られる。この堆積土層の北壁を切るように11・16層が堆積している。17層は砂主体、18層は砂を混在するシルト層主体の堆積層で流水の影響による新段階初期の堆積層と推察される。その上部に旧表土層と考えられる灰黄褐色土層が堆積するが、本層が堆積した後、浚渫が行われたものと推察される。北壁には地山の崩落土層（15層）が堆積し、底面中央付近には炭化物主体の層（14層）が薄く堆積している。これらの層は砂層が堆積し、流水等の影響下で埋没したものと想定される。その後も砂層（13層）の堆積、旧表土層と想定される堆積土層（11・12層）により埋没しており、流水等による影響下での堆積が繰り返されたものと考えられる。繰り返しの浚渫等のメンテナンス行為が行われ、溝幅が最大級になったものと推察されるが、流水等の影響により埋没が始まり、最終的には人為的に埋め戻されている（7～9層）。

25SD3・7b-b'　（図９）

25-36～26-36グリッド内の攪乱部を利用したトレンチの東際で観察した。図の右側が猫間が淵跡側になる。１・２層がa-a'間の８・９層、４層が12層、６層が13層、７層が15層、11層が17層、12・13層が18層に対比可能である。a-a'間と比較すると、堆積土の不連続な部分が確認できず、大きな造り替えの行為を確認することはできない。繰り返し砂層（４・６・８・９・11・13層）の堆積が確認され、流水等による影響下での堆積が繰り返されたものと考えられる状況はa-a'間と同じである。

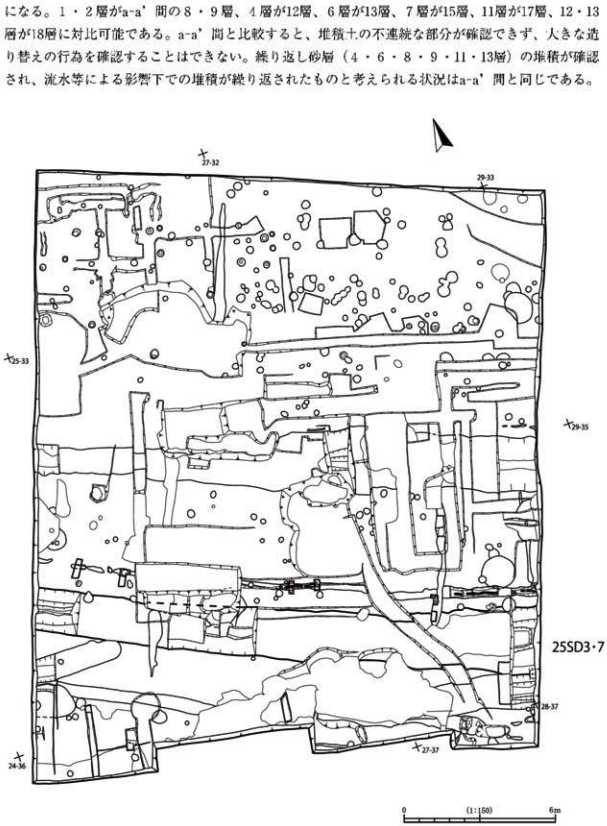


図６　80SC1 平面図（1/150）

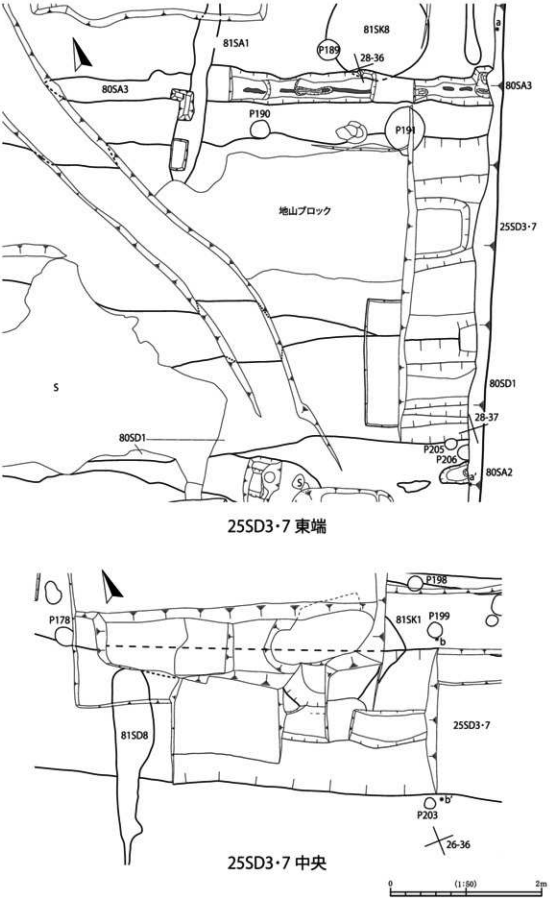


図７　80SC1（25SD3・7）平面図１（1/50）

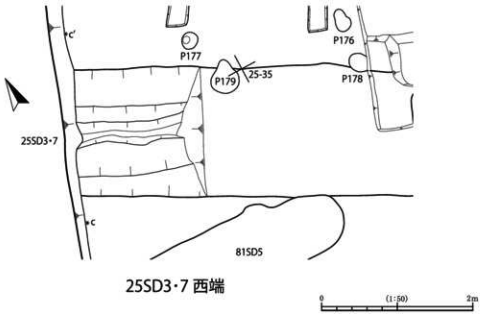
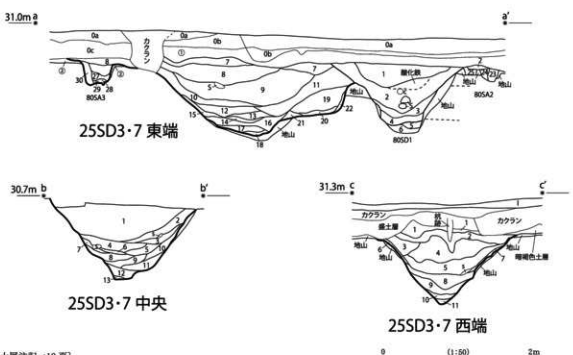


図８　80SC1（25SD3・7）平面図２（1/50）



［土層注記→18 頁］
（所見等）
＜25SD3・7＞
［a-a'］
7－ 18：新期堆積土層。細分可能。
7－ 9：人為による埋め戻し土層。酸化鉄。
10- 13：水成堆積層。
14：炭化物主体層。
15：崩落土層。
17- 18：水成堆積層。
19- 22：古期堆積土層。
21- 22：崩落土層。

［b-b'］
1－ 2：人為による埋め戻し土層。酸化鉄。
3－ 6：水成堆積層。
7：崩落土層。
8－ 9：水成堆積層。
11- 13：水成堆積層。

［c-c'］
1－ 5：人為による埋め戻し土層。酸化鉄。
8－ 11：水成堆積層。

図９　80SC1（25SD3・7）断面図（1/50）

【80SC1(25SD3・7 東端)　断面 a-a'】

0a.	10YR3/3	暗褐色	シルト	粘性疎	しまりやや疎	3～5 cmの礫包含．下部には黄褐色シルトが層状に見られる．
0b.	2.5Y7/4	浅黄色	粘土	粘性密	しまりやや密	かわらけ小片包含．暗褐色土しみ状に混入．
0c.	10YR4/1	褐灰色	シルト	粘性やや疎	しまりやや密	浅黄色粘土(0b 層)ブロック含．かわらけ小片包含．最下部には浅黄色粘土が層状に見られる．
①.	10YR4/3～3/3	にぶい黄褐色～暗褐色	シルト	粘性やや疎	しまりやや密	炭化物(1～2 mm)2～3%含．かわらけ小片多量包含．
②.	10YR4/6	褐色	シルト	粘性やや疎	しまりやや密	酸化鉄の集積が顕著．
7.	10YR3/3	暗褐色	シルト	粘性やや疎	しまりやや密	明黄褐色土(地山)大ブロックが層状に見られる．かわらけ小片包含．
8.	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	粘性やや疎	しまりやや密	明黄褐色土(地山)大ブロック 20～25%含．炭化物(1～5 mm)2～3%含．かわらけ小片包含．酸化鉄斑有．
9.	10YR5/3～4/3	にぶい黄褐色	シルト	粘性やや疎	しまりやや密	浅黄色土(地山)中ブロック(3～5 cm)・明黄褐色土(地山)中ブロック(3～5 cm)20～25%含．炭化物(1～5 mm)3～5%含．かわらけ小片包含．酸化鉄斑有．
10.	10YR5/1	褐灰色	砂質シルト	粘性やや疎	しまり中	浅黄色土(地山)大ブロック 7%含．炭化物(3～5 mm)1%含．酸化鉄の集積が顕著で赤褐色を呈する．
11.	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	粘性中	しまりやや密	明黄褐色土(地山)小ブロック 2～3%含．炭化物(2～3 mm)1%含．酸化鉄の集積が顕著．
12.	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	粘性中	しまりやや疎	暗赤褐色砂との互層．
13.	5YR3/4	暗赤褐色	砂	粘性疎	しまり疎	下層は黄色味がつよくなる．
14.	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	粘性疎	しまりやや疎	炭化物主体の層．
15.	10YR5/2	灰黄褐色	シルト	粘性やや疎	しまりやや疎	明黄褐色土(地山)中ブロック 30～40%含．炭化物(2～3 mm)1%含．
16.	10YR5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	粘性中	しまり中	浅黄色土(地山)小ブロック 3～5%・大ブロック 5%含．炭化物(2～3 mm)1%含．
17.	10YR6/8	明黄褐色	砂	粘性疎	しまり疎	ブロック状に灰黄褐色を呈す．φ5 cmの礫包含．
18.	10YR5/1	褐灰色	シルト	粘性やや疎	しまりやや疎	明黄褐砂・灰黄褐砂との混合層．φ1～5 cmの礫包含．
19.	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	粘性やや疎	しまりやや密	明黄褐色土(地山)小ブロック 2～3%含．炭化物(2～3 mm)1～2%含．酸化鉄の集積が顕著．
20.	10YR5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	粘性中	しまりやや密	黄褐色粘土(地山)小ブロック 1～2%含．炭化物(3～5 mm)1%含．
21.	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	粘性中	しまり中	浅黄色～明黄褐色土(地山)大ブロック 40～50%含．
22.	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	粘性中	しまりやや密	明黄褐色土(地山)中ブロック 30～35%含．炭化物(5 mm)1%含．

【80SC1(25SD3・7 中央)　断面 b-b'】

1.	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	粘性やや疎	しまりやや密	明黄褐色土(地山)大ブロック 10～15%含．明黄褐色土(地山)小ブロック 20～25%含．炭化物(1～5 mm)7～10%含．酸化鉄集積顕著．
2.	10YR5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	粘性中	しまりやや密	明黄褐色～浅黄色土(地山)小～中ブロック 15～20%含．炭化物(1～3 mm)3～5%含．酸化鉄集積顕著．
3.	10YR4/2～5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	粘性中	しまりやや密	浅黄色土(地山)小ブロック(2～3 mm)1%含．酸化鉄集積．
4.	10YR5/2	灰黄褐色	砂	粘性やや疎	しまりやや疎	灰黄褐色粘土との互層．炭化物(2～3 mm)1%含．酸化鉄の集積が見られ、部分的に赤褐色を呈す．
5.	10YR5/1	褐灰色	粘土	粘性やや密	しまり中	にぶい黄褐色砂との混合層．炭化物(2～3 mm)1～2%含．酸化鉄の集積により部分的に赤褐色を呈す．
6.	10YR4/2	灰黄褐色	砂	粘性やや疎	しまりやや疎	褐灰色粘土小ブロック 2～3%含．炭化物(2～3 mm)1%含．酸化鉄の集積により赤褐色を呈す．
7.	2.5Y6/4	にぶい黄色	シルト	粘性中	しまりやや密	褐灰色土小ブロック 2～3%含．酸化鉄の集積が見られる．
8.	10YR5/2	灰黄褐色	砂	粘性疎	しまりやや疎	酸化鉄の集積が見られる．最下層に炭化物が層状に見られる．
9.	10YR5/2	灰黄褐色	砂	粘性疎	しまりやや疎	φ1～5 cmの礫包含．酸化鉄の集積が見られる．
10.	10YR5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	粘性やや密	しまりやや密	浅黄色土(地山)小ブロック 7～10%含．炭化物(2～3 mm)10%含．酸化鉄の集積顕著．
11.	10YR5/1	褐灰色	砂	粘性やや疎	しまりやや疎	褐灰色粘土小～中ブロック 7～10%含．炭化物(3～5 mm)1～2%含．φ0.5～5 cmの礫包含．
12.	7.5GY5/1	褐灰色	粘土	粘性やや密	しまり中	

13.	10YR4/1	褐灰色	砂	粘性疎	しまりやや疎	浅黄色粘土(地山)ブロック 7%含.

【80SC1 (25SD3･7 西端)　断面 c-c'】

1.	10YR3/4	暗褐色	粘土	粘性密	しまり密	黄褐色粘土(地山)小ブロック 7～10%含. 炭化物粒(1～3 mm)2～3%含. 酸化鉄斑有.
2.	10YR4/3～5/3	にぶい黄褐色	粘土	粘性密	しまり中	黄褐色粘土(地山)小～中ブロック 30～40%含. 炭化物粒～小片(10mm)2～3%含. 3・4層の境は酸化鉄が層状に集積している.
3.	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土	粘性やや密	しまりやや密	黄褐色粘土(地山)小～中ブロック 15～20%含. 炭化物 1～2%含. 酸化鉄斑有.
4.	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土	粘性密	しまりやや密	黄褐色～明黄褐色粘土(地山)中～大ブロック 40～50%含(混合層). 炭化物(15 mm)・炭化物粒(2～3 mm)2～3%含. 酸化鉄斑有.
5.	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土	粘性やや密	しまりやや密	明黄褐色粘土(地山)中ブロック 15～20%含. 炭化物(3～5 mm)2～3%含. 酸化鉄斑有.
6.	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	粘性疎	しまり中	黄褐色粘土(地山)小ブロック 5～7%含. 炭化物(2～3 mm)1%含.
7.	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	粘性疎	しまり中	黄褐色粘土(地山)小ブロック 3～5%含. 炭化物(2 mm)1%含.
8.	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	粘性疎	しまり疎	灰黄褐色粘土との互層. 炭化物(3～5 mm)1～2%含. 粘土との境に酸化鉄集積.
9.	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	粘性疎	しまり疎	灰黄褐色粘土大ブロック 10%含. 細礫包含. 酸化鉄斑有. 10 層との境に黒色砂集積.
10.	10YR5/2	灰黄褐色	粘土	粘性やや密	しまりやや疎	灰黄褐色砂包含. 炭化物(2 mm)10%含.
11.	10YR3/1	黒褐色	砂	粘性疎	しまり疎	

表 4　80SC1 土層対応表

遺構名	特徴等	断面A(東端)	断面B(中央)	断面C(西端)
25SD3･7	人為堆積層	7	—	—
	人為堆積層	—	—	1
	人為堆積層	—	—	2
	人為堆積層	—	—	3
	埋め戻し土（人為堆積層）　酸化鉄顕著	8	1	4
		9	2	5
	水成堆積層　酸化鉄集積顕著	10	—	—
	水成堆積層　酸化鉄集積	11	3	—
	砂と粘土互層　水成堆積層　酸化鉄集積	12	4	—
	砂と粘土の混合層　酸化鉄集積	—	5	—
	砂層　水成堆積層	13	6	—
	炭化物主体層	14	—	—
	地山崩落土層　酸化鉄集積	15	7	—
		—	—	6
		—	—	7
	砂層　水成堆積層　酸化鉄集積	—	8	8
	砂層　水成堆積層　酸化鉄集積	—	9	
		16	—	—
	酸化鉄集積顕著	—	10	—
	砂層　水成堆積層　細礫包含	(17)	11	(9)
	粘土層　水成堆積層	(18)	12	10
	砂層　水成堆積層		13	11
	古期堆積土層　酸化鉄集積顕著	19	—	—
	古期堆積土層	20	—	—
	古期堆積土層　地山の連続的な崩落土層か	21-22	—	—

また、7層に地山起源のにぶい黄褐色土の堆積が見られ、壁の崩落を伴う堆積状況にあったものと推察される。最終的にはa-a’間と同様に、人為的に埋め戻されている（1・2層）。

25SD3・7c-c’（図9）

24-34・35グリッドの調査区境で観察した。図の左側が猫間が淵跡鶴になる。4・5層がa-a’間の8・9層、8層がb-b’間の8・9層、9層がa-a’間の17層、10・11層がa-a’間の18層に対比可能である。b-b’間と同様に、堆積土の不連続な部分は確認できない。下半部は繰り返し砂層（8・9・11層）の堆積が確認され、b-b’間と類似した堆積状況にあったものと推察される。上半部はa-a’間、b-b’間と同様に、人為的に埋め戻されている（4・5層）。

〔重複・先後関係〕　広範囲に及ぶ遺構であるため、想定されるプラン内には様々な遺構との関係が確認できるが、直接的に重複関係を把握できるものに限定して記載する。81SK1、81SC2、81SD5・81SD8、81SA1、81P178・81P179・81P190・81P191と重複し、81SK1を切り、その他の遺構に切られる。

（北村）

80SC2（25SD2、80SD1）（図10～13）

〔位置・検出状況・精査方法〕　第80次調査で確認された遺構の続きで、西側20m分の延伸が確認された。25SD2が木遺構の北側側溝、80SD1が木遺構の南側側溝にあたる。木遺構は北側調査区の南北方向X＝37ラインより北側に位置する。両溝は西北西-東南東方向に走行する帯状範囲として検出した。検出面は後世の宅地造成や開用に伴う削平された地山面である。80SD1は26-36グリッド周辺で削平等により途切れている。精査は必要に応じて数カ所のトレンチ（25SD2は3カ所、80SD1は2カ所）を設定して、様相の確認を行っている。

〔規模・形状〕　25SD2は確認できた延長20m、80SD1は削平のため途切れる部分があるものの、確認できたのは延長20mである。南北側溝ともに西北西-東南東を向き、直線状である。25SD2はN-70°-W、80SD1は東側でN-75°-W、西側でN-62°-Wの傾きを持つ。南北側溝間の幅は、両側溝が確認できる東端の芯芯で8.8m、西端の芯芯で9mである。南側側溝が27-36グリッド周辺で「へ」字状になるため、両側溝の幅が約9.5mと広くなっている。各遺構の上幅は、25SD2が0.92～2.76m、80SD1が0.48～1.4mで、西側程削平の影響を受けており、狭くなっている。堆積状況を確認した部分での深度は25SD2が0.3～1.02m、80SD1が0.06～0.7mである。溝断面形は確認箇所で様相が異なっており、25SD2は、a-a’間、b-b’間はV字状、c-c’間は逆台形状を呈し、80SD1は逆台形状を呈する。

（北村）

〔埋土・堆積状況〕　本遺構の堆積状況については、観察した箇所別に記載する。本遺構中央部A－A’を15層に分層した。1～5層に多量の土器細片・炭化物の包含が確認された。自然堆積もしくは人為堆積なのか明確に判断することはできなかった。10層以下は、粘土質土に壁面崩落土・炭化物を多量に含む自然堆積層である。第80次調査では、断面観察から、新古の2時期が想定されたが、今回の調査では、判別することはできなかった。

本遺構東端B－B’を11層に分層した。A－A’と同類で、埋土上位から中位に土器細片及び炭化物を含み、中位から下位は、壁面崩落土・炭化物を含む自然堆積層で構成される。

木遺構西端に位置するC－C’を3層に分層した。上記した埋土下位のものと類似し、3層の砂層で個体となるかわらけが出土している（遺物番号1・2）。

（菊池）

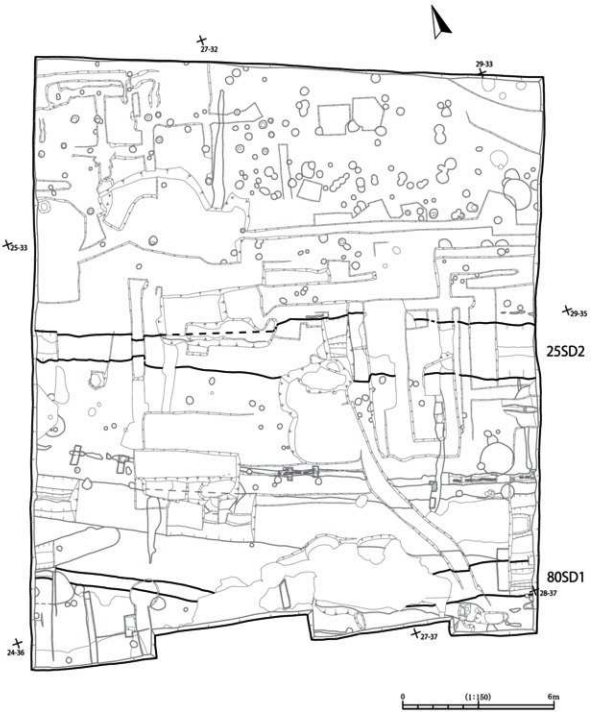


図10　80SC2 平面図（1/150）

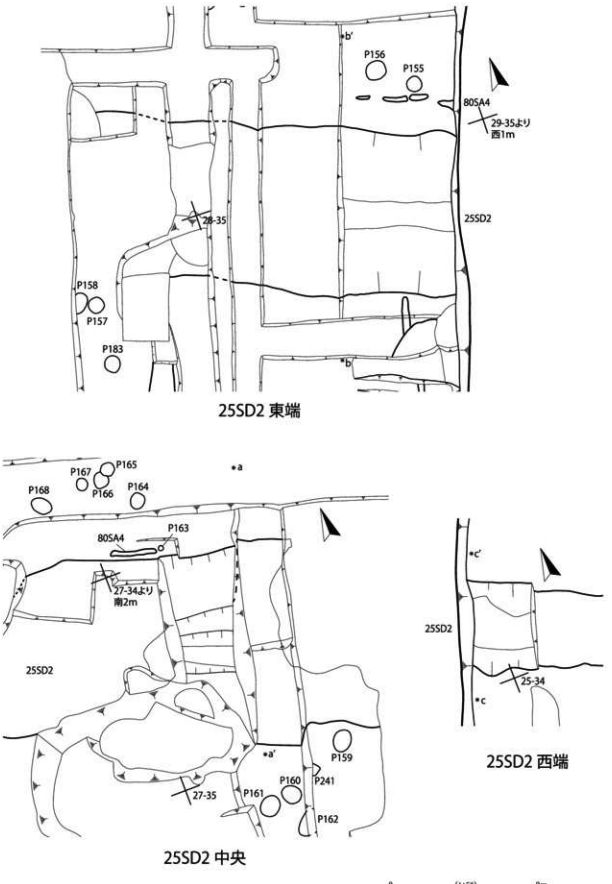


図11　80SC2 (25SD2) 平面図 (1/50)

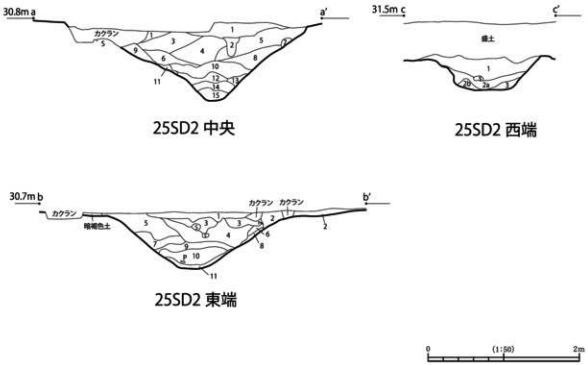


図12　80SC2（25SD2）断面図（1/50）

【80SC2（25SD2 中央）　断面 a–a'】

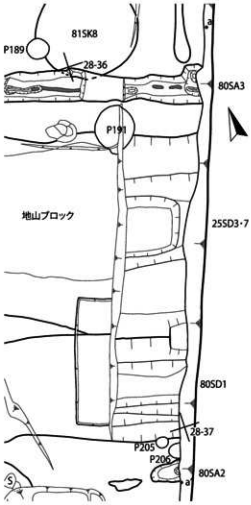
1．	10YR4/1	褐灰色	シルト	粘性弱	しまり密	径5～20 mmほどのかわらけを多量に含む．炭化物ごく少量含む．
2．	10YR3/2	黒褐色	シルト	粘性弱	しまり密	炭化物ごく少量含む．
3．	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	粘性弱	しまり密	地山粒・炭化物ごく少量含む．
4．	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	粘性弱	しまり密	かわらけ片少量含む．
5．	10YR4/4	褐色	シルト	粘性弱	しまり密	かわらけ片多量に含む．
6．	10YR5/2	褐色	シルト	粘性弱	しまり密	下位に地山粒・ブロックを含む．
7．	10YR4/4	褐色	シルト	粘性弱	しまり密	地山ブロック多量に含む．壁面崩落土．
8．	10YR4/1	褐灰色	シルト	粘性弱	しまり密	地山粒含む．かわらけ片少量含む．
9．	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	粘性中	しまり密	地山粒・ブロック多量に含む．
10．	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	粘性やや強	しまり密	地山粒・ブロック・炭化物含む．
11．	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	粘性中	しまり密	地山ブロック多量に含む．
12．	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	粘性やや強	しまり密	地山粒・炭化物少量含む．
13．	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	粘性強	しまり密	地山ブロック多量に含む．
14．	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	粘性強	しまり密	地山粒含む．
15．	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	粘性強	しまり密	地山粒・ブロック多量に含む．

【80SC2(25SD2 東端)　断面 b-b'】

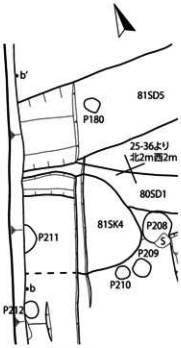
1．10YR4/1　褐灰色　シルト　粘性弱　しまり密　径5～20 mmほどのかわらけを多量に含む．炭化物ごく少量含む．
2．10YR4/1　褐灰色　粘土質シルト　粘性弱　しまり密　炭化物多量に含む．
3．注記A3・6対応
4．注記A4・6対応
5．10YR4/4　褐色　シルト　粘性弱　しまり密　かわらけ片多量に含む．人為堆積．
6．10YR4/1　褐灰色　粘土質シルト　粘性強　しまり密　地山粒含む．
7．10YR4/1　褐灰色　シルト　粘性弱　しまり密　地山粒含む．かわらけ片少量含む．
8．10YR5/3　にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性強　しまり密　地山ブロック多量に含む．
9．10YR4/3　にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性中　しまり密　地山ブロック多量に含む．
10．注記A12・13
11．注記A14・15

【80SC2(25SD2 西端)　断面 c-c'】

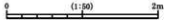
1．注記A　11・12に対応？
2a．注記A　14・15に対応
2b．注記A　14・15に対応　地山ブロック多量に含む．
3．10YR5/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱　しまり密　固体とかわらけ片出土．

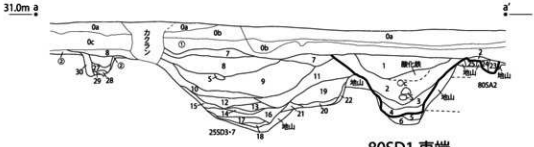


80SD1 東端

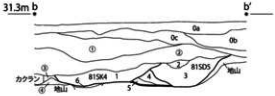


80SD1 西端





80SD1 東端



80SD1 西端

［土層注記は 26 頁］

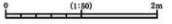


図13　80SC2 (80SD1) 平断面図 (1/50)

【80SC2(80SD1 東端)　断面 a-a'】

1.	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	粘性やや疎	しまりやや密	黄褐色土(地山)大ブロック10%含.炭化物(1～5㎜)3～5%含.かわらけ片包含(2層よりは少ない)
2.	10YR5/2	灰黄褐色	粘土	粘性やや密	しまり中	炭化物(1～10㎜)5～7%含.全体的にかわらけ片包含.上部では層状の酸化鉄や酸化鉄斑.下部には礫が混入する.
3.	10YR5/6	黄褐色	粘土	粘性密	しまり中	灰黄褐色土しみ状に混入.炭化物(2㎜)1%未満含.酸化鉄の集積が見られる.
4.	10YR5/8	黄褐色	粘土	粘性やや密	しまり中	灰黄褐色土ブロック20～25%含(混合層).炭化物(2～5㎜)1%含.酸化鉄の集積がみられる.
5.	2.5Y7/3	浅黄色	砂	粘性疎	しまりやや疎	酸化鉄の集積がみられる.
6.	2.5Y7/8	黄色	粘土	粘性中	しまり中	酸化鉄の集積がみられる.

【80SC2(80SD1 西端)　断面 b-b'】

4.	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	粘性やや密	しまりやや密	炭化物(3～5㎜)3～5%含.灰黄褐色土が鹿ノ子状に見られる.かわらけ小片多く包含.
5.	2.5Y7/6	明黄褐色	粘土	粘性やや密	しまり中	灰黄褐色土小ブロック3～5%含.黄褐色砂混入.

80SD1a-a'　(図13)

27・28-36、27-37グリッドの調査区際で観察した。図の右側が猫間が淵跡側になる。1～4層が本遺構の堆積土層である。5層及び6層は地山を構成する堆積土層である。底面から約1/3程度は地山土や礫の崩落土層(3・4層)が堆積し、中上部は土器小～細片や炭化物を含む堆積土層(1・2層)で埋没している。80SC1で確認されるような明瞭な人為的な堆積状況は確認できない。この他に80SC1との先後関係が把握できたので、記述する。本調査区で、80SC1を構成する25SD3・7と80SC2を構成する80SD1の一部が直接的に重複していることが確認でき、平面的、断面的に先後関係の把握を行った。堆積土は非常に類似していたが、かわらけ片や炭化物片の混入量や粒径に大きな差が見られたことから、本遺構が新しいとの判断に至った。

80SD1b-b'　(図13)

24-35グリッドの調査区際で観察した。図の左側が猫間が淵跡側になる。4・5層が本遺構の堆積土層である。本遺構を切る遺構により、残存状態が悪い。南側壁際の底面付近に地山の連続的な崩落土層と推察される地山起源の堆積土層が確認でき、その上部にはa-a'間の上部と類似する堆積土層が確認できる。

〔重複・先後関係〕　広範囲に及ぶ遺構であるため、プラン内には様々な遺構との関係が確認できるが、直接的に重複関係を把握できるものに限定して記載する。81SK4、80SC1、81SD1、81SD5、81P205と重複し、80SC1、81SD1を切り、81SK4、81SD5、81P205に切られる。

(北村)

(3) 溝　跡

81SD1（図14）

〔位置・検出状況・精査方法〕　調査区北側の南東隅、26-36～27-36グリッドで、概ね東西方向に走行し、27-37グリッドで南向きに方向を変える、かわらけ小片を包含するにぶい黄褐色シルトの帯状範囲として検出した。当該区域の検出面は宅地造成等に伴う削平された地山面である。26-36グリッドより西側は池と考えられる基礎の構築により失われ、また、26-36グリッドで80SD1にぶつかり、その延伸は確認できなくなっている。南側は調査区外へ延伸している。この他、25-36グリッドより西隅で確認できた溝跡を延伸方向から本遺構としていたが、その後の詳細な検討により、25-36グリッドより西側は道路状遺構を構成する80SD1であると判断したため、本遺構は前述部分で確認されたのみにとどまる。精査は80SD1と交わる箇所より南東側の溝跡の形状を確認できる部分のみを掘削し、その他は検出にとどめた。

〔規模・形状〕　確認できる26-36グリッドから東走し、27-37グリッドで南側に向きを変える。変化点は後世の掘削により途切れていること、調査区内で確認できる南走する部分は極一部であることから、そのまま南走するのか、南側に振れながら東走するのか判断できない。東走する部分の全長は約6.7mで、南に向く部分は約0.4mである。走行方向は確認できる南側の上幅付近で計測するとN-60°-Wである。確認できた上幅は0.7mで、深度を確認した部分では34cmである。形状を確認した27-37グリッドでは底面中央が一段深くなっているのが確認できた。南側の壁は撹乱の影響でなだらかに立ち上がり、北側は直立気味に立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　埋土の主体はにぶい黄褐色シルトである。中央部分は一段下がり、その部分の埋土は若干明るい色調を呈する。全体的に夾雑物が少なく、自然堆積の可能性が高いと推察される。道路状遺構を構成する80SD1と類似しているが、かわらけ細片の多寡により明瞭に区分できる。

〔重複・先後関係〕　80SD1と重複する。本遺構が80SD1に切られている。

（北村）

81SD5（図15）

〔位置・検出状況・精査方法〕　調査区北側、24-35～25-35グリッドで概ね東西方向に走行するにぶい黄褐色シルトの帯状範囲として検出した。検出面は宅地造成等に伴う削平された地山面である。25-35グリッドで25SD3・7とぶつかりながら立ち上がり、本遺構の東端部となっている。西側は調査区外へ延伸している。精査は遺構の掘削を最小限に抑えるために、81SK4、80SD1と合わせて、24-35グリッドの調査区境をトレンチ状に掘削し、その他の部分は検出にとどめた。

〔規模・形状〕　24-35～25-35グリッドをほぼ東走し、25-35グリッドで立ち上がる。調査区内で確認された全長は約3.6mである。走行方向は上幅の中央付近で計測すると、N-89°-Wである。確認できた上幅は1mで、検出段階で深度を確認した部分では29cmであるが、土層観察を行った部分では最大42cmであることが確認できた。壁は両方とも45°程の角度でなだらかに立ち上がる。

〔埋土・堆積状況〕　埋土の主体はにぶい黄褐色シルトである。大部分はこの堆積土層で埋没しており、上部の中央付近のみかわらけ小片を包含する暗褐色シルト層の堆積が確認できる。ブロック状の堆積土の混入は確認できず、人為堆積の根拠は見いだせない。

〔重複・先後関係〕　81SK4、80SC1を構成する25SD3・7、80SC2を構成する80SD1、81P180と重複する。本遺構は81P180に切られ、80SD1を切る。25SD3・7に関しては、25SD3・7を切ると判断したが、80SD1と25SD3・7の関係に齟齬は見られない。81SK4との関係は断面観察により判断した。

（北村）

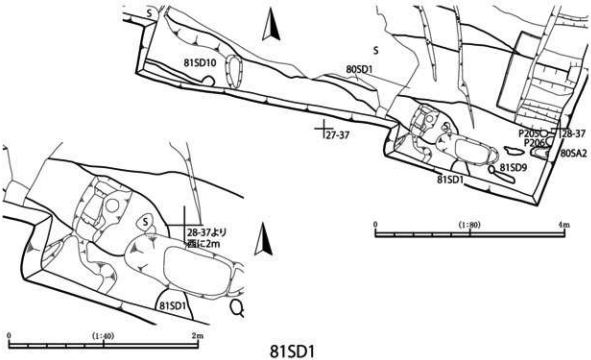
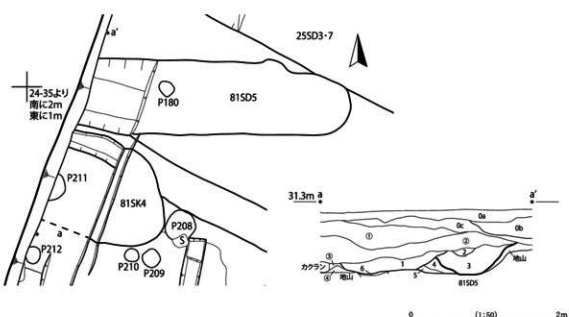


図14　81SD1 平面図



【81SD5】

2.	10YR3/4 暗褐色シルト	粘性やや硬	しまりやや密	黒褐色土小ブロック 10%含，かわらけ小片包含．
3.	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト	粘性やや硬	しまりやや密	炭化物(2～3㎜)3～5%含，かわらけ小片包含，灰黄褐色土が鹿ノ子状に混入

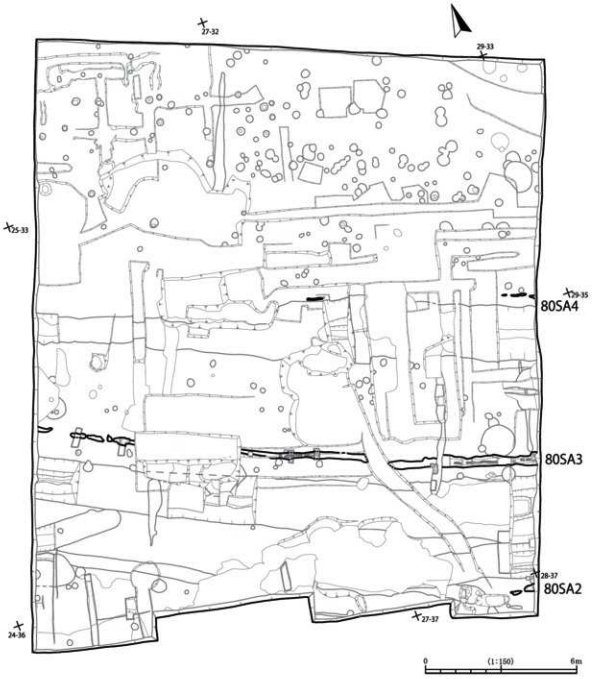
81SD5

図15　81SD5 平断面図

(4) 塀　跡

80SA2（図16・17）

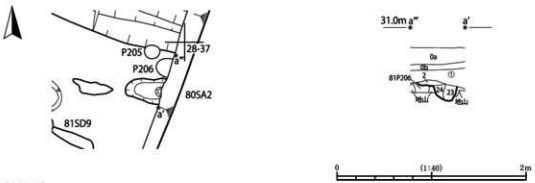
〔位置・検出状況・精査方法〕　27-37グリッドに位置する。西側は調査区外に延び、第80次調査に続く。全体的に後世の削平により残存状態が悪く、特に西側は確認できなくなっている。本遺構は、新期の道路状遺構である80SC2を構成する80SD1の南側に並行して確認されている。検出面は削平を受けた地山面である。道路状遺構を構成する25SD3・7、80SD1と一連で調査区東側境の掘削を行い、その他は検出にとどめた。



80SA2～80SA4

図16　80SA2～80SA4 平面図（1/150）

〔規模・形状〕　80SD1の南側、27-37グリッドで断続的ではあるが、確認できた延長は0.98ｍである。走行方向は上幅の中央付近で計測すると、N-82°-Wである。確認できた上幅は0.28ｍで深度を確認した部分では18㎝である。堆積状況を確認した部分では、底面の一部が半円状に掘り下がることを確認しており、塀を構築する柱材の痕跡の可能性が推察される。



【80SA2】
2.　80SD1（東端）の２層と同じ
23.　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性疎　しまりやや疎　明黄褐色粘土（地山）小ブロック３～５%含．酸化鉄斑見られる．
24.　10YR6/8　明黄褐色シルト　粘性中　しまりやや密　にぶい黄褐粘土ブロック７～10%含．

図17　80SA2 平断面図（1/40）

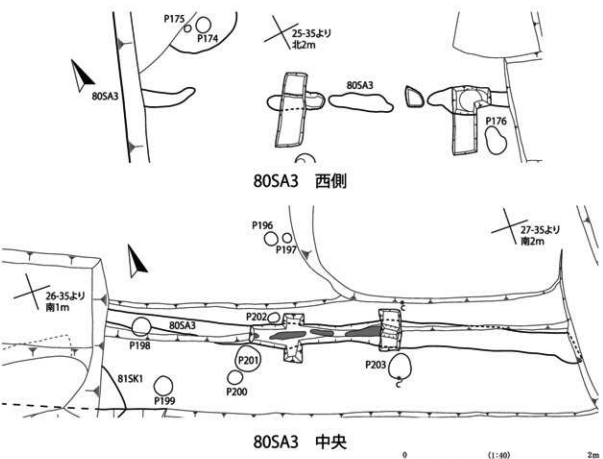


図18　80SA3 平面図１（1/40）

〔埋土・堆積状況〕　残存状態が悪く、部分的な確認となるが、調査区境で確認された半円状に掘り下がる部分はにぶい黄褐色シルトを主体とし、その他の部分は地山起源の堆積土層が確認される。23層は柱材痕跡、24層は掘り方埋土と想定される。24層は北側に並行する80SD1の上部を広く被覆する2層が南側にも広がるようにして堆積していることが確認できる。
〔重複・先後関係〕　重複関係にある遺構はない。

（北村）

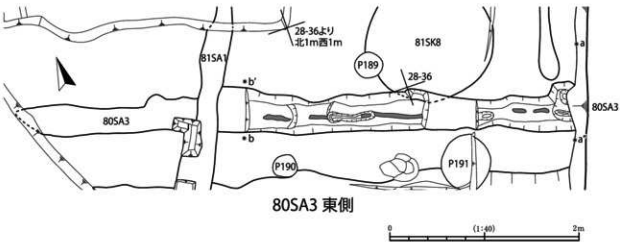
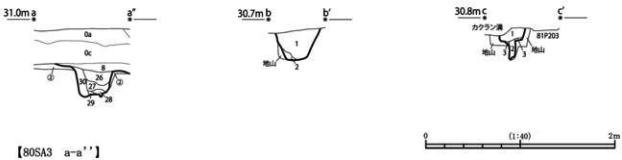


図19　80SA3 平面図２（1/40）



【80SA3　a−a''】

8.	25SD3-7(東端)の８層と同じ			
26.	10YR4/2　灰黄褐色シルト	粘性やや強	しまり中	明黄褐色粘土(地山)中ブロック７～10%含．炭化物(１～２㎜)１～２%含．
27.	10YR4/6　褐色シルト	粘性やや強	しまりやや密	炭化物(１～２㎜)を含む灰黄褐色シルトブロック含．
28.	10YR4/2　灰黄褐色シルト	粘性やや強	しまり中	明黄褐色粘土小ブロック３～５%含．
29.	10YR4/6　褐色シルト	粘性やや密	しまりやや密	灰黄褐色シルト小ブロック２～３%含．
30.	10YR4/3　にぶい黄褐色シルト	粘性やや強	しまりやや密	明黄褐色粘土中ブロック 10 ～ 15%含．酸化鉄斑見られる．

【80SA3　b−b'】

1.	10YR5/2　灰黄褐色シルト	粘性中	しまりやや密	明黄褐色粘土(地山)中ブロック 25 ～ 30%・橙色小粒(φ3 ～ 5 ㎜)5 ～ 7%含．炭化物(１～５㎜)１～２%含．酸化鉄斑状に見られる．
2.	10YR6/8　明黄褐色粘土質シルト	粘性やや密	しまり中	灰黄褐色小ブロック２～３%含．

【80SA3　c−c'】

1.	10YR4/3　にぶい黄褐色シルト	粘性やや強	しまりやや密	明黄褐色粘土(地山)小ブロック 10 ～ 15%含．炭化物(２～５㎜)１～２%含．
2.	10YR5/2　灰黄褐色シルト	粘性中	しまり中	地山小～中ブロック５～７%含．炭化物(２～５㎜)１～２%含．
3.	10YR5/6　黄褐色シルト	粘性やや強	しまりやや密	灰黄褐色小ブロック７～10%含．

80SA3

図20　80SA3 断面図（1/40）

80SA3（図16・18～20）

〔位置・検出状況・精査方法〕　24-34～28-36グリッドに位置する。東側に比して西側の残存状態が悪く、途切れる部分が認められる。80SC1を構成する25SD3・7の北側にほぼ並行し、東西方向Y＝25ライン周辺では北西-南東を向き、中央付近の東西方向Y＝26ラインより西では西北西-東南東を向き、直線状に延伸する。検出面は宅地造成等に伴う削平された地山面である。精査は、塀の構築方法を検討するために、25-34グリッド、26-35グリッド、27-35グリッドの３箇所と、堆積状況を確認するため、25SD3・7や80SD1と一連で東側の調査区境にトレンチを設定して行った。その他の部分は検出にとどめた。

〔規模・形状〕　途中で途切れる部分があるものの、確認できた延長は19.68ｍである。走行方向は上幅の中央付近で計測すると、西側の東西方向Y＝25ライン周辺でN-63°-W、中央部分の東西方向Y＝26ライン周辺でN-68°-W、東西方向Y＝27ラインより東側でN-72°-Wである。確認できた上幅は0.13～0.52ｍで、残存状態の悪い西側程狭くなっている。確認した深度は32～34㎝である。昨年度と同様、底面には板材の痕跡と推定される幅３～10㎝の溝状の痕跡が断続的に確認できる。

〔埋土・堆積状況〕　堆積状況を観察した場所で違いがみられるため、それぞれで記載する。25SD3・7や80SD1と一連で堆積状況を確認した東壁際の断面（a-a''）の埋土は、５層に分層したが、灰黄褐色土を主体とする一連の人為的な堆積土層と考えられる。幅が広い27-35グリッドで観察した断面（b-b'）の埋土は、壁の崩落土層と推察される堆積土層が壁際に確認でき、大部分は灰黄褐色土を主体とする堆積土層（１層）で人為的に埋め戻されている。26-35グリッドで観察した断面（c-c'）の埋土は、下部には板材状の痕跡（２層）と掘り方埋土と推察される地山起源の黄褐色土層（３層）が確認できる。上部はにぶい黄褐色土を主体とする人為的に埋め戻した堆積土層（１層）で被覆している。

〔重複・先後関係〕　81SK8、81SA1、81P198と重複する。本遺構が81SK8を切り、81SA1、81P198に切られている。

（北村）

80SA4（図16・21）

〔位置・検出状況・精査方法〕　27-34～28-34グリッドに位置する。全体的に残存状態が悪く、断続的に確認できるにとどまる。80SC2を構成する25SD2の北側に並行し、西北西-東南東を向く。検出面は宅地造成等に伴う削平された地山面である。残存状態が悪いため、検出にとどめた。

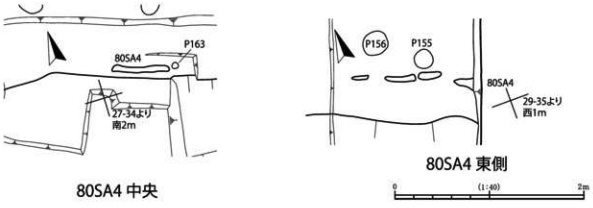


図21　80SA4 平面図（1/40）

〔規模・形状〕　25SD2の北側で部分的に確認された。27-34グリッドに位置する中央部分では延長0.6m、28-34グリッドに位置する東側部分では延長1.3mを確認した。走行方向は上幅の中央付近で計測すると、27-34グリッド部分では、N-74°-W、28-34グリッド部分では、N-71°-Wである。確認できた上幅は、27-34グリッドで5cm、28-34グリッドで7～8cmである。既往調査区で確認されている塀跡の幅や板状痕跡の幅と比較すると、残存している部分は板状痕跡の可能性が高いと推察される。

〔埋土・堆積状況〕　前述の通り、検出にとどめたため、堆積状況の確認は行っていない。検出で確認できた埋土はにぶい黄褐色土主体である。

〔重複・先後関係〕　重複関係にある遺構はない。

（北村）

81SA1（図22）

〔位置・検出状況・精査方法〕　27-35グリッドに位置する。地山面で褐灰色の帯状のプランとして検出した。一部を掘り下げ、精査を行った。

〔規模・形状〕　規模は上端約0.25m、下端0.16m、深さ0.29m。断面形状はU字状を呈する。

〔埋土・堆積状況〕　2層に分層した。上位は、地山ブロック及び炭化物を含む褐灰色土（人為堆積？）、下位は灰黄褐色土で構成される。

〔重複・先後関係〕　25SD3・7及び25SD3・7に並行する80SA3を切る。

（菊池）

81SA2（図22）

〔位置・検出状況〕　23-39・24-39グリッドに位置する。地山面で褐灰色の帯状のプランとして検出した。一部掘り下げ、精査を行った。

〔規模・形状〕　規模は上端約0.3m、下端約0.25m、深さ約0.17m。断面形状は逆台形状を呈する。

〔埋土・堆積状況〕　4層に分層した。地山粒・炭化物を含む褐灰色土・灰黄褐色土で構成される。埋土中にかわらけ片を含み、底面から常滑産甕の口縁部が出土している（遺物番号140）。

〔重複・先後関係〕　81SK2と重複する。本遺構が81SK2に切られる。

（菊池）

(5) 柱　穴（附図）

柱穴を多数検出している。埋土の特徴から12世紀代のものの他、近世以降のものも多く混在しているものと推察される。確認した柱穴を一括して表で示す。

（北村）

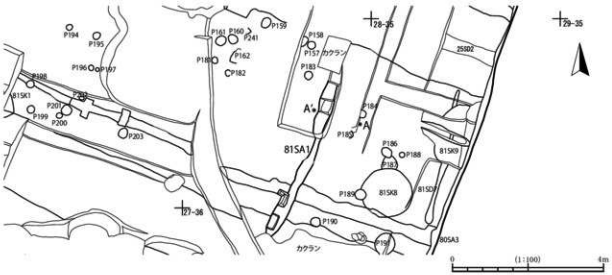

P194
P195
P196
P197
P198
81SK1
P199
P200
P201
P202
P203
P204
P205
P206
P207
P208
P209
P210
P211
P212
P213
P214
P215
P216
P217
P218
P219
P220
P221
P222
P223
P224
P225
P226
P227
P228
P229
P230
P231
P232
P233
P234
P235
P236
P237
P238

表5 柱穴一覧表

遺構	グリッド	規模径(cm)	遺構	グリッド	規模径(cm)	遺構	グリッド	規模径(cm)
P1	28-33	24×18	P84	27-33	43×26	P167	27-34	17×15
P2	28-33	25×20	P85	27-33	21×16	P168	26-34	29×19
P3	28-33	30×28	P86	27-33	21×19	P169	26-34	28×20
P4	29-33	16×14	P87	26-33	16×13	P170	25-34	32×27
P5	29-33	22×22	P88	26-33	36×30	P171	25-34	18×18
P6	29-33-34	39×(28)	P89	26-33	19×17	P172	25-34	14×13
P7	28-33-34	58×26	P90	26-33	19×16	P173	24-34	(31)×(26)
P8	28-33-34	35×(26)	P91	27-33	17×15	P174	24-34	16×15
P9	28-33-34	(22)×22	P92	27-32-33	19×18	P175	24-34	7×6
P10	28-33-34	19×(16)	P93	26-27-32	31×30	P176	25-34-35	30×20
P11	28-33	38×32	P94	28-34	39×28	P177	24-34	22×20
P12	28-33	15×14	P95	26-33	28×28	P178	23-35	(24)×24
P13	28-33	15×11	P96	26-32	28×26	P179	24-34-35	15×37
P14	28-33	25×23	P97	26-32	21×22	P180	24-35	21×17
P15	28-33	20×19	P98	26-32	17×15	P181	27-35	17×15
P16	28-33	22×20	P99	26-32	16×15	P182	27-35	17×(19)
P17	27-28-33	16×15	P100	26-32	29×25	P183	27-35	22×21
P18	28-33	36×32	P101	26-32	28×27	P184	27-35	20×18
P19	28-33	(25)×(24)	P102	24-38	23×20	P185	27-35	(20)×(9)
P20	28-33	20×20	P103	28-34	(48)×(24)	P186	28-35	21×25
P21	28-33	27×21	P104	28-33-34	28×(25)	P187	28-35	(35)×(41)
P22	28-33	(29)×26	P105	28-33	47×45	P188	28-35	14×14
P23	28-33	(21)×21	P106	27-33	(29)×34	P189	27-35	30×27
P24	28-33	49×(44)	P107	27-33	29×(26)	P190	27-36	26×24
P25	28-33	(36)×25	P108	27-33	(29)×23	P191	28-36	64×53
P26	28-33	(24)×21	P109	27-33-34	17×13	P192	26-34	21×23
P27	28-33	(41)×42	P110	27-34	22×18	P193	26-34	20×19
P28	28-33	39×(33)	P111	26-32	23×21	P194	26-35	17×16
P29	28-33	38×37	P112	26-32	30×26	P195	26-35	22×18
P30	28-33	24×21	P113	26-32	18×16	P196	26-35	14×13
P31	28-33	24×23	P114	26-32	15×14	P197	26-35	10×10
P32	28-33	31×31	P115	26-32	27×25	P198	26-35	21×20
P33	28-32-33	22×21	P116	26-32-33	20×17	P199	26-35	20×20
P34	28-32	27×26	P117	26-33	38×32	P200	26-35	16×14
P35	28-32	37×(34)	P118	26-34	17×13	P201	26-35	28×27
P36	28-33	(42)×37	P119	26-32	19×18	P202	26-35	13×9
P37	28-35	26×22	P120	26-32	11×13	P203	26-35	27×23
P38	27-33	(38)×44	P121	25-32	17×15	P204	26-35	15×15
P39	27-33	31×29	P122	26-32	15×15	P205	27-37	16×14
P40	27-33	22×22	P123	25-26-32	27×(23)	P206	27-37	(15)×(20)
P41	27-33	27×(22)	P124	26-33	(20)×(19)	P207	24-36	16×15
P42	27-33	(25)×(20)	P125	25-32	(19)×(13)	P208	24-35	40×38
P43	27-33	37×33	P126	26-32	(19)×(10)	P209	24-35	25×25
P44	27-33	(26)×28	P127	26-33	18×17	P210	24-35	19×17
P45	27-33	19×18	P128	25-32	17×(13)	P211	24-35	(37)×(16)
P46	27-33	(31)×26	P129	25-32	13×(10)	P212	24-35	22×(18)
P47	27-33	(37)×(31)	P130	25-32	35×29	P213	24-36	29×25
P48	27-33	22×19	P131	25-32	22×20	P214	24-36	23×22
P49	27-33	(23)×29	P132	25-32	26×22	P215	24-37	24×22
P50	27-33	(29)×27	P133	25-32	30×17	P216	23-37	36×32
P51	27-33	(29)×31	P134	25-32	13×11	P217	21-38	28×27
P52	27-33	(23)×25	P135	25-32	20×19	P218	21-38	17×15
P53	27-33	19×16	P136	25-32	19×16	P219	23-38	24×20
P54	27-33	17×15	P137	25-32	(20)×16	P220	23-24-38	(39)×(22)
P55	27-33	28×23	P138	25-32	48×(17)	P221	21-38	(23)×(16)
P56	27-33	30×27	P139	25-32	28×24	P222	21-39	(30)×(19)
P57	27-33	65×(50)	P140	25-33	20×17	P223	24-39	25×17
P58	27-33	35×23	P141	25-33	22×17	P224	23-39	20×18
P59	27-33	31×(30)	P142	26-34	(27)×(15)	P225	22-39	(37)×(28)
P60	27-33	18×(17)	P143	28-33	(37)×(30)	P226	22-39	16×15
P61	27-32	30×29	P144	28-29-33	(51)×(56)	P227	22-39	37×37
P62	27-32	25×24	P145	28-34	(52)×(21)	P228	22-39	33×32
P63	27-32-33	(28)×(30)	P146	28-34	(41)×(16)	P229	22-39	40×35
P64	27-32	26×22	P147	28-34	16×10	P230	22-39	39×33
P65	27-32	(39)×(30)	P148	28-34	31×27	P231	24-39	38×33
P66	27-32	(34)×31	P149	28-34	23×21	P232	24-39-40	30×25
P67	27-32	33×30	P150	28-34	12×11	P233	24-40	23×20
P68	27-32	16×15	P151	28-34	(13)×15	P234	24-40	(35)×30
P69	27-32	19×(15)	P152	28-34	13×14	P235	24-40	18×16
P70	27-32	32×31	P153	28-34	16×15	P236	23-39	32×26
P71	27-32	32×31	P154	28-34	(21)×(9)	P237	27-34	28×26
P72	27-32	24×22	P155	28-34	20×20	P238	27-33	24×20
P73	26-27-32	22×18	P156	28-34	26×25	P239	27-33	14×13
P74	27-32	18×17	P157	27-35	21×21	P240	27-33	21×13
P75	27-32	28×26	P158	27-35	(37)×(17)	P241	27-35	(17)×(10)
P76	27-32	35×30	P159	27-35	30×23	P242	23-36	39×34
P77	27-32	20×20	P160	27-35	26×23	P243	26-33	(27)×(17)
P78	27-32	23×20	P161	27-35	28×21	P244	26-33	27×23
P79	27-32-33	25×23	P162	27-35	(31)×(11)	P245	26-33	25×23
P80	27-33	29×(17)	P163	27-34	6×6	P246	26-33	25×23
P81	27-33	25×(23)	P164	27-34	22×19	P247	26-33	(16)×(21)
P82	27-33	26×(23)	P165	27-34	19×18	P248	22-40	35×34
P83	27-33	25×23	P166	27-34	(21)×19			

（ ）は残存値

3　出土遺物

(1) 概　要

今回の調査で出土した遺物の総重量は139,158.8ｇになる。そのうち、かわらけが112,510.5ｇと総重量のうち約80.85％を占める。次いで国産陶器7,483.6ｇ(約5.38％)、中国産磁器269.6ｇ(約0.19％)、その他18,895.1ｇ（約13.58％）となる。実測掲載した遺物は、かわらけ109点、国産陶器175点、中国産磁器30点、中国産陶器？１点、瓦２点である。出土した遺物の多くは、25SD2、25SD3・7、24-36グリッドからの出土である。遺物の掲載基準は、原則としてかわらけは、残存率が約４分の１以上のものや遺物に付着物等の特徴が認められるものを抽出している。国産陶器・中国産磁器については、原則径２㎝以上のものを実測・掲載している。

(2) 遺構内出土遺物

12世紀に属さない新しい遺構から出土したものも遺構内出土遺物として、掲載している。12世紀に属さない遺構は、81SD3・81SK3、81SX1である。

25SD2（図23・24、図版13・14・17・18・22）

出土遺物の総重量は19,128.0ｇで、出土状況は埋土中位～下位が大半を占める。出土した遺物のうち、47点1,645ｇを実測掲載した。

かわらけ

１・２はロクロかわらけの小皿と大皿である。法量は、１が口径9.0㎝、器高1.6㎝、底径6.2㎝で、形状は外形線が底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。２（口縁部欠損）が底径7.4㎝のロクロかわらけの大皿である。両者共に埋土下位の砂質層（C・C’の３層）からまとまって出土している。３～８は手づくねかわらけの小皿である。法量は、口径8.2㎝～10.7㎝、器高1.0㎝～2.2㎝の範囲で、形状は外形線が底部から口縁部にかけて、緩やかに立ち上がるもの（３～７）や、やや直立気味に立ち上がるもの（８）がある。９～26は手づくねかわらけの大皿である。法量は、口径11.3㎝～14.8㎝、器高1.5㎝～3.2㎝の範囲で、形状は外形線が底部から口縁部にかけて、緩やかに立ち上がるものとやや直立気味に立ち上がるものなど様々である。27は内外面に黒色の付着物（油煙？）が認められるものである。

国産陶器

出土した遺物の産地は、渥美・常滑産である。破片資料のみで、全体の器形を把握できるものはなかった。出土状況は、埋土下位から28・34～39が出土している（28・33に押印が認められる）。器種は甕類の他に37・38・40・44の鉢類が出土している。

輸入磁器

出土した遺物は、中国産の白磁２点、青磁１点である。破片資料のみで、全体の器形を把握できるものはなかった。白磁２点の器種は壺類（45）・皿（46）で、太宰府分類では45がⅡ系、46がⅤ類相当と思われる。47は埋土最下層から出土した龍泉窯産の青磁碗と思われる。

80SD1（図24・28、図版14・15・18・19）

出土遺物の総重量は7,958.2ｇで、出土状況は埋土上位から中位のものが大半を占める。出土した遺物のうち、20点485.4ｇを実測掲載した。

かわらけ

48はロクロかわらけの大皿である。法量は、底径5.6㎝で、形状は、外形線が底部付近で一度屈曲して立ち上がる。49～51は手づくねかわらけの小皿である。法量は、口径8.0㎝～10.4㎝、器高1.7㎝～1.8㎝で、形状は外形線が底部から口縁部にかけてやや外傾して立ち上がる。52～56・134は手づくねかわらけの大皿である。法量は、口径11.4㎝～15.1㎝、器高1.7㎝～2.5㎝の範囲で、形状は外形線が底部から口縁部にかけて外傾して立ち上がるものや、やや内わんして立ち上がるものなど様々である。

国産陶器

出土した遺物の産地は渥美・常滑産である。埋土下位から58が出土している。器種はすべて甕類（58～61・136・137）で、58～60に押印が認められる。

25SD3・7（図25～27、図版14・15・18・19・22）

出土遺物の総重量は11,374.5ｇで、埋土中位から下位の出土が大半を占める。出土した遺物のうち、70点3,309.7ｇを実測掲載した。

かわらけ

62・63は、ロクロかわらけの小皿である。62・63は、遺構の底面・埋土下位からの出土で、法量は、62が口径8.6㎝、器高2.2㎝、底径5.8㎝、63が口径9.5㎝、器高2.3㎝、底径5.9㎝で、形状は外形線が両者共に底部から口縁部にかけて、やや外傾して立ち上がり、厚い口縁部をもつ。64は底径5.2㎝で、外形線が底部付近で一度屈曲してから立ち上がる（63も同様である）。65はロクロかわらけの大皿で、底径6.8㎝を測る。66～68は手づくねかわらけの小皿である。66の法量は口径7.2㎝、器高1.3㎝で、形状は外形線が底部から口縁部にかけて、内わん気味に立ち上がる。67の法量は、口径8.0㎝、器高1.5㎝、68の法量は口径10.0㎝、器高2.4㎝、67・68共に形状は外形線が底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。69～79は手づくねかわらけの大皿である。法量は、口径12.0㎝～17.0㎝、器高1.8㎝～3.7㎝の範囲で、形状は外形線が底部から口縁部にかけて、緩やかに立ち上がるもの、やや直立ぎみに立ち上がるもの、内わんして立ち上がるものなど様々である。80は、ロクロ成形の柱状高台？、81は、ロクロ成形の鉢形土器の底部と思われる。

国産陶器

出土した遺物の産地は、渥美・常滑産である。２点ほど須恵器・須恵器系陶器が含まれる。破片資料のみで、全体の器形を把握できるものはなかった。埋土下位から出土したものは、96～101・103～105である。84～87・89・93・95・97・99・102・106・110・111に押印が認められる。器種は甕類が大半を占めるが、２条の沈線文をもつ101（常滑三筋文壺？）も出土している。また、前記しているが須恵器（122）・須恵器系陶器？（123）が出土している。器種は、122が甕類、123が壺類？と思われる。

輸入磁器

出土した遺物は、中国産の白磁９点である。破片資料のみで、全体の器形を把握できるものはなかった。埋土上位からの出土が大半を占める。器種は、壺類（124・125・127・128・130～132）・皿類（126）碗類（129）で、太宰府分類では125・128・131がⅡ系、124・127・130・132がⅢ系、126がⅦ類？、129がＶ－１ａ類相当と思われる。

81SD1（図28、図版15）

出土遺物の総重量は7,927.5ｇで、133・135の２点が出土している。法量は133のロクロかわらけの

底径が5.2㎝、手づくねかわらけの135の法量は、口径14.2㎝、器高2.5㎝で、やや内わんして立ち上がる。

81SA1（図28、図版15・19）

出土遺物の総重量は224.6ｇで、手づくねかわらけ138と国産陶器139の２点が出土している。138は手づくねかわらけの大皿である。法量は、口径13.6㎝、器高2.8㎝で、形状は外形線が内わんして立ち上がる。139は常滑産？の甕類である。

81SA2（図28、図版19）

出土遺物の総重量は434.6ｇで、国産陶器140が出土している。常滑産甕類の口縁部である。

81SK1（図28、図版15）

出土遺物の総重量は318.8ｇで、ロクロかわらけ141が出土している。底部が肥厚し、遺構内外を含めた他のかわらけ群と比較して、時間的に先行する遺物と思われる。

81P103（図28、図版15）

出土遺物の総重量は139.1ｇ、埋土上面から142の柱状高台が出土している。

81SD3（図28、図版19）

12世紀以降の遺構から出土したものである。出土遺物の総重量は325.9ｇで、埋土上位から143の常滑産甕類の体部が出土している。

81SD5（図28、図版19）

出土遺物の総重量は1,972.2ｇで、埋土（暗褐色土）から144の須恵器系甕類の肩部が出土している。

81SK3（図28、図版22）

12世紀以降の遺構である。出土遺物の総重量は74.5ｇで、埋土上位から145の瓦が出土している。

81SX1（図28、図版19・22）

近代以降の遺構から出土したものである。出土遺物の総重量は985.3ｇで、瀬戸・常滑産の陶器９点（146～154）、中国産白磁の合子（155）、丸瓦１点（156）が出土している。

（菊池）

(4) 遺構外出土遺物（図29～33、図版15～17、19～22）

かわらけ

ロクロかわらけは157～165である。法量は、口径7.8㎝～13.8㎝、器高1.4㎝～3.4㎝、底径5.0㎝～8.4㎝の範囲で、形状は厚い口縁部もつ小皿（157・158）や外形線が底部付近で一度屈曲してから立ち上がるもの（161～164）があり、161・162は外形線が緩やかにやや内わんして立ち上がる椀形を呈するもので、他に口縁部が欠損している160・163・164も同様の椀形と思われる。手づくねかわらけの小皿は、166～169である。法量は、口径8.0㎝～9.6㎝、器高1.4～1.8㎝の範囲で、形状は外形線が底部から口縁部にかけて、緩やかに立ち上がるもの（166～168）、直立気味に立ち上がるもの（169）がある。手づくねかわらけの大皿は、170～200である。法量は、口径12.2㎝～15.2㎝、器高1.9㎝～3.2㎝の範囲で、形状は、皿状を呈するものが大半を占める。外形線が底部から口縁部にかけて、緩やかに立ち上がるもの（170・175・186・195）、内わんして立ち上がるもの（171～173・177・178・179・181・184・185・189・190・191・194・197）、直立気味に立ち上がるもの（176・182・183・187・198）の３種に大別される。その他201の内折れ、202の刻の痕跡と思われるものが出土している。

国産陶器

産地の大半は、渥美・常滑産で、203～227が渥美産の甕類、228～279が常滑産の甕・壺類、281～288が常滑産の鉢類である。渥美・常滑産の他に須恵器系の289～294の甕・壺、水沼産？の甕類（295～297）や判然としなかったが、渥美・常滑産もしくは、中国産陶器（298）と思われるものが出土している。317は、第80次調査で出土した渥美産の口縁部である（掲載漏れの遺物）。

輸入磁器

中国産の磁器である。種別は白磁14点、青磁１点、青白磁２点である。器種は白磁の碗類が301・303・304・306～309・311～313、碗が300（近世？）・302・305・310、青磁の碗314、青白磁の皿が315・316である。太宰府分類では、306～308・313がⅡ系、301・303・304・309がⅢ系（301・309は福建省産）、305？・310がＶ－１ａ類、見込みに櫛描きが施される302がＶ－４ｂ類相当、314は龍泉窯Ⅰ類と思われる。

（菊池）

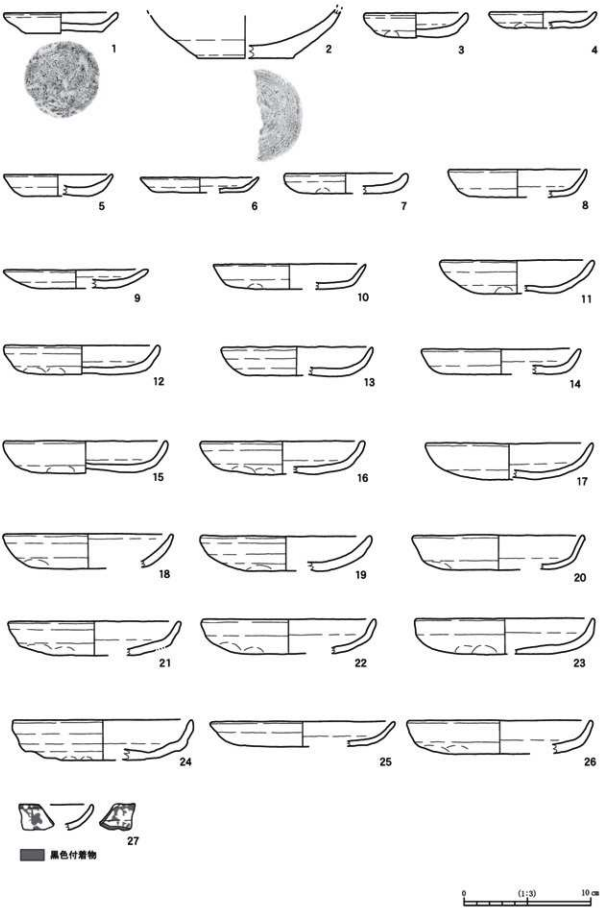


図23　25SD2 出土遺物（1）

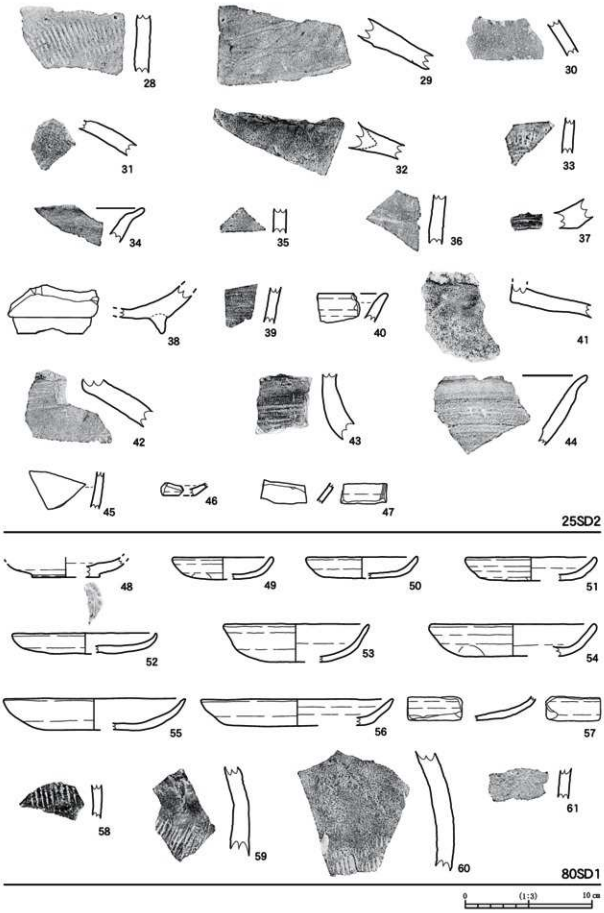
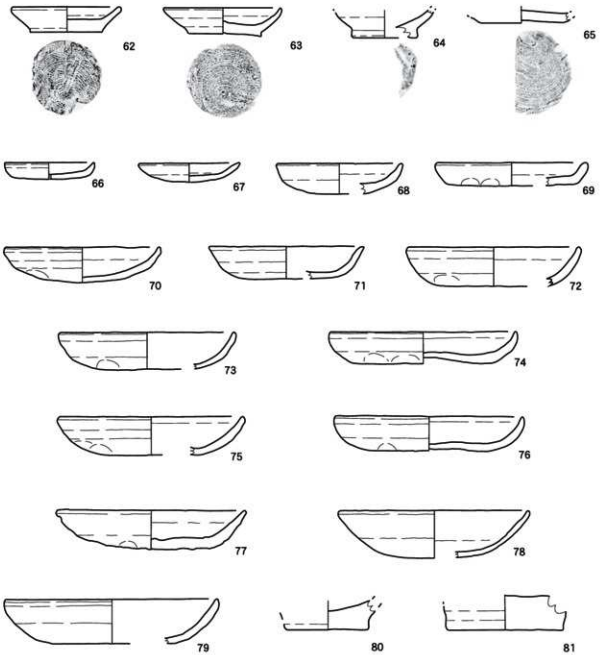


図24　25SD2（2）・80SD1 出土遺物



0　(1:3)　10cm

図25　25SD3・7 出土遺物（1）

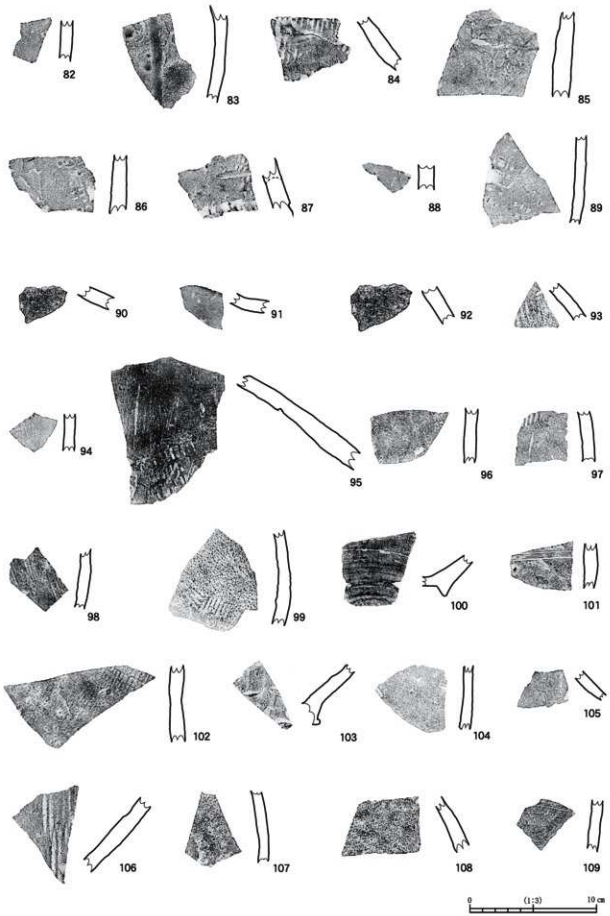


図26 25SD3・7 出土遺物（2）

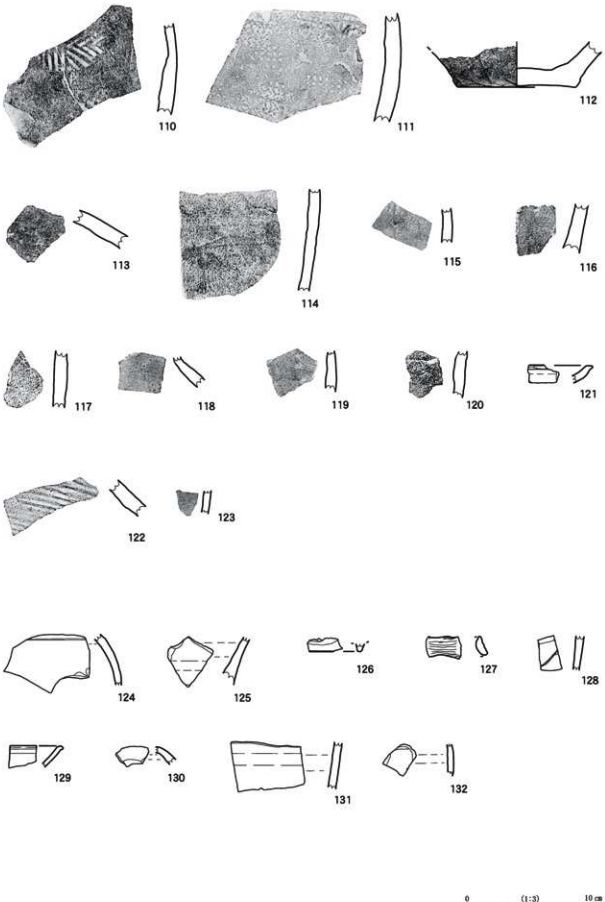


図27　25SD3・7 出土遺物（3）

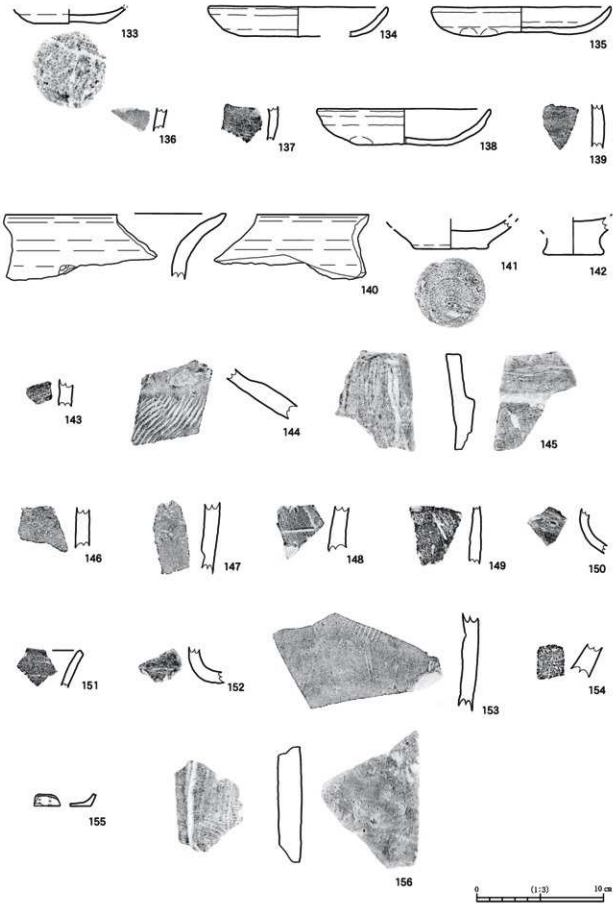

133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
0
(1:3)
10 cm

図28　遺構内出土遺物

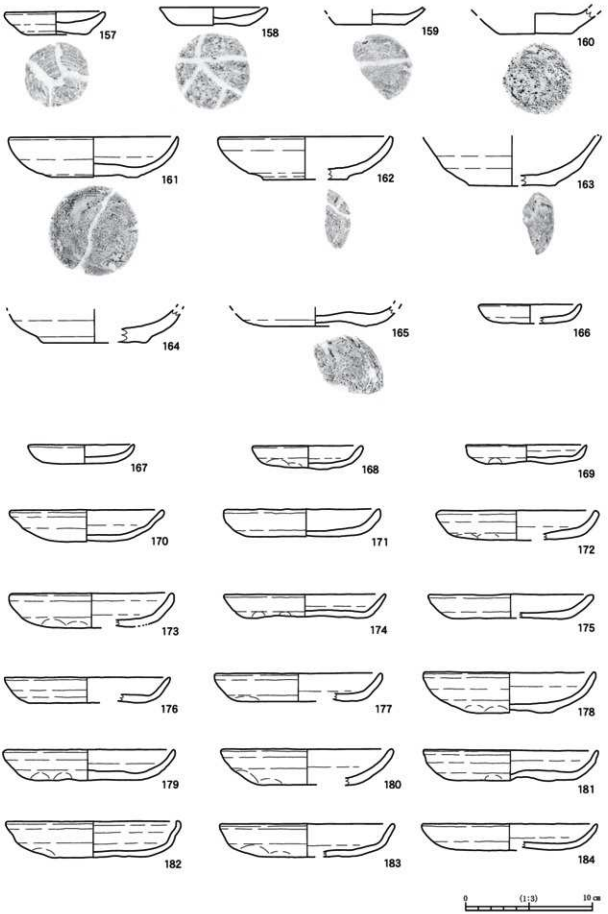


図29　遺構外出土遺物（1）

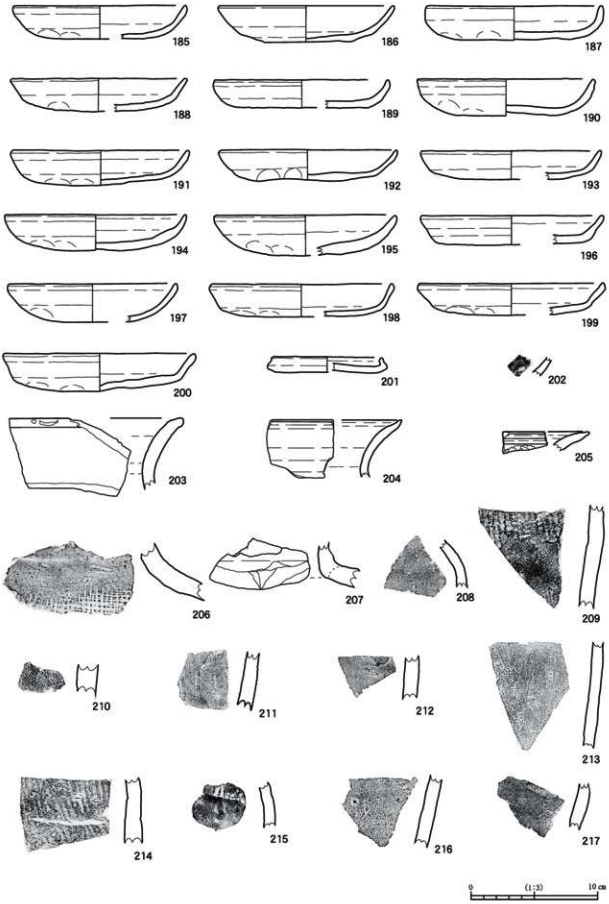


図30　遺構外出土遺物（2）

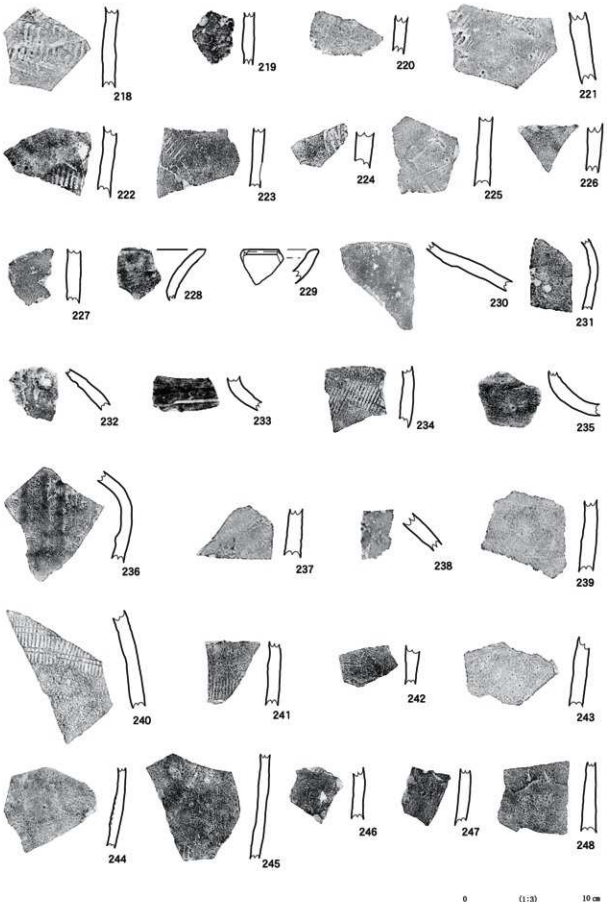


図31　遺構外出土遺物（3）

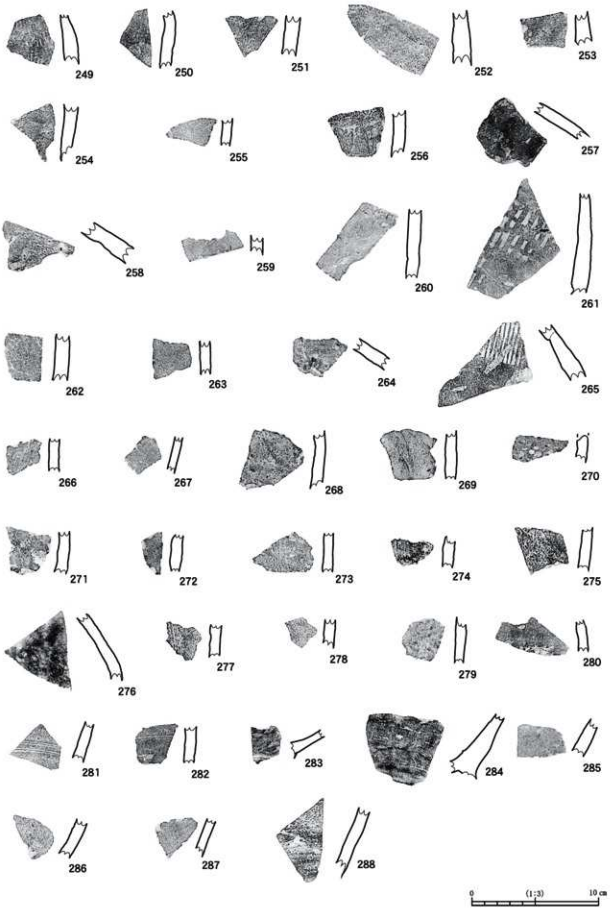


図32　遺構外出土遺物（4）

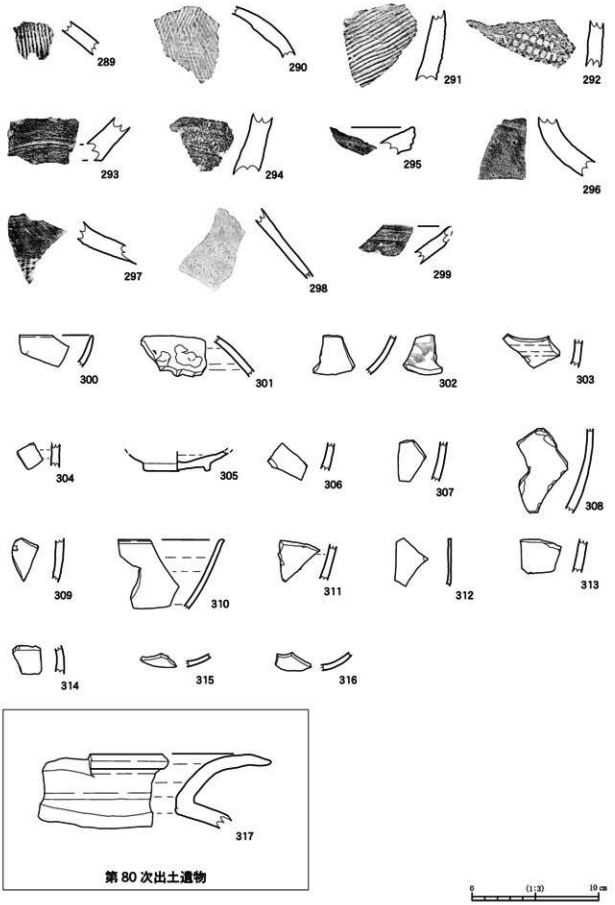


図33　遺構外出土遺物（5）

表６－１ 遺物観察表（かわらけ）

図版番号	遺物番号	器種名	出土遺構名 出土点数	出土遺構 出土点数	色調	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	残存率 (%)	色調	備考
1	ROk38	ロクロ小		23SD2 面紀(25 34)	砂質ヘ層	9.0	1.6	(6.4)	66.6	100	7.5YR7/6橙	海綿骨針、雲母含む
2	ROk35	ロクロ大		23SD2 面紀(25 34)	砂質ヘ層			(7.4)	101	30	7.5YR6/4にぶい橙	海綿骨針、雲母含む(ナデ)ニゴ和小粒砂粒に含む、雲母含む
3	ROk15	手づくねか		23SD2 東紀(28 35)	粗土下位	(8.0)	1.8		28.1	40	2.5Y8/3浅黄	海綿骨針含む(多量)
4	ROk78	手づくねか		23SD2 東紀(28 35)	粗土下位	(8.4)	1.3		15.9	35	2.5Y8/3浅黄	雲母含む
5	ROk74	手づくねか		23SD2 中央部(27 34)	粗上下位	(8.6)	1.7		29.1	45	10YR8/2灰白	雲母含む
6	ROk61	手づくねか		23SD2 東紀(28-35)	粗上ハード下位	(9.4)	1.2		10.1	80	10YR8/3浅黄橙	
7	ROk75	手づくねか		23SD2 西紀(25-34)	粗上下位(砂質層)	(9.8)	1.0		25.1	35	2.5Y8/2灰白	雲母含む
8	ROk64	手づくねか		23SD2 東紀(28-35)	粗上ハード下位	(10.7)	2.2		16.5	40	2.5Y8/2灰白	
9	ROk62	手づくねた		23SD2 東紀(28-35)	粗上ハード下位	(11.3)	1.5	-	26.9	25	10YR8/3浅黄橙	雲母含む
10	ROk54	手づくねた		23SD2(25-34)	粗上ハ位	(11.9)	1.9	-	28.1	30	10YR8/3浅黄橙	雲母含む
11	ROk56	手づくねた		23SD2(28-35)	粗上ハ位	(12.2)	2.6	-	25.8	25	10YR8/3浅黄橙	底部スノコ痕あり
12	ROk16	手づくねた		23SD2 中央部(27-34)	粗上段下層	(12.4)	2.3	-	51.8	40	10YR8/3浅黄橙	底部スノコ痕あり
13	ROk52	手づくねた		23SD2 東紀(28-35)	粗上下位	(12.4)	1.9	-	36.6	25	10YR7/2にぶい黄橙	海綿骨針含む
14	ROk63	手づくねた		23SD2 東紀(28-35)	粗上ハード位	(12.8)	2.0	-	20.5	10	2.5YR8/2灰白	
15	ROk57	手づくねた		23SD2 東紀(28-35)	粗上下位 (砂質七十層)	(13.0)	2.5	-	51.1	25	2.5Y7/2灰黄	海綿骨針含む(少量)
16	ROk67	手づくねた		23SD2 東紀(28-35)	粗上下位 (砂礫七十層)	(13.0)	2.6	-	21.7	25	2.5Y8/3浅黄	底部スノコ痕あり
17	ROk79	手づくねた		23SD2 東紀(28-35)	粗上段下層	13.2	2.9	-	32	25	2.5Y8/2灰白	雲母含む、底部スノコ痕あり
18	ROk107	手づくねた		23SD2 東紀(28-35)	粗上ハード位	(13.4)	2.6	-	30	25	2.5Y8/3浅黄	
19	ROk68	手づくねた		23SD2 東紀(28-35)	粗上下位 (砂礫七十層)	13.6	2.7	-	38.8	25	2.5Y8/2灰白	海綿骨針含む、雲母含む
20	ROk70	手づくねた		23SD2 西紀(25 34)	粗上下位(砂質層)	(13.6)	2.7	-	22.6	25	2.5Y7/2灰黄	海綿骨針含む
21	ROk80	手づくねた		23SD2 東紀(28 35)	粗上段下層	(13.6)	2.7	-	20.5	25	10YR8/2灰白	
22	ROk66	手づくねた		23SD2 東紀(28 35)	粗上ハード下位	(13.8)	1.9		16.8	25	2.5Y8/2灰白	雲母含む
23	ROk59	手づくねた		23SD2 東紀(28 35)	粗上下位 (砂礫七上層)	(14.0)	2.8		33.6	25	2.5Y8/2灰白	雲母含む(少量)
24	ROk73	手づくねた		23SD2 東紀(28 35)	粗上下位	(14.0)	3.2		45.4	35	10YR8/2灰白	底部スノコ痕あり
25	ROk76	手づくねた		23SD2 東紀(28 35)	粗上下位	(14.5)	2.0		16.5	35	10YR8/1灰白	雲母含む
26	ROk81	手づくねた		23SD2 東紀(28-35)	粗上段下層	(14.8)	2.6		18.4	25	2.5Y8/3浅黄	雲母含む
27	ROk77	手づくね		23SD2 中央部(27-34)	粗上下位				5.1	25	2.5Y6/1にぶい黄	用途有機物付着あり
48	ROk41	ロクロ大		80SD1 (26・27-35・36)	粗上上位 (肥一黒褐色上層)			(5.6)	16.1	25	7.5YR7/2にぶい橙	海綿骨針含む(少量)
49	ROk43	手づくねか		80SD1 (26・27-35・36)	粗上上位 (肥一黒褐色上層)	(8.0)	1.7	-	7.7	25	2.5Y7/4浅黄	雲母含む
50	ROk71	手づくねか		80SD1(27-36)	粗上ハ位	(8.8)	1.7	-	11.5	25	2.5Y8/2灰白	
51	ROk46	手づくねか		80SD1 (26・27-35・37)	粗上上位 (肥一黒褐色上層)	(10.4)	1.8	-	16.3	25	2.5Y8/3浅黄	雲母含む
52	ROk52	手づくねた		80SD1(27-36)	粗上上位	(11.4)	1.7	-	18.5	40	5YR7/4にぶい橙	雲母含む
53	ROk65	手づくねた		80SD1(27-36)	粗上下位一中位 (砂礫七十と乳七十の混合二)	(13.0)	2.4	-	23.9	25	10YR8/2灰白	
54	ROk69	手づくねた		80SD1(27-36)	粗上ハ位	(13.2)	2.5		18.3	25	2.5Y8/3浅黄	雲母含む　内面に漆膜付着
55	ROk39	手づくねた		80SD1 (26・27-35・36)	粗上上位 (肥一黒褐色十層)	13.8	2.5	-	21.2	25	10YR8/4浅黄橙	雲母含む
56	ROk42	手づくねた		80SD1 (26・27-35・36)	粗上上位 (肥一黒褐色上層)	(15.1)	2.0		22.5	25	10YR8/3浅黄橙	
57	ROk87	手づくね		80SD1(27-36)	粗上中一下位	-	-	-	17.5	25	10YR8/2灰白	底部スノコ痕あり
62	ROk17	ロクロ小		23SD3・7	底面	8.6	2.2	5.8	73.5	100	10YR8/2灰白	

（ ）は推定値

表６－２　遺物観察表（かわらけ）

挿図番号	図版番号	器種名	八潮構跡出土遺構	八潮構跡出土現況	層位	特徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	残存率(%)	色調	備考
63	RO6.18	ロクロ小			25SD3・7	灰中下位	9.5	2.3	3.9	82	90	10YR7/4にぶい黄橙	海綿骨針含む
64	RO6.106	ロクロ			25SD3・7（24・34）	灰中上位（暗褐色ローム ブロック混 紅褐色ローム層）			(3.2)	18.3	30	10YR7/4黄橙	軟質弱い
65	RO6.53	ロクロ大			25SD3・7（28・35）	灰中中位（灰褐色ローム）			6.8	41	75	7.5YR8/3白	海綿骨針含む
66	RO6.50	ヘラくず小			25SD3・7（25・26・35）	灰中下位	(7.2)	1.3		15	30	10YR8/3浅黄	
67	RO6.50	ヘラくず小			25SD3・7（24・35）	灰中中位（粘土質暗褐色ローム）	(8.0)	1.5		31.5	10	10YR7/3にぶい黄橙	海綿骨針含む（多量）
68	RO6.8	ヘラくず小			25SD3・7（24・34・35）	灰中中位（灰褐色ローム）	(10.0)	2.4		21.1	25	2.5YR8/2白	海綿骨針、雲母含む
69	RO6.50	ヘラくず小			25SD3・7（25・26・35）	灰中上位（下面（褐色ローム ブロック混 暗褐色ローム層）	(12.0)	1.8		12.8	25	2.5YR8/3淡黄	
70	RO6.24	ヘラくず大			25SD3・7（25・26・35）	灰上中位	12.4	2.8		71.2	50	10YR8/3浅黄橙	海綿骨針、雲母含む
71	RO6.07	ヘラくず大			25SD3・7（25・26・35）	灰上下位	(12.2)	2.6	-	31	25	10YR7/3にぶい黄橙	海綿骨針含む
72	RO6.82	ヘラくず大			25SD3・7 東西（26・35）	灰上下位	(13.8)	3.0	-	13.1	25	2.5YR8/3桃白	
73	RO6.58	ヘラくず大			25SD3・7（28・36）	灰上下位（褐色ローブロック混 暗褐色土層）	(14.0)	2.9	-	27.1	25	10YR8/2灰白	
74	RO6.13	ヘラくず大			25SD3・7（28・36）	灰中中位（灰褐色ローム層）	(14.8)	3.5		67.3	40	10YR8/3浅黄橙	海綿骨針含む、スノコ痕あり
75	RO6.95	ヘラくず大			25SD3・7（25・26・35）	灰上下位	(14.8)	2.9	-	23.8	25	2.5Y8/3浅黄	
76	RO6.5	ヘラくず大			25SD3・7（26・36）	灰中中位（灰褐色ローム層）	(15.0)	2.7		73.1	30	2.5Y7/2灰黄	内面ヨコナデ痕あり、金雲母含む
77	RO6.32	ヘラくず大			25SD3・7 ベルト P1	灰上下部砂層上面	(13.0)	3.1	-	193	80	10YR8/2灰白	海綿骨針含む（多量）スノコ痕あり
78	RO6.23	ヘラくず大			25SD3・7（28・36）	灰上下位	(15.2)	3.7		44.8	25	2.5YR8/3桃白	海綿骨針、雲母含む
79	RO6.55	ヘラくず大			25SD3・7（28・36）	灰中上位（褐色ローブロック混 暗褐色土層）	(17.0)	3.5		38.8	75	10YR8/3浅黄橙	雲母含む
80	RO6.12	柱状高台			25SD3・7（25・35）	灰中上位（褐色ローブロック混 灰褐色土層）			6.4	100.5	40	7.5YR7/6橙	海綿骨針含む（多量）、雲母含む、使う面の痕跡も、器誤著しい
81	RO6.35	須恵平瓦			25SD3・7	灰中中位（褐色ローブロック混 暗褐色土層）			9.2	238.5	30	10YR7/4にぶい黄橙	海綿骨針含む（多量）、雲母含む
133	RO6.51	ロクロ			83SD1（27・37）	灰中	-	-	5.2	39.3	30	5YR6/6橙	雲母含む、焼成甘い
134	RO6.4	ヘラくず大			83SD1（35・35）	灰中上位（灰褐色土層）	(14.2)	2.3	-	13.4	30	10YR7/3浅黄橙	内面に油煙伝着？ 海綿骨針、雲母含む
135	RO6.33	ヘラくず大			83SD1 東側	灰中	14.2	3.5		149.7	98	10YR8/3桃白	雲母含む
138	RO6.22	ヘラくず大			83SA1	灰中	(13.6)	3.8		43.9	75	10YR8/3浅黄橙	側面ナデ、底部スノコ痕あり
141	RO6.14	ロクロ大			83SK1（26・35）	灰中中位（黄褐色ローム層下位）			5.8	139.1	80	10YR7/3にぶい黄橙	海綿骨針（多量）含む 雲母含む
142	RO6.34	柱状高台			81P103	灰中上面			4.8	75.3	30	7.5YR7/6橙	海綿骨針含む
157	RO6.6	ロクロ小			26 33	カクラン	7.8	1.8	(5.8)	49	90	7.5YR7/6橙	焼成甘い
158	RO6.20	ロクロ小	23 39	23 39 SK4 上面	昭和色土層 撹乱面		8.6	1.4	(6.1)	56.4	90	7.5YR7/6橙	焼成甘い
159	RO6.92	ロクロ小			24 36	昭和色土層 下部			5.5	38.8	25	7.5YR8/6浅黄橙	海綿骨針含む、焼成甘い
160	RO6.98	ロクロ大			24-39	撹乱面	-	-	(5.6)	114.2	70	10YR8/3浅黄橙	焼成甘い
161	RO6.27	ロクロ大	24-36		24-36（西隅）	昭和色土層	13.4	3.3	6.9	146.5	70	7.5YR8/4浅黄橙	海綿骨針、雲母含む 小石含む
162	RO6.20	ロクロ大	24-36		24-36（拡トレンチ分）	昭和色土層 下部（褐灰色土）	(13.8)	3.4	(6.6)	42.3	30	7.5YR7/6橙	雲母含む
163	RO6.5	ロクロ大			25-36	褐色土層 上面	-	-	(6.8)	54	25	10YR8/3浅黄橙	
164	RO6.109	ロクロ大			25-35	暗褐色土層	-	-	(8.4)	39.3	25	10YR8/4浅黄橙	海綿骨針含む、焼成甘い
165	RO6.102	ロクロ大			27-33	カクラン	-	-	(7.8)	40.3	25	10YR7/3にぶい黄橙	海綿骨針含む、焼成甘い
166	RO6.103	ヘラくず小			27-36	暗褐色土層	(8.0)	1.5	-	12.1	25	10YR8/3浅黄橙	
167	RO6.11	ヘラくず小			23-39	黒土上位（褐色土ブロック混 灰褐色土層）	8.8	1.4	-	51.9	80	10YR8/3浅黄橙	
168	RO6.100	ヘラくず小			23-39	暗褐色土層 撹乱面	(8.8)	1.8	-	35.6	30	2.5YR7/3浅黄	雲母含む、焼成甘い
169	RO6.6	ヘラくず小			24-34・35	灰褐色土層	9.6	1.6	-	43.6	70	10YR7/4浅黄橙	海綿骨針含む

（　）は推定値

表６－３　遺物観察表（かわらけ）

図版番号	遺物番号	遺物名	出土遺構名 出土地点	出土遺構 出土地点	色調	口径 (cm)	底径 (cm)	高台径 (cm)	重量 (g)	残存率 (%)	色調	備考
170	ROK101	手づくねかわらけ		24-36	暗褐色土層	(12.0)	2.5	-	17.7	25	7.5YR8/4浅黄橙	雲母含む(少量)
171	ROK47	手づくねかわらけ		33・35・36	暗褐色土一 灰褐色土層	(12.0)	2.1		48.3	45	7.5YR8/4浅黄橙	海綿骨針含む、雲母含む
172	ROK36	手づくねかわらけ	25・27	トレンチ1③ 盛土	暗褐色土層	(12.0)	2.3		27.5	35	10YR8/3浅黄橙	
173	ROK63	手づくねかわらけ		24・36	暗褐色土層 上部	(13.0)	2.7		34.9	35	10YR7/4にぶい黄橙	雲母含む(少量)、赤褐斑い
174	ROK89	手づくねかわらけ		24・36	暗褐色土層 下部	(13.0)	1.9		35.8	35	10YR8/3浅黄橙	
175	ROK49	手づくねかわらけ		23・39	暗褐色土層	(13.1)	1.9		39.1	30	10YR8/3浅黄橙	海綿骨針含む
176	ROK88	手づくねかわらけ		24・36	褐色粘土層 (ブロック状)	(13.2)	2.0		35.8	25	7.5YR8/4浅黄橙	
177	ROK90	手づくねかわらけ		24・36	暗褐色土層 下部	(13.2)	2.2		29.8	25	10YR8/4浅黄橙	雲母少に含む
178	ROK7	手づくねかわらけ		24・34・35	暗褐色土一 灰褐色土層	(13.6)	3.2	-	72.6	40	2.5Y7/3浅黄	海綿骨針含む
179	ROK8	手づくねかわらけ		23・25・36	暗褐色土層	13.6	2.4	-	166.6	80	10YR7/3浅黄橙	摩滅著しい
180	ROK168	手づくねかわらけ		28・36	―	(13.6)	2.8	-	18	25	2.5YR8/3淡黄	
181	ROK2	手づくねかわらけ		27・36	暗褐色土層	(13.8)	2.4	-	65.9	40	2.5Y7/3浅黄	海綿骨針、雲母含む
182	ROK31	手づくねかわらけ		24・36	暗褐色土層	13.8	2.9	-	88	70	2.5YR8/4浅黄	海綿骨針、雲母含む
183	ROK54	手づくねかわらけ		24・36	暗褐色土層 下部	(13.8)	2.6	-	20.8	25	10YR7/4にぶい黄橙	海綿骨針含む、摩滅著しい
184	ROK58	手づくねかわらけ		24・36	暗褐色土層 下部	(13.8)	2.1	-	38.1	25	10YR8/3浅黄橙	海綿骨針含む
185	ROK105	手づくねかわらけ		27・34	カクラン	(13.8)	2.3	-	17.9	25	10YR8/3浅黄橙	
186	ROK38	手づくねかわらけ	調査区 南西	下段重機掘溝	暗褐色土層	(13.9)	2.9	-	58.6	30	10YR8/3浅黄橙	海綿骨針含む
187	ROK10	手づくねかわらけ		23・39	暗褐色土層	(14.0)	2.6	-	83.7	40	2.5YR6/3鈍橙	海綿骨針、雲母含む
188	ROK37	手づくねかわらけ	24・33	トレンチ6 盛土層		(14.0)	2.6	-	37.3	25	10YR8/3浅黄橙	
189	ROK44	手づくねかわらけ		28・36	暗褐色土層	(14.0)	2.2	-	40.8	40	10YR8/4浅黄橙	海綿骨針含む 炭粒スノコ痕あり
190	ROK21	手づくねかわらけ		24・36	褐色粘土層 (ブロック状)	(14.0)	2.9	-	138	80	10YR8/2灰白	炭粒スノコ痕あり
191	ROK30	手づくねかわらけ	24・36	24・36(北面)	暗褐色土層	14.1	2.8		96	80	10YR8/3浅黄橙	
192	ROK19	手づくねかわらけ		24・36	暗褐色土層 下部	14.1	2.6		142.6	95	10YR8/3浅黄橙	海綿骨針含む 炭粒スノコ痕あり
193	ROK91	手づくねかわらけ		24・36	暗褐色土層 下部	(14.2)	2.2		38.8	35	7.5YR8/3浅黄橙	
194	ROK9	手づくねかわらけ		23・39	暗褐色土層	(14.4)	2.8		125.5	70	2.5YR8/3浅黄	海綿骨針、雲母含む
195	ROK86	手づくねかわらけ		24・36	暗褐色土層 下部	(14.4)	3.1		52.4	25	10YR7/4にぶい黄橙	雲母含む
196	ROK99	手づくねかわらけ		24・39	暗褐色土層	(14.4)	2.3		34.6	25	10YR8/4浅黄橙	雲母含む
197	ROK164	手づくねかわらけ		27・36	暗褐色土層	(14.4)	3.0		18.6	25	10YR8/3浅黄橙	
198	ROK94	手づくねかわらけ		24・35	暗褐色土層	(14.6)	2.6	-	23.9	25	10YR8/4浅黄橙	
199	ROK85	手づくねかわらけ		24・36	暗褐色土層 下部	(14.8)	2.5	-	24.3	25	7.5YR8/3浅黄橙	
200	ROK29	手づくねかわらけ		24・36	褐色粘土層	15.2	3.0	-	166.5	80	10YR8/4浅黄橙	海綿骨針含む(少量) 摩滅著しい
201	ROK5	土師皿		28・33	褐色土層 上面	(9.6)	1.2		20.7	35	2.5YR8/3淡黄	雲母含む
202	ROK1	手づくねかわらけ	25・32	トレンチ1②	表土一盛土層	-	-	-	1.8	-	7.5YR7/4にぶい橙	焼の調整さ

（　）は推定値

表７－１　遺物観察表（国産陶器）

挿図番号	登録番号	八雲機界出土地点	出土遺構・出土地点	層位	種別（器種）	器種系	部位	重量（g）	色調	備考
28	ROU154		25SD2東部(28-35)	表土下層(黒色土層)	陶器	瓶類	体部上位	71.6	外:10YR6/1灰 内:7.5Y7/1白	釉薬・外面に釉滴
29	ROU155		25SD2東部(28-35)	表土中～下層	陶器	瓶類	頸部	159.9	外:N7/灰白 内:5Y5/1灰	
30	ROU144		25SD2中央部(37-34)	表土～盛土層(1層)	陶器	瓶類	体部	36.9	外:7.5YR3/4にぶい褐 内:10YR6/2灰黄褐	
31	ROU143		25SD2中央部(37-34)	表土～盛土層(1層)	陶器	瓶類	頸部	32.4	外:5Y6/2灰オリーブ 内:N5/灰	外面に釉滴
32	ROU138		25SD2中央部(37-34)	表土～盛土層(1層)	陶器	瓶類	体部	40.4	外:5Y7/1灰白 内:5Y8/1灰白	
33	ROU145		25SD2東部(28-35)	表土～盛土層(7層色上層)	陶器	壺類	体部	13.2	外:N5/灰 内:N6/灰	釉薬
34	ROU163		25SD2中央部(37-34)	表土～盛土下層	陶器	壺類?	口縁部	14.2	外:2.5Y7/2灰黄 内:2.5Y6/3オリーブ褐	
35	ROU164		25SD2東部(28-35)	表土～盛土下層	陶器	壺類	体部	8.1	外:2.5Y3/2黒褐 内:2.5Y6/3オリーブ褐	
36	ROU157		25SD2中央部(28-34)	表土下位	陶器	壺類	体部	21.6	外:2.5YR2/2極暗赤褐 内:7.5YR5/3にぶい褐	
37	ROU156		25SD2中央部(28-34)	表土下位	陶器	鉢類	底部	19.7	外:5Y8/1灰白 内:2.5Y7/2灰黄色	
38	ROU160		25SD2東部(28-35)	表土下位	陶器?	鉢類	底部	28.0	外・内:5Y7/1灰白	
39	ROU158		25SD2東部(28-35)	表土下位(褐色土層)	陶器?	壺類	体部	10.7	外:5Y5/3オリーブ黄 内:5Y6/3オリーブ黄	
40	ROU159		25SD2東部(28-35)	表土～中～下位	陶器	鉢類	口縁部	9.6	外・内:5Y7/1灰白	
41	ROU137		25SD2(28-35)	表土～中位	陶器?	壺類	胴部	73.3	外:7.5Y6/2灰オリーブ 内:2.5Y3/1黒褐	外面に釉滴
42	ROU153		25SD2(28-35)	表土～中位(褐色土層)	陶器	壺類	胴部	73.7	外:2.5Y7/1灰白 内:7.5YR3/3にぶい褐	
43	ROU141		25SD2中央部(37-34)	表土～下位(1層)	陶器	壺類	胴部	31.9	外:7.5Y6/1褐灰 内:N7/灰	
44	ROU148		25SD2(28-35)	表土～下位	陶器?	鉢類	口縁部～体部	33.4	外・内:5Y7/1灰白	
58	ROU181		8SD1(27・28-36)	表土～下位	磁器	碗類	体部	14.9	外・内:N3/灰	釉薬
59	ROU127		8SD1(27-37)	表土～下位(青褐色土ブロック混灰層色土層)	陶器	碗類	底部～体部	33.3	外:7.5YR6/2灰褐 内:5YR6/2灰褐	釉薬
60	ROU126		8SD1(27-37)	表土～下位(青褐色土ブロック混灰層色土層)	陶器	碗類	底部～体部	143.2	外:2.5Y3/1黒灰 内:5YR6/1褐灰	釉薬
61	ROU189		8SD1東部	表土～下位(褐色土層)	陶器?	碗類	体部	16.6	外:2.5YR6/3にぶい黄 内:2.5YR3/1黒褐	
62	ROU162		25SD3・7(28-36)	表土中位	陶器?	鉢類?	体部	14.0	外:7.5YR2/1黒 内:N6/灰	
63	ROU147		25SD3・7(28-36)	表土～下位下部(5層色～ブロック混灰化層)	陶器	壺類	体部上位	44.0	外:5YR5/1灰 内:2.5YR7/1黄灰	外面に釉滴
64	ROU7		25SD3・7	地円層～表～盛土位(青褐色混合土層)	陶器	壺類	体部上位	30.2	外:N2/黒灰 内:2.5Y7/1黄灰	釉薬・外面に釉滴
65	ROU194		25SD3・7	表～盛土層	陶器?	壺類	体部	107.2	外:N2/黒灰 内:N5/灰	釉薬?
66	ROU136		25SD3・7 中央部(28-34)	表～盛土層(1層)	陶器	壺類	体部	33.0	外:5PB6/1明青灰 内:N5/灰	釉薬
67	ROU192		25SD3・7(28・36-35)	表～盛土層	陶器	壺類	体部	39.3	外:5Y6/1灰 内:N5/灰	釉薬
68	ROU146		25SD3・7(28-36)	表～盛土層(褐色～ブロック混層色上層)	陶器	壺類?	体部上位	13.6	外:5Y5/1灰 内:5Y6/1灰	
69	ROU133		25SD3・7 中央部(28-35)	表～盛土下部	陶器	壺類	体部	49.7	外:7.5Y7/2灰白 内:N6/灰	釉薬・外面に釉滴
90	ROU29		25SD3・7	地円層～表～盛土位(褐色土層)	陶器	壺類	口部	33.7	外:10YR7/1灰 内:5Y6/1灰	
91	ROU131		25SD3・7(28-36)	表～盛土層(褐色～ブロック混層褐色上層)	陶器	壺類	胴部～口部	17.6	外:N6/灰 内:N5/灰	
92	ROU94		25SD3・7(28-35)	可能色上層(表上層)	陶器?	壺類	口部	38.8	外:2.5Y6/1黄灰 内:5Y6/1灰	
93	ROU130		25SD3・7(28-35)	表～盛土層(褐色上ブロック混層褐色上層)	陶器	壺類	口部	12.4	外:7.5YR5/3にぶい褐 内:2.5Y3/1黒灰	釉薬
94	ROU95		25SD3・7(28-35)	表～盛土層(褐色上層)	陶器	壺類	体部	12.0	外:5Y5/1灰 内:5Y6/1灰	
95	ROU184		25SD3・7(28-35)	表～盛土層	陶器	壺類	口部	199.2	外:5YR5/1灰褐 内:5Y5/1灰	釉薬
96	ROU126		25SD3・7(28-35)	表～下位(砂層下位)	陶器	壺類	体部	37.8	外:10YR4/2にぶい黄褐 内:10YR3/1黒	
97	ROU130		25SD3・7(28-35)	表～下位(砂層下位)	陶器	壺類	体部	27.0	外:10YR7/1灰白 内:7.5YR3/3にぶい褐	釉薬
98	ROU178		25SD3・7(28-36)	表～下位(青灰層)	陶器?	壺類	体部	21.2	外・内:2.5Y7/4黄褐	

表７－２ 遺物観察表（国産陶器）

図版番号	登録番号	正式遺構名・出土地点	出土遺構・出土地点	層位	層位(遺物)	時代名	器種	重量(g)	色調	備考
99	RO0110		2SSD3・7(24-34)	埋土下位(粘質土層)	古墳	奈良期	甕	59.1	外:2.5YR4/2黒褐 内:2.5YR4/1黒灰	刷目
100	RO0111		2SSD3・7(24-34)	埋土下位(粘質土層)	古墳？	奈良期	甕	58.2	外:2.5Y7/1灰白 内:2.5Y7/2灰白	
101	RO0177	2SSD3・7	2SSD3・7 S10の下	埋土下位	古墳	奈良？	鉢	24.7	外:10YR4/1褐灰 内:10YR5/3にぶい黄褐	二次火熱？
102	RO0171	2SSD3・7	2SSD3・7(7)	暗褐色土層(埋土上上位)	古墳	奈良期	鉢	70.3	外:7.5YR4/3褐 内:10YR5/4にぶい黄褐	刷目
103	RO0188		3SSD3・7(26-35)	埋土下位(粘砂層)	古墳	奈良期	甕	22.5	外:10YR5/3にぶい黄褐 内:2.5Y5/3黄褐灰	
104	RO0183		3SSD3・7(26-35)	埋土下位(粘砂層)	古墳	奈良期	鉢	31.8	外:10YR5/3にぶい黄褐 内:2.5Y5/3黄褐灰	
105	RO0118		3SSD3・7(24-34)	埋土下位(粘質土層)	古墳	奈良期	甕	14.9	外:2.5Y7/2灰白 内:2.5YR5/3にぶい黄褐	外行に降灰有
106	RO0193		3SSD3・7(25・26-35)	埋土中位	古墳？	奈良期	鉢	74.1	外:2.5Y6/1黄灰 内:5Y6/1明灰	刷目
107	RO0140		3SSD3・7(25-35)	埋土中位(砂質土層)	古墳	奈良期	鉢	25.0	外:2.5YR5/4にぶい赤褐 内:7.5YR6/4にぶい橙	
108	RO0130		3SSD3・7 中央部(25-35)	埋土上位下部	古墳	奈良期	鉢底部・平	46.0	外:10YR3/2黒褐 内:10BG7/1青黒	外理に降灰有
109	RO0148		3SSD3・7(27-36)	埋土上位下部(褐色土ブロック混灰褐色土)	古墳？	奈良期	鉢	16.9	外:2.5Y7/4浅黄 内:2.5Y7/3浅黄	
110	RO0145		3SSD3・7(25-35)	埋土上位(褐色土ブロック混褐色土層)	古墳	奈良期	鉢底部・平	120.7	外:7.5Y5/3灰オリーブ 内:2.5Y5/2黒灰黄	刷目・外面に降灰有
111	RO0135		3SSD3・7 中央部(25-35)	埋土下位	古墳	奈良期	鉢底部	191.1	外:5Y7/2灰白 内:5YR6/3にぶい橙	刷目
112	RO0129		3SSD3・7(27-36)	埋土上位(黄褐色土ブロック混灰褐色土層)	古墳	奈良期	蓋底	310.6	外:10YR5/3にぶい黄褐 内:7.5YR5/1褐灰	
113	RO0119		3SSD3・7(25-35)	埋土上位(褐色土ブロック混褐灰色土層)	古墳	奈良期	甕口部	30.9	外:5Y6/3オリーブ黄 内:2.5Y6/2灰黄	
114	RO0128		3SSD3・7	埋土西(～第1面上位(褐色土層西上層))	古墳	奈良期	鉢底	108.4	外:7.5YR5/3にぶい橙 内:5YR4/1褐灰	
115	RO0115		3SSD3・7(25-35)	埋土上位(褐色土ブロック混褐灰色土層)	古墳？	奈良期	鉢底	17.0	外:7.5Y6/1灰 内:7.5Y5/1灰	刷目
116	RO0143		3SSD3・7	埋土(第～黒褐色土層)	古墳	奈良期	鉢底・平	26.2	外:7.5YR6/3にぶい橙 内:10YR6/1褐灰	
117	RO0139		3SSD3・7	埋土(第～黒褐色土層)	古墳	奈良期	鉢底	17.7	外:10YR6/3にぶい黄橙 内:2.5Y6/4にぶい黄	
118	RO0190		3SSD3・7(24-34・35)	埋土上位(黒褐色土層)	古墳	奈良期	鉢底	15.0	外:5Y7/2灰白 内:2.5Y4/1黄灰	
119	RO0146		3SSD3・7	埋土(第～黒褐色土層)	古墳	奈良期	鉢底	16.6	外:7.5YR6/3にぶい橙 内:10YR4/1褐灰	
120	RO0142		3SSD3・7	埋土(第～黒褐色土層)	古墳？	奈良期	鉢底	14.2	外・内:2.5YR4/4黄褐	
121	RO0134		3SSD3・7 中央部(25-35)	埋土上位下部	古墳？	奈良期？	口縁部	3.8	外:5Y4/2灰オリーブ 内:5Y3/1オリーブ黒	
122	RO0175		3SSD3・7(25-35)	埋土上位(褐色土ブロック混褐色土層)	須恵器	奈良期	鉢底	33.4	外:5G/灰 内:N7/明白	タタキ目
123	RO0191		3SSD3・7(25・26-35)	埋土位	須恵器系ッ	奈良？	鉢底？	8.7	外・内:N5/灰	
125	RO0195	8SSD1	8SSD1面調	埋土一括	古墳？	奈良期	鉢底	6.5	外・内:2.5YR4/4黄褐	
126	RO0196	8SSD1	8SSD1面調	埋土一括	古墳？	奈良期	鉢底	11.1	外・内:2.5YR4/4黄褐	
139	RO0149		8SSA1(28-35)	埋土中位	古墳？	奈良期	鉢底	12.3	外:2.5YR4/6黄褐 内:2.5Y7/4浅黄	
140	RO0198		8SSA3	埋土下位	古墳	奈良期	口縁部	103.6	外:5YR4/1褐灰 内:7.5YR7/1灰白	
143	RO0147		8SSD3(34-39)	埋土上位	古墳	奈良期	鉢底	6.5	外:5Y7/1灰白 内:7.5YR5/4にぶい橙	
144	RO0142		8SSD5	埋土(第～黒褐色土層)	須恵器系	奈良期	甕底	85.7	外:5Y7/1灰白 内:2.5YR7/2灰黄	タタキ目
146	RO0171		8SSX1(24-40)	埋土一括	縄文	奈良期	鉢底	21.3	外:7.5Y5/2灰オリーブ 内:N6/灰	外理に降灰有
147	RO0176		8SSX1(24-40)	埋土中位(1層)	縄文	奈良期	鉢底	29.4	外・内:N6/灰	刷目
148	RO0169		8SSX1(24-40)	埋土一括	縄文	奈良期	鉢底	21.8	外:2.5Y6/1黄灰 内:2.5YR5/2灰白	
149	RO0173		8SSX1(24-40)	埋土一括	古墳	奈良期	鉢底	21.1	外:10YR7/1明灰 内:10YR6/1褐灰	
150	RO0172		8SSX1(24-40)	埋土一括	古墳	奈良期	蓋底	9.4	外:2.5Y7/2灰黄 内:N5/灰	
151	RO0175		8SSX1(24-40)	埋土一括	古墳	奈良期	口縁部	7.9	外:5Y7/1灰白 内:7.5Y7/1灰白	
152	RO0170		8SSX1(24-40)	埋土一括	古墳	奈良期	頸部	14.6	外:7.5Y5/3灰オリーブ 内:10YR6/3にぶい黄褐	外面に降灰有

表７－３　遺物観察表（国産陶器）

挿図番号	登録番号	八雲構跡出土地点	出土遺構・出土地点	器種	胎土	産地名	部位	重量（g）	色調	備考
153	ROU165		SI5X3（23-40）	瓶子か壺	密陶質	瀬戸	体部	141.7	外:2.5Y6/1黄灰 内:10YR6/2灰黄褐	釉掛
154	ROU168		SI5X3（24-40）	瓶子か壺	密陶質	瀬戸	体部	15.9	外・内:N8/灰白	
203	ROU60		25～27 32～34	カクラン	灰黄	美濃	口縁部	106.5	外:5Y7/1灰白 内:5Y5/3オリーブ	内面に鉄釉
204	ROU13	29-35	トレンチ3東端	碗か皿か	灰黄	美濃	口縁部	39.7	外:N5/灰 内:5Y5/3オリーブ	
205	ROU66	29-36	27-30	碗か皿か	灰黄	美濃	口縁部	11.6	外:7.5Y5/2オリーブ黄 内:7.5Y6/1灰	
206	ROU25		25・26 34・35	カクラン	灰黄	美濃	高～胴部	151.6	外:N6/3灰 内:N5/灰	釉掛
207	ROU26		24・25 33～35	碗か皿か	灰黄	美濃	高部	60.7	外:5Y5/3オリーブ 内:5Y7/1灰白	外面に鉄釉
208	ROU09		24-38	瓶か	灰白	美濃	胴部	20.6	外:2.5Y7/1灰白 内:N6/灰	
209	ROU2	25-33	トレンチ3区	瓶か壺か	灰黄	美濃	体部上半	84.2	外:2.5Y7/1灰白 内:2.5Y6/1黄灰	釉掛
210	ROU33		24・25-35・36	碗か皿か	灰白	美濃	体部上半	23.3	外:5Y6/3オリーブ 内:5Y7/1灰白	
211	ROU13	25-32	トレンチ3東端	碗か皿か	灰白	美濃	体部	31.2	外:7.5Y8/1黄灰 内:2.5Y5/1黄灰	
212	ROU16	25-32	トレンチ3西端	碗か皿か	灰黄	美濃	体部	23.3	外・内:N6/灰	
213	ROU20	25-33	トレンチ4北端武蔵	碗か皿か	灰黄	美濃	体部	68.1	外:5Y6/1灰 内:5Y7/1灰白	
214	ROU23	調査区山麓	表土直下検出遺構	碗か皿か	灰黄	美濃	体部	82.9	外・内:10YR7/1灰白	釉掛
215	ROU35		24・25-35・36	碗か皿か （EL25A1黄褐色土層）	灰黄	美濃	体部	35.5	外:2.5Y 3/2黒褐色 内:2.5Y 7/1灰	釉掛
216	ROU53		27-35	碗か皿か	灰黄	美濃	体部	33.5	外:N7/灰白 内:N6/灰	
217	ROU57		27-36	碗か皿か（B層）	灰黄	美濃	体部	31.1	外・内:2.5Y7/1灰白	
218	ROU76		26-35	碗か皿か	灰黄	美濃	体部	63.6	外:N4/灰 内:2.5Y6/1黄灰	釉掛
219	ROU79		26-35	碗か皿か	灰黄	美濃	体部	17.8	外・内:N3/灰	
220	ROU93		24-35	碗か皿か	灰黄	美濃	体部	23.3	外:5Y4/1灰 内:7.5Y5/1灰	
221	ROU199		26-35	碗か皿か	灰黄	美濃	体部	95.6	外:N7/灰白 内:N6/灰	釉掛
222	ROU123		25-35	カクラン	灰黄	美濃	体部	47.7	外:7.5Y6/1褐灰 内:N7/灰白	釉掛
223	ROU59		27-36	カクラン	灰黄	美濃	体部	40.9	外・内:7/N灰白	釉掛
224	ROU65	EI7 S36	27-36	碗か皿か	灰黄	美濃	体部	33.5	外:N5/灰 内:N4/灰	釉掛
225	ROU115	EI6 S35	25SD3・7溝（26-35）	カクラン	灰黄	美濃	体部	55.5	外:10YR7/1灰白 内:10YR6/2灰黄褐	
226	ROU73		27-36	碗か皿か	灰黄	美濃	体部	16.1	外:10YR6/1褐灰 内:10YR7/1灰白	
227	ROU95		24-35	碗か皿か	灰黄	美濃	体部	28.0	外:5Y6/1灰 内:7/1灰白	
228	ROU81		26-34	カクラン	浅黄	美濃	口縁部	21.6	外:10YR3/2黒褐 内:10YR5/2黒褐	
229	ROU38		24・25-35・36	碗か皿か （EL25A1黄褐色土）層	浅黄橙	美濃か	口縁部	9.8	外:2.5Y6/1黄灰 内:2.5Y8/1黄褐	
230	ROU4	25-36	トレンチ3西	碗か皿か	浅黄	美濃	口部	35.8	外:5Y5/4オリーブ 内:5Y6/4にぶい黄	
231	ROU7	28-36	トレンチ3東端	碗か皿か	浅黄	美濃	口～体部	23.2	外:5Y7/1灰白 内:10YR6/1褐灰	
232	ROU11	28-36	トレンチ3西端	碗か皿か	浅黄	美濃	口部	24.1	外:5Y5/3オリーブ 内:5Y5/1灰	
233	ROU36		24・25-35・36	碗か皿か （EL25A1黄褐色土）層	浅黄	美濃	底部	30.8	外:7.5Y5/2灰褐 内:10YR5/1褐灰	
234	ROU75		26-35	碗か皿か	黄灰	美濃	体部上半	34.6	外:5YR5/4にぶい赤褐 内:10YR6/2にぶい黄褐	釉掛
235	ROU66		25-35	碗か皿か（二次）	黄灰	美濃	底部	38.6	外・内:5YR5/4にぶい赤褐	
236	ROU96		26-39	カクラン	黄灰	美濃	口部	60.4	外・内:10YR4/1褐	
237	ROU122	25-35	EI5SD3・7溝（25-35	カクラン （厚さ1.5cm程度）	黄灰	美濃	体部	39.3	外:10YR6/1褐灰 内:7.5YR4/3褐	釉掛
238	ROU161		28-35	碗か皿か	黄灰	美濃	口部	18.7	外:5Y5/3灰オリーブ 内:2.5Y4/3オリーブ褐	

表７－４　遺物観察表（国産陶器）

図版番号	登録番号	正式遺構名・出土地点	出土遺構・出土地点	器種	産地	時代	部位	重量（g）	色調	備考
239	KO163		23-35	暗褐色土層　上位	常滑	鎌期	体部上半	27.2	外:10YR6/2灰黄褐 内:10YR6/3にぶい黄橙	
240	KO139		27-34	カクラン	常滑	鎌期	体部上半	91.1	外:2.5Y7/2灰黄 内:10YR7/3にぶい黄橙	釉有
241	KO154		27-36	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部上半	37	外:2.5Y7/2灰黄 内:2.5Y6/2灰黄	釉有
242	KO167		27-35	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	21.9	外:5YR6/1褐 内:10YR5/2灰黄褐	
243	KO165		27-36	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	63.1	外:2.5Y7/2灰黄 内:2.5Y5/4黄褐	
244	KO19	22-39	トレンチ2層	表土～暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	48.4	外:10YR6/3にぶい黄橙 内:5YR5/2灰褐	
245	KO130		24・25・35・36	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	60.4	外:10YR6/2灰黄褐 内:7.5YR6/4にぶい橙	
246	KO151		27-36	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	23.3	外:5Y5/1灰 内:10YR5/2灰黄褐	
247	KO152		27-36	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	21.9	外:10YR7/4にぶい黄橙 内:10YR5/4にぶい黄褐	
248	KO154		27-36	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	56.1	外:7.5YR4/3褐 内:7.5YR5/4にぶい橙	
249	KO158		28-36	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	20.0	外:10YR6/3にぶい黄橙 内:2.5Y7/3浅黄	釉有
250	KO174		27-35	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	11.9	外:10YR2/1黒 内:10YR4/1褐灰	
251	KO139		28-31	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	16.6	外:5YR3/2赤褐 内:N6/灰	
252	KO191		24-35	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	58.4	外:2.5YR5/8明灰黄 内:5YR5/3にぶい赤褐	
253	KO192		28-35	カクラン	常滑	鎌期	体部	17.4	外:5YR4/2灰褐 内:10YR3/1黒褐	
254	KO198		23・24-36	暗褐色土層　上位	常滑	鎌期	体部	14.2	外:7.5YR4/2灰褐 内:2.5Y5/2暗灰黄	
255	KO105		22・23-39	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	9.0	外:10YR5/3褐灰 内:2.5Y5/2暗灰	
256	KO148		27-36	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	22.7	外:5Y3/1灰 内:5Y6/1灰	釉有
257	KO184		25-35	暗褐色土層　上位	常滑	鎌期	肩部	30.8	外:5Y6/2灰オリーブ 内:2.5Y6/2暗灰黄	外面に線刻有
258	KO196		27-36	暗褐色土層	常滑	鎌期	肩部	32.8	外:5Y4/4褐オリーブ 内:10YR6/4明黄	
259	KO198		24-39	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	14.1	外・内:10YR4/2灰黄褐	
260	KO112		27-37	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	40.7	外:10YR6/3灰黄褐 内:7.5YR6/3にぶい褐	
261	KO113		27-37	暗褐色土層	常滑	鎌期	体部	83.3	外:5Y4/1灰 内:5YR4/2灰褐	釉有
262	KO174		27-37	カクラン	常滑？	鎌期？	体部	21.3	外:5Y6/2灰オリーブ 内:5Y5/2オリーブ灰	
263	KO179		24-36	暗褐色土層上部	常滑	鎌期	体部	10.9	外:2Y3/1黒灰 内:7.5YR5/1褐灰	
264	KO187	5・35	24-35（トレンチ分）	灰褐色土～暗色土層	常滑？	鎌期	胴部	21.1	外:7.5YR6/1褐灰 内:10YR7/1灰白	
265	KO186		調査区南東	現地表（江戸～近代）	常滑	鎌期	胴部	58.3	外:5YR6/2にぶい橙 内:10YR6/3にぶい黄橙	釉有
266	KO197	調査区南端	南北線　溝状遺構	－	常滑	鎌期？	体部	9.6	外:10YR4/2にぶい灰褐 内:7.5Y7/3明オリーブ	
267	KO202		27-36	暗褐色土層	常滑？	鎌期？	体部？	7.1	外・内:2.5Y8/2白	
268	KO203		27-37	カクラン	常滑？	鎌期	体部	27.8	外:2.5YR7/1灰黄 内:2.5YR7/1灰黄	
269	KO204		27-35	カクラン	常滑？	鎌期	体部	25.8	外・内:2.5YR4/1灰黄	
270	KO205		24・25-35・36	暗褐色土層	常滑？	鎌期	体部	10.8	外:2.5Y7/4灰黄 内:2.5YR4/1灰黄	釉有
271	KO206		23・24-36	暗褐色土層上位	常滑？	鎌期	体部	20.7	外・内:2.5YR4/1灰黄	
272	KO207		24・25-35・36	暗褐色土層	常滑？	鎌期	体部	6.3	外・内:2.5YR4/1灰黄	
273	KO208	25-37	トレンチ2層	表土層～遺土層	常滑？	鎌期	体部	17.8	外:2.5Y7/3灰黄 内:2.5Y7/4灰黄	
274	KO68	21-35	トレンチ1層	暗褐色土層	常滑？	鎌期	体部	11.4	外・内:2.5Y6/2灰黄	
275	KO144		23・26-35・36西側	暗褐色土層（にぶい黄褐色土）層	常滑？	鎌期	体部	19.2	外:2.5Y7/4灰黄 内:2.5YR4/1灰黄	
276	KO171		27-36	暗褐色土層	常滑？	鎌期	体部下半	30.0	外:5Y4/3褐オリーブ 内:10YR5/2灰黄褐	外面に線刻有

表７－５　遺物観察表（国産陶器）

挿図番号	図版番号	八雲機界出土地点	出土遺構・出土地点	層位	種別（器種）	産地名	部位	重量（ｇ）	色調	備考
277	ROi87		25-35	遺構色土層　上層	陶器？	瀬戸	体部	10.9	外:2.5Y7/3浅黄 内:2.5YR6/3浅黄	
278	ROi88		25-35	遺構色土層　上層	陶器？	瀬戸	体部	9.7	外・内:2.5Y7/4浅黄	
279	ROi89		25-35	遺構色土層　上層	陶器？	瀬戸	体部	13.9	外・内:2.5YR4/4黄褐	
280	ROi34		26～28・34・35	盛土層	不明	瀬戸	体部	13.9	外・内:2.5Y5/3暗灰黄	
281	ROi35		24・25・35・36	旧期色土層	陶器	瀬戸	体部	13.2	外:5YR4/1暗灰 内:2.5Y7/2明黄 釉:5Y6/3オリーブ灰	
282	ROi180	24-36	24-36第層	旧期色粘土層	陶器	瀬戸	体部	13.2	外・内:5Y6/1灰	
283	ROi49		28-35	旧期色土層	陶器	瀬戸	高台部	9.8	外・内:5Y7/1灰白	
284	ROi53		27-34	カクラン	陶器？	瀬戸	体部～高台部	64.5	外・内:2.5Y7/1灰白	
285	ROi63		27-36	旧期色土層	陶器？	瀬戸	体部下半	16	外・内:2.5Y7/1灰白	
286	ROi69		27-36	旧期色土層	陶器？	瀬戸	体部	13.1	外・内:2.5Y7/1灰白	
287	ROi82		28-35	旧期色土層	陶器？	瀬戸	体部	9.2	外:10YR8/1灰白 内:7.5YR8/1灰白	
288	ROi1	24-33	トレンチ1区	表土層	陶器？	瀬戸	体部	26.2	外:7.5Y6/1灰 内:7.5Y6/2灰オリーブ	
289	ROi6	24-35	トレンチ1区	遺構色土層	須恵器系	瀬戸	口部	16.5	外:5Y6/1灰 内:5Y7/1灰白	タタキ目
290	ROi31		25・26・34・35	カクラン	須恵器？	瀬戸	口部	41.7	外:7.5Y6/2灰オリーブ 内:5Y5/1灰	タタキ目
291	ROi70		27-33	カクラン	須恵器？	瀬戸	体部	66.5	外・内:2.5Y5/1黄灰	タタキ目
292	ROi78		27-34	カクラン	須恵器系？	瀬戸	体部？	34.8	外:5YR2/1黒褐 内:N5/N5灰	釉掛？
293	ROi80		27-34	カクラン	須恵器系	出雲？	底部	32.2	外:7.5Y5/1灰 内:5YR5/1灰	
294	ROi102	24-35	24-35上段南西隅	旧期色土層（遺構色土層の下）	須恵器系	出雲	底部	30.8	外:N7/N5灰 内:10Y7/1灰白	
295	ROi132	24-36	815K1(25-35)	瓦片下層（カタラン墓）	水注？	瀬戸	口縁部	22.9	外・内:N4/灰	285～297図　関係
296	ROi151	24-36	815K1(25-35)	瓦片下層（カタラン墓）	水注？	瀬戸	肩部	31.8	外・内:N4/灰	285～297図　関係
297	ROi150	24-36	815K1(25-35)	瓦片下層（カタラン墓）	水注？	瀬戸	肩部	36.2	外:N5/灰 内:N3/暗灰	285～297図　関係
298	ROi55		27-36	遺構色土層	陶器もしくは中国系磁器？		肩部？	35.1	外:10YR6/2灰黄褐 内:5YR6/4にぶい橙	黄褐？　強酸化焼成？
299	ROi117		26-35	カクラン	不明	不明	口縁部	13.8	外:7.5YR3/2灰褐 内:2.5Y7/3浅黄	

第80次出土遺物

挿図番号	図版番号	八雲機界出土地点	出土遺構・出土地点	層位	種別（器種）	産地名	部位	重量（ｇ）	色調	備考
317	ROi179		調査区西縁トレンチ(29-36・37-38)SD3底面部	盛土	陶器	瀬戸	口縁部	143.6	外:10YR2/2オリーブ黒 内:N7/N8灰白	

表 8 遺物観察表（中国産磁器）

図版番号	Q番号	正式遺構名 出土地点	出土遺構・出土地点	器種	材質	時代	部位	重量（g）	色調	備考
45	RQ027		23SD2東層（28-35）	碗十中位	白磁	青磁	体部	10.1	外：2.5Y8/1灰白 内：2.5Y8/2灰白	龍系
46	RQ025		23SD2東層（28-35）	碗底色外十(1層)	白磁	瓜	底部	2.1	外：5Y8/1灰白 内：2.5Y8/2灰白	V類？
47	RQ029		23SD2東層（28-35）	碗十最下層	青磁	龍	体部	5.8	外・内：5Y6/5Bオリーブ	龍泉類Ⅰ類
134	RQ031		23SD3・7	碗上下位	白磁	鳴川窯	胴部	20.6	外：2.5GY8/1灰白 内：5Y8/1灰白	龍系
135	RQ028		23SD3・7(28-36)	碗上中位	白磁	中期	体部下半	11.8	外：5Y8/2灰白 内：5Y7/1灰白	龍系
136	RQ026		23SD3・7(27-36)	碗上上位下部(高台)(ボロボロ ッタ盗掘橋脚上層)	白磁	不	高台	2.4	外・内：5Y8/1灰白	端部？
137	RQ024		23SD3・7(25-35)	碗上上位(橋脚ボロボロッタ 盗掘橋脚上層)	白磁	鳴川窯	口縁	3.3	外：2.5GY7/1明オリーブ灰	龍系
138	RQ018		23SD3・7(28-35)	碗上上位(盗掘橋脚二層)	白磁	中期	体部	5.2	外：2.5Y8/3淡黄 内：2.5Y8/3灰白	龍系
139	RQ017		23SD3・7(26-35)	碗上上位(盗掘橋脚二層)	白磁	龍	口縁部	3.4	外・内：7.5Y7/2灰白	V-1a類
140	RQ016		23SD3・7	碗上(第一遺構橋脚二層)	白磁	中期	胴部	4.3	外・内：2.5GY8/1灰白	龍系
141	RQ019		23SD3・7(26-35)	碗上下位(盗掘橋脚二層)	白磁	中期	体部	25.2	外：2.5Y8/2灰白 内：2.5Y8/2灰白	龍系
142	RQ027		23SD3・7	碗上(第一遺構橋脚二層)	白磁	中期	体部	5.7	外：7.5Y7/1灰白 内：5Y7/1灰白	龍系
153	RQ040		81SX1(24-40)	碗上・盤	白磁	合子	底部	8.2	外・内：7.5GY6/1緑灰	
300	RQ01		24-36	皿上一括上層	白磁？	龍	口縁部	6.2	外・内：2.5GY7/1明オリーブ灰	広東？
301	RQ04	24-36	トレンチ4山崎総業	皿上一括褐色土層	白磁	福建窯	口縁部	21.9	外・内：10Y7/1灰白	龍系 内皮空虫
302	RQ05		23・26-34・35	カクラン	白磁	龍	底部	7.8	外・内：10Y8/1灰白	V-1b類 見込みに輪跡
303	RQ08		26-35	暗褐色土層	白磁	宝瓶？	体部	8.9	外：5GY8/1灰白 内：2.5GY8/1灰白	龍系
304	RQ09		27-36	暗褐色土層(Ⅱ層)	白磁	宝瓶	体部	2.9	外・内：5Y8/2灰白	龍系
305	RQ012		27-36	暗褐色土層	白磁	龍	底部	26.2	外・内：5GY8/1灰白	V-1a類？ 見込み に いわゆる"蛇跡さ"
306	RQ013		26-35	暗褐色土層	白磁	青磁	体部	6	外：2.5Y8/1灰白 内：2.5Y8/3淡黄	龍系
307	RQ014		26-35	カクラン・暗褐色土層	白磁	青磁	体部	6.3	外：2.5Y8/1灰白 内：7.5Y8/3淡黄	龍系
308	RQ015		26-35	暗褐色土層	白磁	青磁	体部	19.5	外：2.5Y7/2淡黄 内：5B8/1白	龍系
309	RQ020		24-40	皿十層	白磁	青磁	体部	6	外・内：5Y7/1N白	龍系 内皮空虫
310	RQ023		26-35	カクラン	白磁	龍	口縁部～体部	13.7	外・内：5Y7/5A白	V-1a類
311	RQ031		24-36	暗褐色土層下部	白磁	青磁	体部	7.5	外・内：10Y7/1N白	
312	RQ032		調査区南東	盛土層(沢埋～近代)	白磁	青磁or瓜	体部	3.5	外・内：7.5Y7/1N白	青磁
313	RQ034	27-36	トレンチ南東拡張	皿上～暗褐色土層	白磁	青磁	体部	9.3	外：2.5Y8/2淡黄 内：2.5Y8/1灰白	龍系
314	RQ03	23-37	トレンチ2B	暗褐色土層	青磁	龍	体部	6	外・内：10Y6/2オリーブ灰	龍泉窯Ⅰ類
315	RQ010		27-36	暗褐色土層(Ⅱ層)	青白磁	不	体部	2.6	外・内：2.5GY8/1灰白	
316	RQ011	27-36	27-36		白白磁	不	体部	3.5	外：2.5GY8/1明緑灰 内：5GY8/1灰白	

表 9 遺物観察表（瓦）

図版番号	Q番号	正式遺構名 出土地点	出土遺構・出土地点	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	色調	備考
143	KT7		81SK3	瓦十上位			1.8	74.5		丸瓦
126	KT1		81SX1(24-40)	瓦十・柄	-	-	1.8	121.6		丸瓦

Ⅲ 総　　括

1　調査成果の概要

(1) 遺　構

今回の調査は、岩手県教育委員会の第80次調査で確認された25SD2と80SD1を道路側溝とする道路状遺構（80SC2）と25SD3・7と29SD1を道路側溝とする道路状遺構（80SC1）の道跡調査（具体的には道路状遺構の新旧関係と延伸方向の確認を重視した）と80SC1・2に関わりをもつ、周辺遺構（周辺施設）の調査を主な目的として行った。

道路状遺構を構成する道路側溝については、平泉町教育委員会において柳之御所遺跡第25次・第29次・第30次で調査が行われている。

第29次調査では、25SD2と25SD3・7を同時期の遺構と捉えられていたが、第30次調査で25SD2と25SD3・7の両者に時期差があることを示唆している。

岩手県教育委員会の第80次調査でも、80SC1と80SC2の配置から時期差があることを再確認することができた。しかし、新旧関係について言及するには至らなかった。

第81次調査では、80SC2の道路側溝80SD1が80SC1の道路側溝25SD3・7を切る土層断面（図13）が確認されたことで、80SC2と80SC1の新旧関係を明らかにすることができた。

80SC2新80SC1旧という結果が得られた。また、道路状遺構の側溝と並行に板塀や柱穴の痕跡が確認されている。

25SD3・7と対になる29SD1を確認することはできなかった。前述しているが、おそらく宅地造成による削平によって消失したものと思われる。

上記以外の遺構として、調査区北側に柱穴群が確認されているが、詳細な時期について言及することはできなかった。

(2) 遺　物

① かわらけ

第80次調査では、かわらけを多量に含む包含層が確認されている。包含層は、暗褐色包含層を上位・暗褐色～黒褐色包含層を中位・黒褐色包含層を下位として遺物の取り上げを行っている。

今回の調査では、第80次調査で確認された層位の中位・下位はほぼ存在せず、推測ではあるが上位に位置づけられる暗褐色土層が確認された。他のグリッドと比較して、この暗褐色土層が形成される24－36グリッドからの出土したかわらけが多い（9,778.5ｇ）。24－36グリッドは、個体となるものが出土しており、一括廃棄を想定させる出土状況であったことから、このグリッドから出土したかわらけ群は、大きな時期差はなく、ほぼ同時期に廃棄されたものと推定することができる。この24－36グリッドから出土したかわらけの特徴（法量・形態）について若干触れたい。

159・161・162は、ロクロかわらけで161・162は碗形を呈する。手づくねかわらけについては、概ね皿状を呈するものが大半を占める。底部から口縁部にかけての外形線に着目すると、緩やかに立ち上がるもの（170・171・192・195）、やや内わんして立ち上がるもの（173・179・184・190・191）、直立気味に立ち上がるもの（174・176・182・183・193）の、３種に大別することができる。

手づくねかわらけの法量については、口径が12.2㎝～15.2㎝、器高が1.9㎝～3.1㎝の範囲で、平均値は口径が13.6㎝、器高は2.5㎝である。

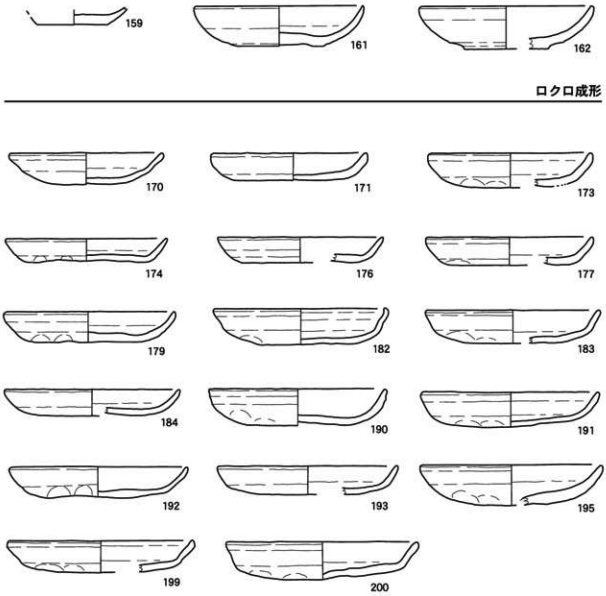
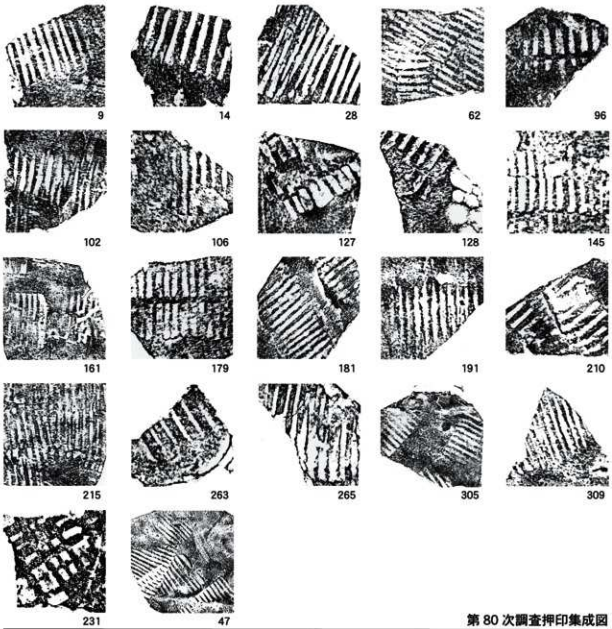
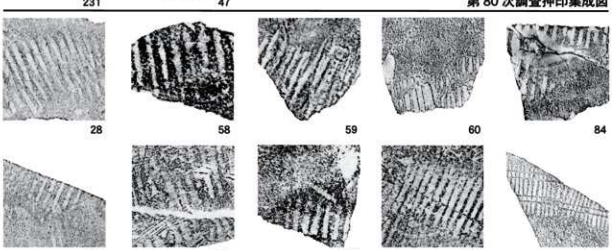


図34　24ー36グリッド出土遺物



第 80 次調査押印集成図



第 81 次調査押印集成図

図35　押印集成図（1）

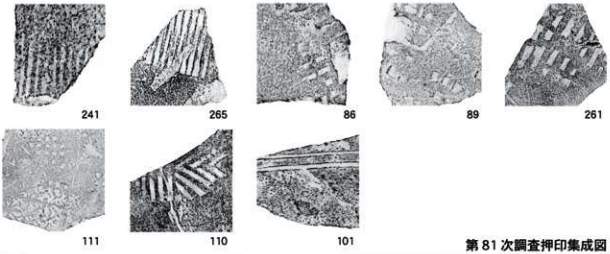


図36　押印集成図（2）

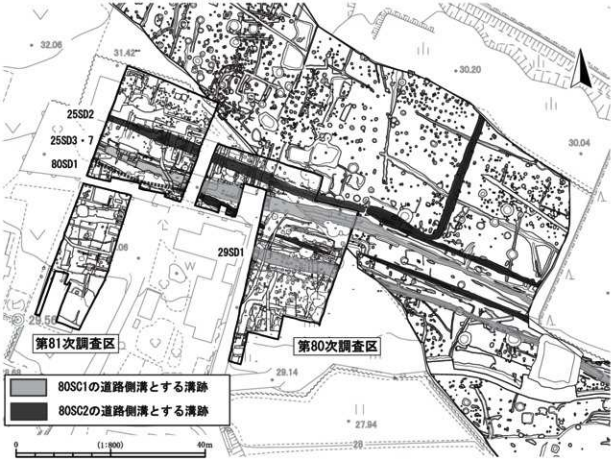


図37　道路状遺構全体図

② 陶 磁 器

出土した陶磁器は遺構内外含め、湿美・常滑産・須恵器系・水沼産？の国産陶器と中国産磁器・中国産陶器？である。国産陶器の遺構内外を含めたそれぞれの種別個数（径２㎝以上の実測掲載したもの）は、湿美産50点、常滑産111点、須恵器系９点、水沼産？３点（同一個体と思われる）、その他２点である。器種は、甕類が大半を占めるが、鉢類（37・38・40・100・151・154・267・281～288）、壺類（34・101・123・229・293・294）なども出土している。国産陶器の押印（第80次・81次）に着目すると、平行条線文・格子文が大半であるが、掲載番号110の綾杉文１点が出土している。101は２条の沈線文が認められる三筋文壺の可能性がある。

輸入磁器の遺構内外を含めた中国産磁器のそれぞれの種別個数（径２㎝以上の実測掲載したもの）は、白磁26点、青磁２点、青白磁２点である。器種は壺類が18点、皿４点（青白磁）、碗７点である。上記の遺物について太宰府分類では、Ⅱ系が45・125・128・131・306～308・313、Ⅲ系が124・127・130・132・301・303・304・309、Ⅴ－１ａ類が129・305？・310、Ⅴ－４ｂ類が302、Ⅶ類？126、龍泉窯Ⅰ類が47・314である。

2　成果と課題

80SC1と80SC2の二つの道路状遺構の先後関係を明らかにできたこと、また、それに並行する塀跡・柱穴が確認できたことは大きな成果と言える。ただし、課題として道路を付け替えた理由や道路周辺に同時期の施設等を確認するには至らなかった。今後の調査で、道路と同時期の建物等の施設が確認されることが期待される。

（菊池）

引用・参考文献

岩手県教育委員会2015『榊之御所遺跡－第75次発掘調査概報－』岩手県文化財調査報告書第144集

岩手県教育委員会2016『榊之御所遺跡－第76次発掘調査概報－』岩手県文化財調査報告書第147集

岩手県教育委員会2017『榊之御所遺跡－第77次発掘調査概報－』岩手県文化財調査報告書第150集

岩手県教育委員会2018『榊之御所遺跡－第78・79次発掘調査概報－』岩手県文化財調査報告書第153集

岩手県教育委員会2020『榊之御所遺跡－第80次発掘調査概報－』岩手県文化財調査報告書第158集

平泉町教育委員会1990『榊之御所跡発掘調査報告書　第24次・25次調査概報』岩手県平泉町文化財報告書第19集

平泉町教育委員会1991『榊之御所跡発掘調査報告書　第27次・29次調査概報』岩手県平泉町文化財報告書第24集

平泉町教育委員会1992『榊之御所遺跡発掘調査報告書　第30次調査概報』岩手県平泉町文化財調査報告書第28集

太宰府市教育委員会2000『太宰府条坊路ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市文化財第49集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『榊之御所跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集

図　　版

調査区　全景（東→）

調査区北半　全景（南東→）

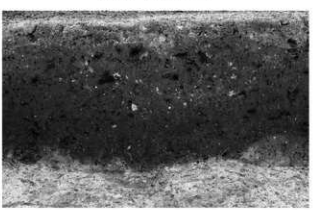
図版2　遺構

調査区南半　全景（北東→）

81SK1　断面（西→）

81SK2　断面（西→）

81SK2　遺物出土状況（西→）

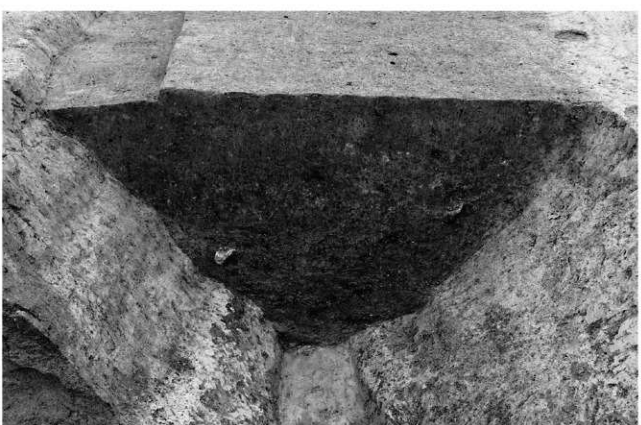


81SK4　断面（南東→）

80SC1・80SC2　全景（南東→）

25SD3・7　全景（東→）

25SD3・7　東端断面（北西→）



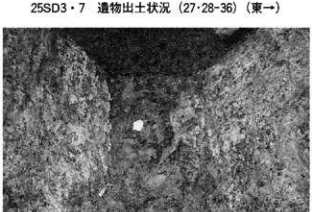
25SD3・7　中央断面（北西→）

25SD3・7　西端断面（南東→）

25SD3・7　西端全景（南東→）

25SD3・7　遺物出土状況（27·28-36）（東→）

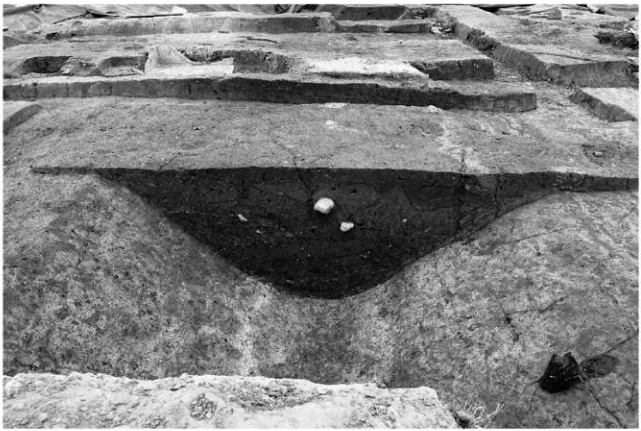
25SD3・7　遺物出土状況（25-35）（南西→）



25SD3・7　遺物出土状況（24-34）（南東→）

25SD2　全景（東→）

25SD2　中央断面（西→）



25SD2　東端断面（東→）

25SD2　西端断面（東→）

25SD2　遺物出土状況（25-34）（東→）

80SD1　東側全景（南東→）

80SD1　西側全景（南東→）

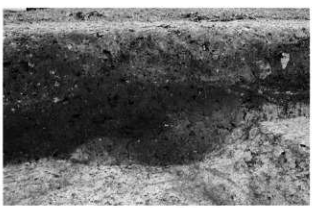
80SD1（右）と25SD3・7（左）　重複部分（南西→）

80SD1　東端断面（北西→）

80SD1　西端断面（南東→）

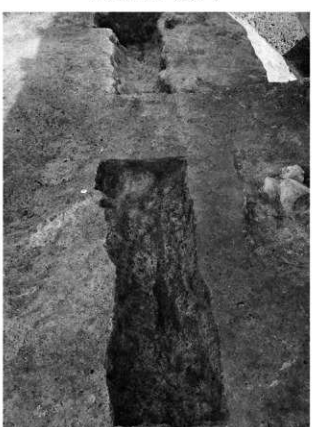
81SD1　全景（南東→）

81SD5　検出（南東→）



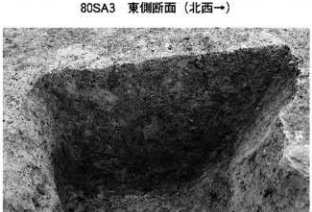
81SD5　断面（南東→）

80SA2　断面（北西→）



80SA3　東側底面検出状況（北西→）

80SA3　東側断面（北西→）



80SA3　中央断面（南東→）

図版12　遺構

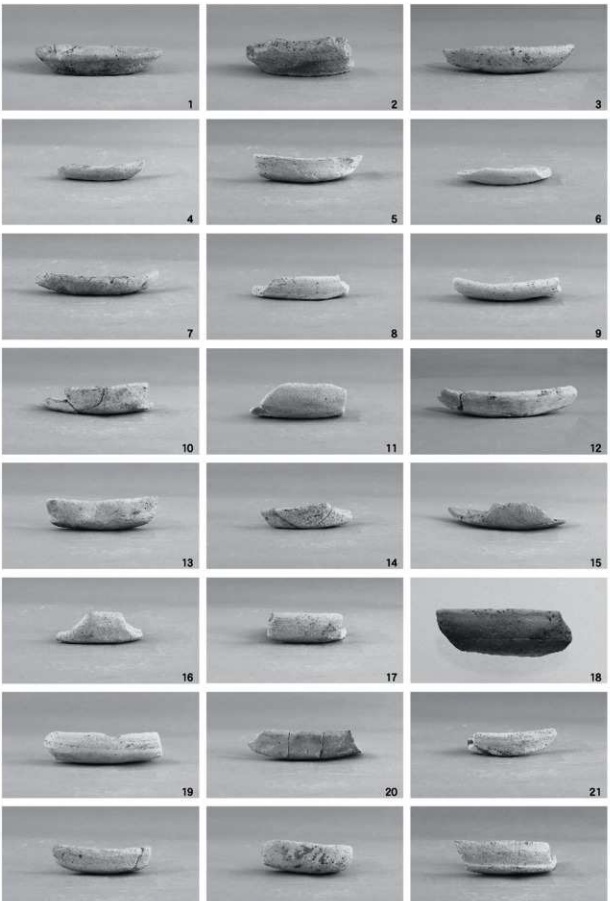
80SA3　C断面（北西→）

81SA1　断面（北→）

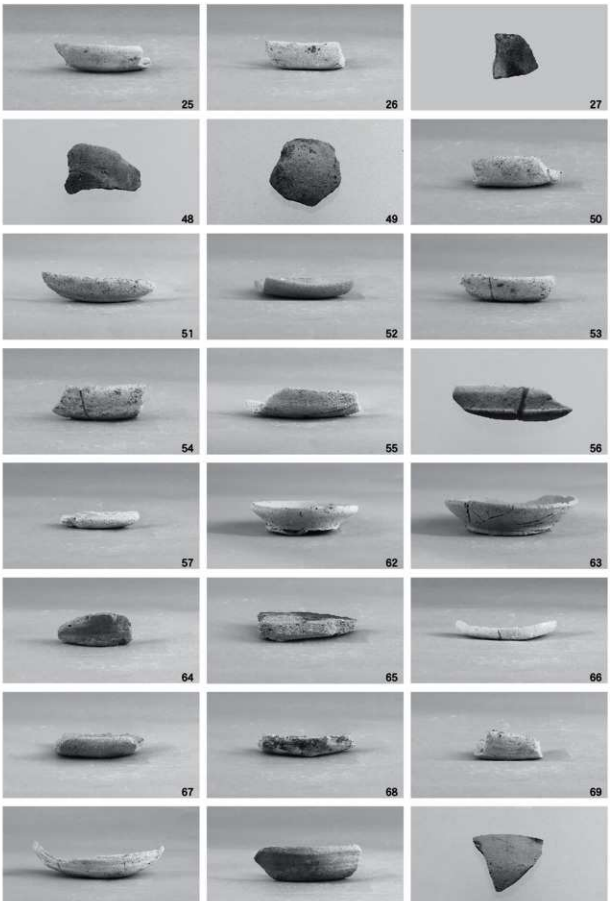
81SA2　中央断面（東→）

81SA2　遺物出土状況（東→）

調査区北側柱穴群　全景（南東→）



かわらけ①



かわらけ②

73

74

75

76

77

78

79

80

81

133

134

135

138

141

142

157

158

159

160

161

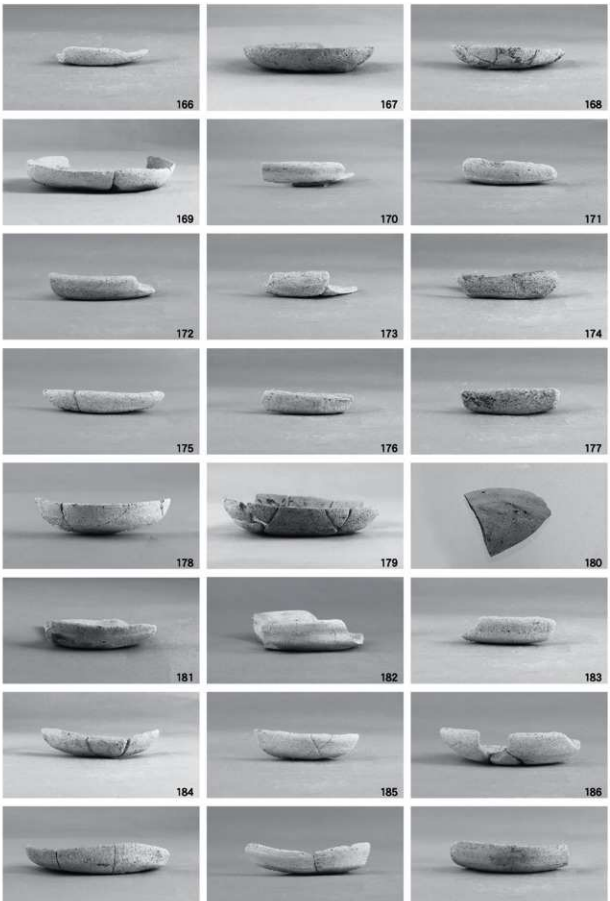
162

163

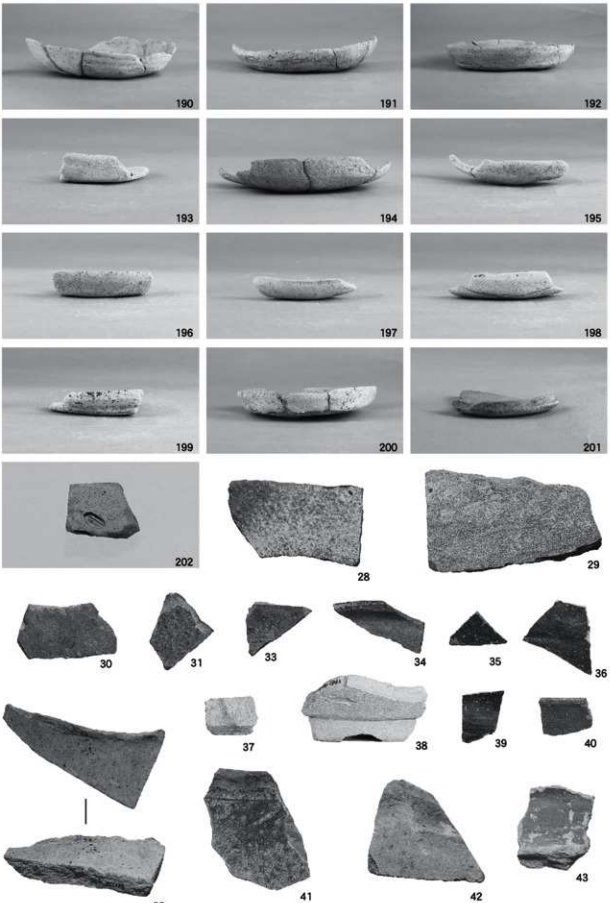
164

165

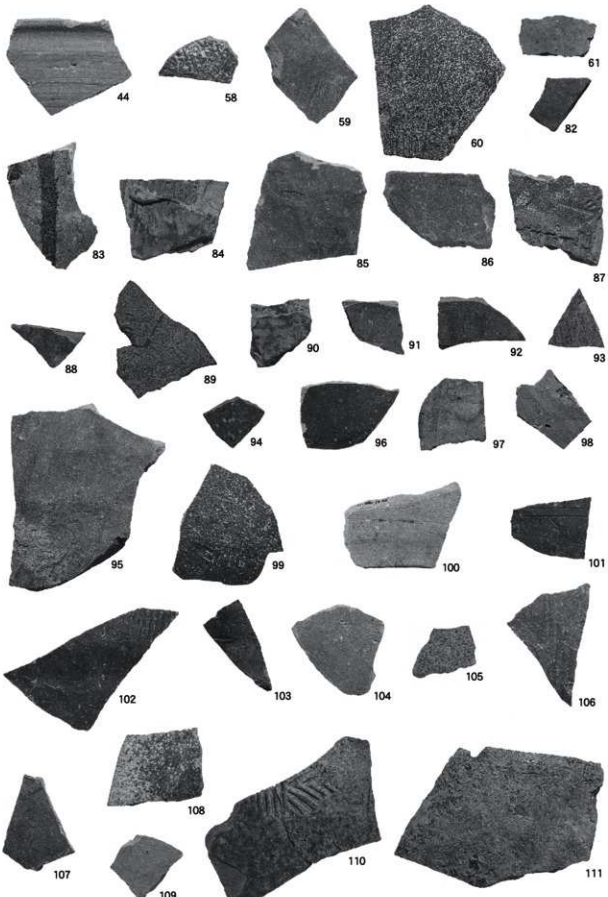
かわらけ③


166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189

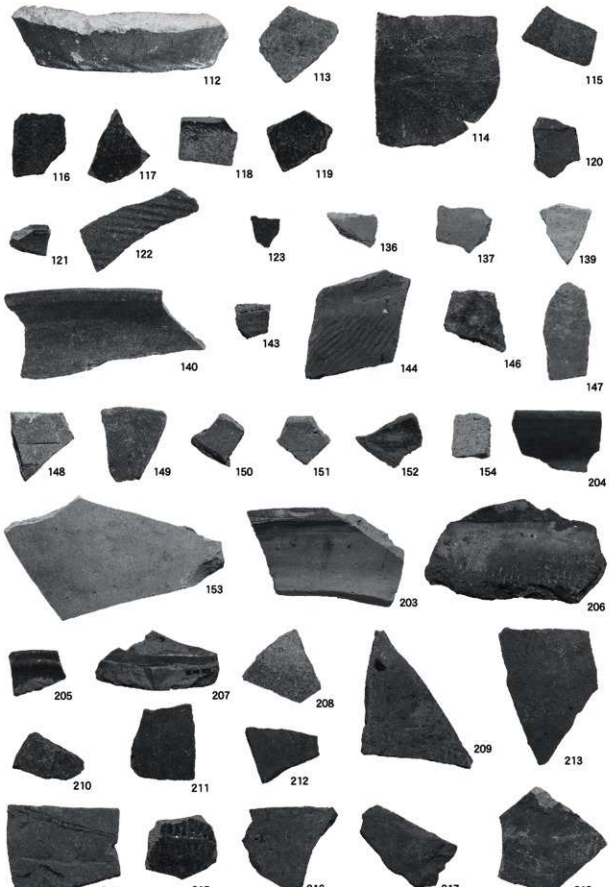
かわらけ④


190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
28
29
30
31
33
34
35
36
37
38
39
40
32
41
42
43

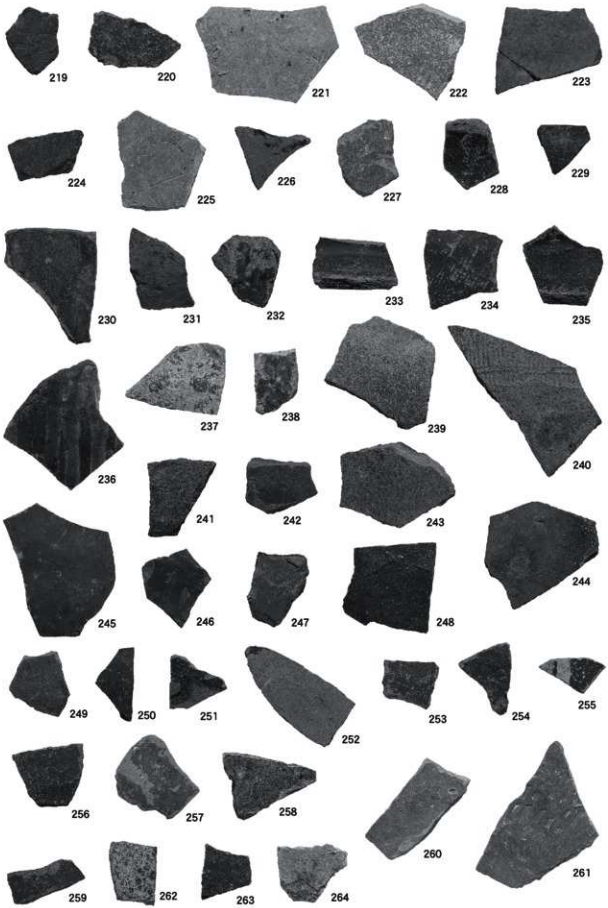
かわらけ④・国産陶器①


44
58
59
60
61
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
96
97
98
95
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111

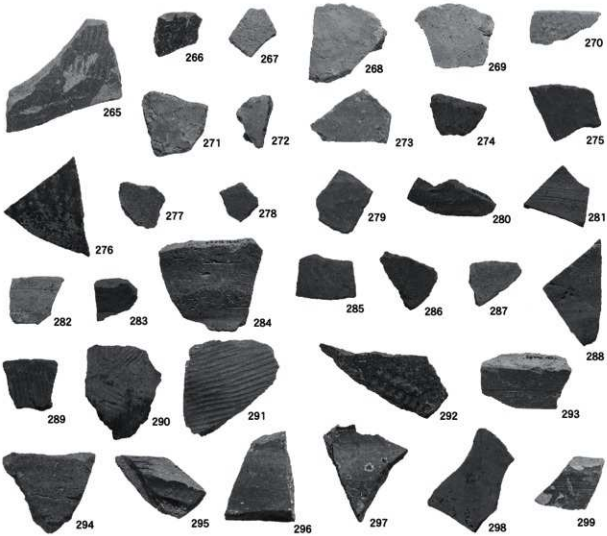
国産陶器 ②

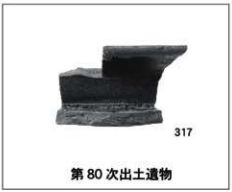

112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
136
137
139
140
143
144
146
147
148
149
150
151
152
154
204
153
203
206
205
207
208
209
213
210
211
212
214
215
216
217
218

国産陶器③

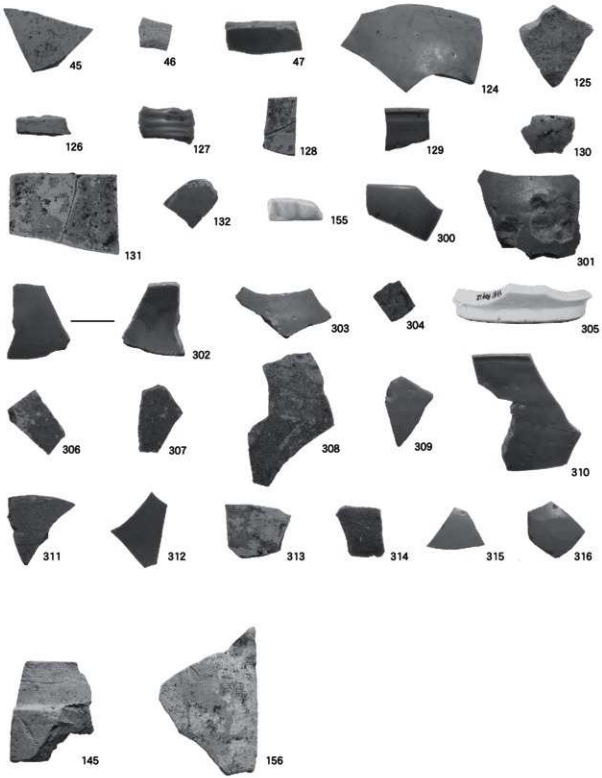

219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264

国産陶器④


265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299


317

第 80 次出土遺物


45
46
47
124
125
126
127
128
129
130
131
132
155
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
145
156

輸入陶磁器・瓦

高館跡

― 第７～10次内容確認調査 総括編２ ―

高館跡目次

Ⅰ 緒　　言 …… 91

1 高館跡周辺の遺跡 …… 91
2 指導委員会 …… 93

Ⅱ 総　　括 …… 94

1 高館跡の堀の時期と位置 …… 94
2 高館跡の変遷 …… 104
3 柳之御所遺跡と高館跡 …… 109
4 まとめと課題 …… 113

図表目次

図1 遺跡位置図（1/50,000） …… 92
図2 調査区位置図 …… 95
図3 遺構の新旧 …… 96
図4 遺構の区分 …… 97
図5 調査区位置図区割図 …… 97
図6 調査区位置図(1) …… 98
図7 調査区位置図(2) …… 98
図8 調査区位置図(3) …… 99
図9 調査区位置図(4) …… 99
図10 堀跡の断面図（Ⅰ期） …… 101
図11 堀跡の断面図（Ⅱ期） …… 103
図12 出土遺物の重量 …… 105
図13 12世紀の堀跡 …… 107
図14 中世後期の高館跡 …… 108
図15 柳之御所遺跡と高館跡 …… 110
図16 関連遺跡の平面形態 …… 112

表1 指導委員会委員名簿 …… 93
表2 各調査の概要 …… 94
表3 堀・溝の対応と関連遺構 …… 96
表4 堀の規模と形状（Ⅰ期） …… 100
表5 堀の規模と形状（Ⅱ期） …… 102

Ⅰ 緒　　言

1　高館跡周辺の遺跡

奥州藤原氏が平泉に拠点を置く12世紀代には、北上川西岸の現在の平泉町中心部を中心として多くの遺跡が分布するようになる。高館跡の周辺では、遺跡の東に柳之御所遺跡、猫間ヶ淵跡、無量光院跡が隣接し、南には伽羅之御所跡が位置している。無量光院跡は三代秀衡が建立した寺院跡である。これまでの発掘調査で宇治平等院と類似しつつも、細部に異なる特徴をもつ伽藍や遺構の内容が確認されている。上層の遺構が良好なため部分的な確認にとどまるが、下層にも遺構が存在することが遺跡内で確認されており注目される。伽羅之御所跡は地名から『吾妻鏡』に記載される加羅御所に比定する見解もある。これまで複数の地点で調査が行われ、貴重な遺物も出土しているが、小規模の発掘調査にとどまり遺跡の様相や性格を明確に示すものは確認されていない。近年の調査により周辺部で溝跡等が確認されており、無量光院跡を含めた周辺での区画の様相も検討されつつある。また、現在義経堂が所在する高館跡は、源義経の伝承とともに知られ、過去の調査で12世紀代の堀が確認されている。

平泉町の現在の中心部ではこの他に志羅山遺跡や泉屋遺跡、倉町遺跡といった当時の平泉の街並みに関連する遺跡が調査されている。志羅山遺跡や泉屋遺跡では東西大路やそのほかの道路跡、それらに接する区画で建物跡などが検出されている。また、倉町遺跡では東西大路沿いに倉庫の跡が確認されている。これらの成果から、平泉の拠点的な範囲に、奥州藤原氏三代によって道路跡や街並みが形成され、中尊寺や毛越寺などの寺院が建立され繁栄したようすが理解できる。現在、白山神社がある白山社遺跡なども、都市域の四方を捉える上で重要な要素でもある。四方鎮守の存在も文献史料から指摘されるところだが、確定には至っていない。さらに、北上川を挟んだ東岸域でも遺物や遺構の量は少なくなるものの、発掘調査が実施されている。本町Ⅱ遺跡では墓域も確認され、里遺跡や月館大師堂など複数の遺跡や地点で12世紀代の遺構・遺物が確認されている。

近年では、平泉町域から衣川を挟んで北側でも奥州市接待館遺跡が確認されたほか、かわらけ生産窯が確認された奥州市白鳥館遺跡などの調査も行われており、当時の平泉の範囲が周辺に広がることが明らかになっている。しかし、これらの平泉の繁栄の多くは政権都市としての性格もあいまって、一部の寺院を除き、奥州藤原氏の滅亡とともに失われていく。

奥州藤原氏が滅亡して以降、平泉保が置かれ、葛西氏が拠点を置いたことが知られる。考古資料の面からは、志羅山遺跡の一部で遺構・遺物が確認されるなどしているものの、前代の12世紀代の様相と大きく異なり、分布は限定的である。また、中世後期段階には城館跡が北上川東岸を中心に確認されている。本遺跡でも該期の遺構が確認されている。

近世には岩手県南部は伊達藩領となる。現在の平泉町内を走る奥州道中が整備され、一里塚などが築かれた。また、北上川舟運が活発に利用され、柳之御所遺跡の遺跡範囲には御蔵場が置かれ舟運の拠点となった。このほか、太田川と北上川に面した泉屋遺跡でも近世段階の屋敷地が確認されている。なお、無量光院跡の整備が行われるなど、伊達氏によって平泉の文化財が顕彰されたことも、現在にこれらの資産が伝わる要因となった。

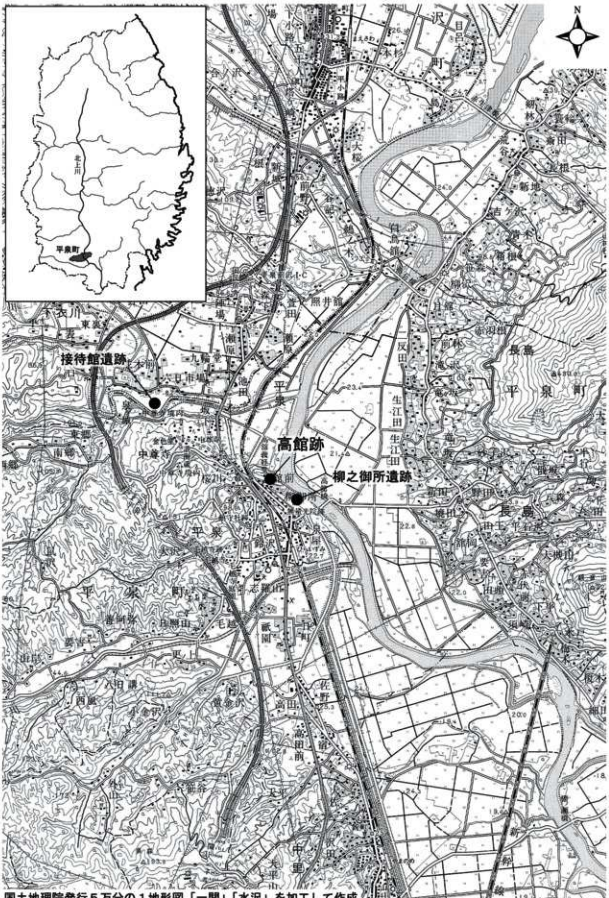


図１　遺跡位置図（1/50,000）

2 指導委員会

岩手県教育委員会では、柳之御所遺跡の調査・整備にあたって、平泉遺跡群調査整備指導委員会の指導・助言を得ながら事業を推進している。本指導委員会は、平成10年に岩手県教育委員会が柳之御所遺跡の調査を計画的に進めるに際して、専門的な見地から指導・助言を受けるために立ち上げたものである。平成10年に「柳之御所遺跡調査研究指導委員会」として設置した。

その後、平成13年度から整備事業等を推進していく必要性から、史跡整備や建築史学からの検討を行うため、「柳之御所遺跡調査整備指導委員会」と名称を改めた。

また、平成15年度からは周辺に分布する関連遺跡もあわせて検討を行う必要性から、「平泉遺跡群調査整備指導委員会」と名称を改めて柳之御所遺跡のみでなく関連する周辺の遺跡の指導・助言を得るとともに、各分野で個別に検討を行うため「遺構検討部会」「整備検討部会」「保存管理計画検討部会」「ガイダンス検討部会」の４つの専門部会を設置している。高館跡の調査を実施した平成25年度以降の「平泉遺跡群調査整備指導員会」の構成委員は表の通りである。それ以前の構成委員等については既刊の発掘調査報告書を参照されたい。

表１ 指導委員会委員名簿 （平成28年４月現在、役職は当時）

氏 名	役 職	部 会
入間田宣夫	東北大学名誉教授	整備
遠藤セツ子	メビウスの会事務局	整備
○ 岡田 茂弘	国立歴史民俗博物館名誉教授	保存・整備
小野 正敏	国立歴史民俗博物館名誉教授	遺構
坂井 秀弥	奈良大学教授	遺構
斉藤 利男	弘前大学名誉教授	遺構
佐藤 信	東京大学教授	保存・整備
清水 擴	東京工芸大学名誉教授	遺構
清水 真一	徳島文理大学教授	遺構
関宮 治良	前平泉町商工会事務局長	整備
田中 哲雄	元東北芸術工科大学教授	保存・整備
◎ 田辺 征夫	奈良県立大学特任教授	遺構
玉井 哲雄	国立歴史民俗博物館名誉教授	遺構
西村 幸夫	東京大学教授	保存

※ ◎委員長 ○副委員長 遺構：遺構部会、保存：保存管理計画検討部会、整備：整備検討部会

（菊池）

Ⅱ　総　　括

1　高館跡の堀の時期と位置

(1)　調査の概要

高館跡に関わる今回の内容確認調査では遺跡範囲のうち、遺構の分布状況などの確認のため広範にわたって調査区を設定した。調査の状況や遺構の詳細については本報告書総括編１で報告しており、ここでは以下の記載内容に特に関わる点を中心に概要のみを触れておく。なお、高館跡の発掘調査は本報告の対象となる内容確認調査を岩手県教育委員会が実施したほか、これまでに岩手大学及び平泉町教育委員会による調査がいくつかの地点で行われている（図２）。また、近接する柳之御所遺跡の範囲での発掘調査でも、高館跡の内容に関わる成果が得られている調査がある。

高館跡第７次から第10次調査の内容確認調査において検出した遺構や遺物の概要は下記のとおりである（表２）。今回の内容確認調査では、高館跡で過去に確認されていた12世紀代とみられる堀跡について、その位置や特徴の把握と時期の検討などを目的としている。そのため、各調査位置の設定に際しても、堀跡の追跡等を意図して設定された調査位置等が多くなっている。それにともない、検出遺構も横方向の堀のほか整地層など、堀やそれに関連する遺構が多く確認されている。また、今回の調査ではこの堀跡を壊す状況で検出された、より新期の遺構である縦方向の堀や溝を確認している。これらの堀跡や溝跡以外の遺構では、丘陵頂部などで柱穴などが確認されている。

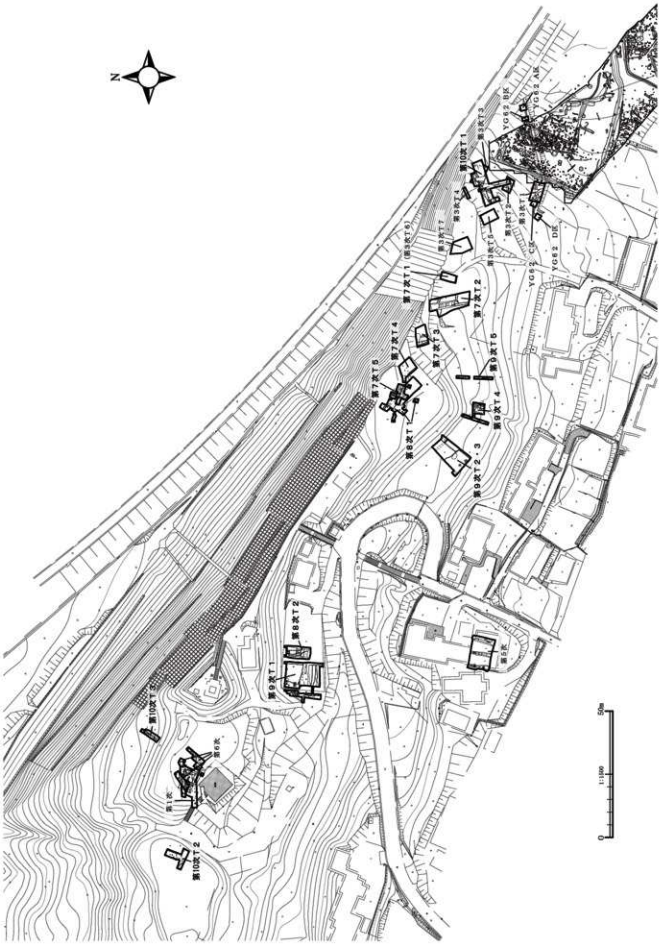
また、遺物の出土量には調査区によって顕著な差が認められる。この点は遺跡の機能やその範囲を示唆する内容として注目できる出土傾向と考えられる。

なお、本報告書では、斜面に対して横方向の頂部平坦面及び等高線に平行して走る堀・溝については、遺構名のほか「横堀」もしくは「横方向の堀」などと記述する場合がある。また、斜面方向に対して縦方向の頂部平坦面及び等高線に直交して造られた堀・溝については、遺構名のほか「竪堀」もしくは「縦方向の堀」等と記述する場合がある。

表２　各調査の概要

調査次	トレンチ	遺　構	遺物量	
			12世紀	12世紀以降
第７次	1	7SD1（横方向の堀）	－	－
	2	7SD1（横方向の堀）・整地層	◎	△
	3	－	◎	△
	4・5	柱穴等多数	○	△
第８次	1	柱穴等多数	○	△
	2	8SD1・8SD2	▲	▲
第９次	1	8SD1・9SD2・9SD3	▲	▲
	2・3	7SD1	○	△
	4・5	7SD1・9SD4	○	△
第10次	1	10SX1ほか焼土遺構、土坑等	◎	△
	2	10SD2	▲	▲
	3	10SD3	▲	▲

※　遺物量は、◎＞○＞△＞▲の順に多寡を示す。実際の出土量の実数は総括編１に記載している。


N
第1次
第2次
第10次T1
第10次T2
第10次T3
第9次T1
第9次T2
第8次
第8次T1
第8次T2
第8次T3
第8次T4
第8次T5
第8次T6
第8次T7
第8次T8
第8次T9
第8次T10
第8次T11
第8次T12
第8次T13
第8次T14
第8次T15
第8次T16
第8次T17
第8次T18
第8次T19
第8次T20
第8次T21
第8次T22
第8次T23
第8次T24
第8次T25
第8次T26
第8次T27
第8次T28
第8次T29
第8次T30
第8次T31
第8次T32
第8次T33
第8次T34
第8次T35
第8次T36
第8次T37
第8次T38
第8次T39
第8次T40

(2)　堀と溝の対応と時期区分

①　遺構の新旧

今回の調査で確認されている遺構のうち、遺構の重複状況などから判明した新旧関係をまとめる(図3)。直接的な重複関係をもつ遺構は限定的だが、いくつかの調査区で遺構の重複から新旧が確認できる。各トレンチでの重複等については、既報告書で報告しているため（岩手県教育委員会2020)、ここでは遺構の方向や重複についてのみ触れる。

TD8-T2及びTD9-T1では、横方向の堀が確認され、その斜面下方にあたる範囲で同時期とみられる整地層が確認されている。また、これらの調査区ではさらにそれら横方向の堀や整地層を壊す縦方向の溝が一部で確認されている。TD9-T4・T5においては整地層は確認できていないものの、一連の遺構とみられる横堀を竪堀が壊す状況が確認できる。

なお、位置が離れるTD10-T1においては、柳之御所遺跡堀外部で確認されている遺構と類似した状況があり、造成された平場遺構を壊して縦方向の溝が確認されている。

トレンチ名	TD8-T2	TD9-T1	TD9-T4・T5	TD10-T1
遺構新旧関係 (旧) ↓ (新)	8SD1（横方向） ↓ 8SD2（縦方向）	8SD1（横方向）9整地層 (≒) 9SD2 ↓ 9SD3(縦方向の溝)	7SD1(横方向) ↓ 9SD4（竪堀）	10SX1（平場遺構） ↓ YG24SD4

図3　遺構の新旧

②　堀、溝の対応

これらの遺構について、今回の調査では調査区が近接するなど同一遺構の可能性が極めて高い遺構については同一の遺構番号を用い、やや調査区が離れる位置については異なる番号を付している。調査の全体や成果を勘案すると、異なる番号の遺構についても同一の遺構とみられる遺構があるほか、類似した性格や同時期の遺構と想定される遺構がある。

今回の調査で確認された遺構のうち堀及び溝は、位置及び走向方向からおおむね下記に分けられる。これらの遺構の遺構番号と、同一の遺構の可能性が高い横方向の堀については地理的な位置及び形状から想定される遺構の対応関係は表のとおりである（表3)。記載が前後するが、各遺構の内容は後述する。なお、この対応関係と上記の遺構の重複による新旧とは矛盾しない。

表3　堀・溝の対応と関連遺構

	横方向の堀 (同一遺構)	その他の遺構	縦方向の溝	横方向の溝
TD7-T1・T2	7SD1	7整地層	—	—
TD8-T2	8SD1	—	8SD2	—
TD9-T1	8SD1	9整地層・9SD2	9SD3	—
TD9-T2・T3	7SD1	—	—	—
TD9-T4・T5	7SD1	—	9SD4	—
TD10-T1	—	10SX1	YG24SD4	—
TD10-T3	—	—	—	10SD2

③ 遺構の時期区分

今回の一連の調査で確認された遺構について、図３で示した各調査位置における構の新旧及び既往の高館跡の調査成果をふまえつつ時期設定を行う。

高館跡の遺構変遷は大きく２時期の想定が可能である（図４）。以下では、それぞれの時期に区分し、そのほかに時期に不明な点が多く残る遺構とに分けて、それぞれの時期の遺構について記す。また、その中で各遺構の特徴に触れ、同一の遺構と想定した内容を示す。

	堀、溝関連する遺構	位置が離れる遺構
Ⅰ期	横方向の堀＝整地層　（≒）　9SD2	10SX1
Ⅱ期	縦方向の溝	
時期が不明瞭な遺構	10SD2	YG24SD4

図４　遺構の区分

図５　調査区位置図区割図

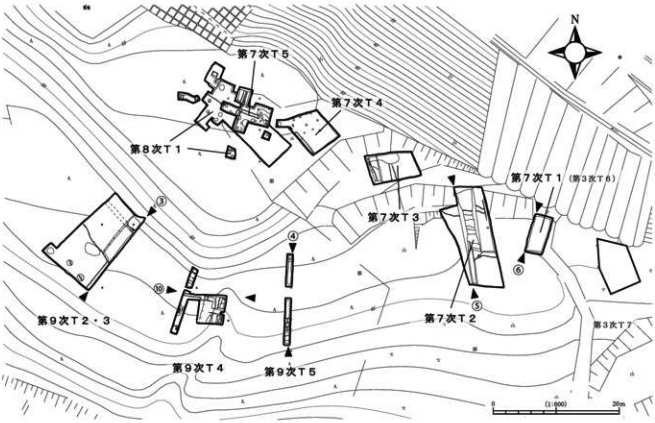


図６　調査区位置図（１）

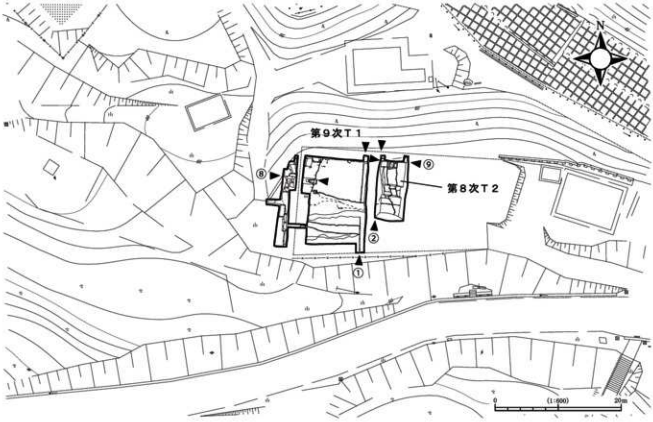


図７　調査区位置図（２）

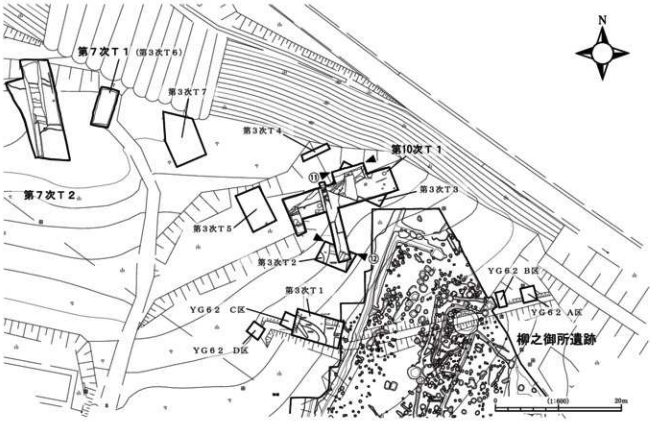


図８　調査区位置図（３）

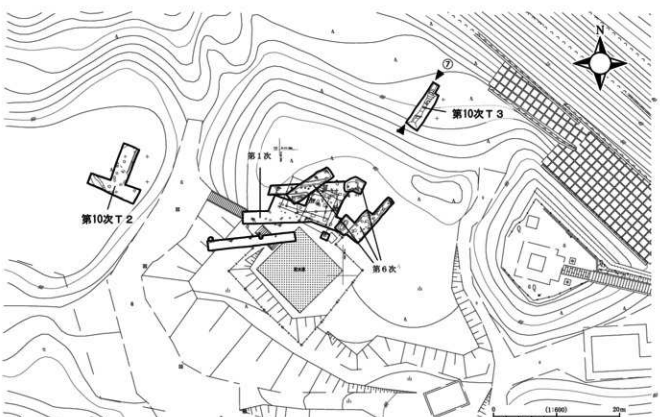


図９　調査区位置図（４）

【Ⅰ期】

○遺構（図10）

横方向の堀

高館の丘陵部の中部付近において、斜面の等高線に平行に走る大規模な堀跡である。高館丘陵部は斜面頂部に平坦面が確認されるが、その直下に位置する帯状の平坦面で確認された遺構で、立地の特徴は共通する。また、堀が位置する平坦面自体が堀構築時に、本来の斜面地を改変した造成に伴う地形と捉えられる。なお、後述するが堀の埋め戻しによって現況で確認される状況になるのは、より後世の時期である。

各調査区で確認した規模は表のとおりである（表4）。多くの範囲で確認された状況は、堀幅は約10m程度である。6m前後で確認された位置は、上端が削平を受けており、本来の規模は大きくなることが推察できる。検出面からの深さは、周囲の地形の改変状況にも影響されるが、概ね2m程である。断面形状は全体の掘削を行っていない部分もあるものの、概ね共通する。多くの位置で確認された形状は、底面に小範囲の平坦面をもつV字に近い逆台形状である（図10）。

下記の遺構については検出位置が丘陵頂部で確認できる平坦面の直下に位置する地形的な特徴が共通し、規模や形状等からも類似する点が多く確認できる。このことから、これらが一連のもので同一遺構である可能性が高い。

表4　堀の規模と形状（Ⅰ期）

遺構名	7SD1			8SD1	
調査区	TD7-T1・T2⑤・⑥	TD9-T2・T3③	TD9-T4・T5④	TD8-T2②	TD9-T1①
幅	約10～12m	約7m	約10.5m	約6.2m	約6.5m
深さ	2.5m	－	－	1.9m	－
形状	逆台形	－	－	V字	－

整地層

上記の横方向の堀に接して整地層が確認されている。確認された整地層はいずれも横方向の堀の斜面下方側に近接もしくは接して確認され、旧表土上面に構築され、地山ブロックを多く含む土層で生成される。堀の構築時にその掻き上げた土層によって、斜面地を造成したとみられる。現況では堀の周辺に平坦な地形が造成された状況が観察できるが、整地層上面では関連遺構は検出できず、機能時の整地層上面の様相には不明な点が残る。土量からは規模の大きい土塁などの想定は難しいように推察される。

また、TD9-T1では整地層上面で横方向の堀と平行する溝を確認している。横方向の堀と平行して走り、埋土の様相などからも同時期の遺構の可能性が高い。

その他

堀跡より標高の低い位置で確認された遺構に10SX1がある（TD10-T1）。この位置は柳之御所遺跡堀外部から高館の丘陵部へと上がる中腹よりやや下方にあたる。10SX1は平坦面が造成され、底面付近での溝などの確認状況から複数回の建て替えが行われた竪穴遺構とみられる。焼土等が確認されており、工房等の可能性が想定できる。また、底面付近で国産陶器類がまとまって出土するなど、高館跡で確認された遺構とはやや様相が異なる。遺構の特徴や遺物の出土状況などは、柳之御所遺跡堀外部で確認された状況と類似した特徴と捉えられる（平泉町教委1994a）。

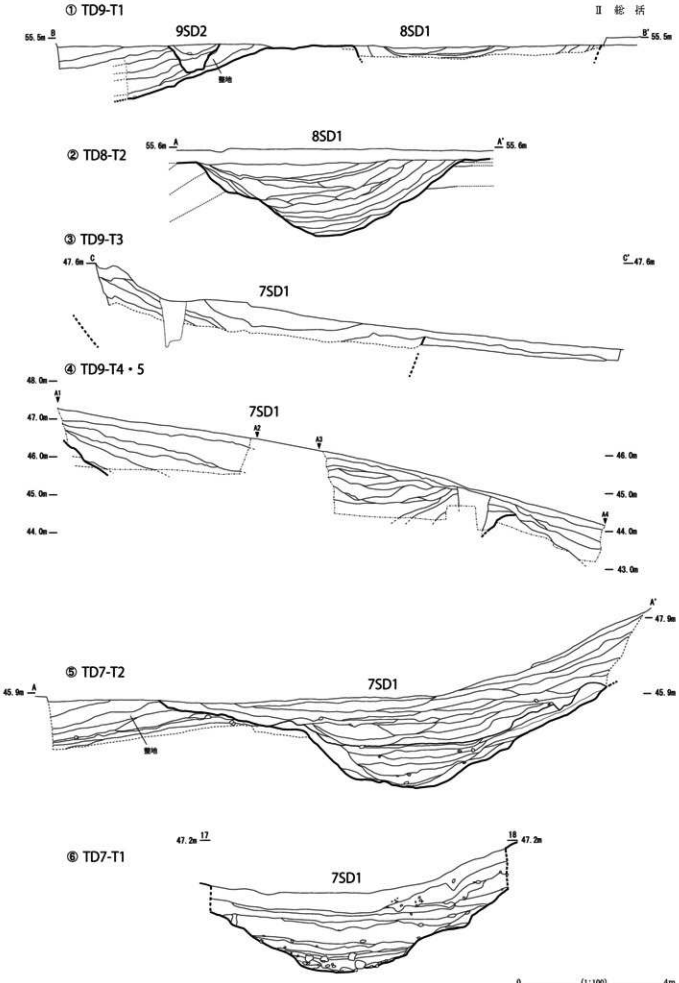


図10 堀跡の断面図（Ⅰ期）

丘陵頂部(TD7-T4・5)で確認された柱穴は詳細な時期は不明だが、この時期に対応するものを含む可能性がある。

○時期

Ⅰ期とした遺構から出土した資料は多くないが、横方向の堀跡から出土した資料はかわらけなど12世紀代の遺物に限定される。このことから、横方向の堀及び整地層については12世紀代の遺構と判断しており、10SX1も同時期にあたる。また丘陵頂部（TD7-T3～T5・TD8-T1）についてもかわらけ類の出土など12世紀代の遺物が出土しており、当該時期の遺構を含むとみられる。

なお、堀跡などからの遺物を中心に器形の全体が復元できる遺物は少ないが、堀跡の下層からの出土資料についてもロクロ成形及び手づくね成形のかわらけの両者を含む。また器形の特徴からも12世紀後半代の特徴をもつ資料が確認でき、12世紀前半代との特徴を顕著にもつ資料は確認できていない。現状では12世紀後半以降に、構築や機能の時期を想定できる。

【Ⅱ期】

○遺構（図11）

縦方向の溝

斜面の等高線に直行して走る遺構で、現況地形でも窪みとして観察できる。高館丘陵の上部から下部に向かって、位置によっては斜面の上端から長く走る様相が観察できる。YG24SD4を除き、その他の遺構は直線的な遺構として確認できる（図14）。

各調査区で確認された、遺構の規模は表のとおりである（表5）。断面形状は位置によって異なるが、底面は丸みを帯びた逆台形状である。幅は位置によって異なり、検出面からの深さは2ｍ程と大規模なものと（9SD3）、1ｍ程度の小規模なものがある。

9SD3、9SD4は規模、形状が類似しており、同様の時期や性格が想定できるが、YG24SD4及び8SD2についてはやや異なる可能性も残る。そのため8SD2及びYG24SD4については、時期不明の遺構として後述する。

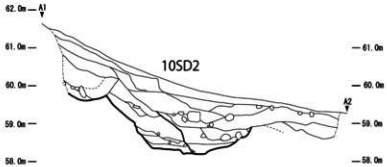
表5　堀の規模と形状（Ⅱ期・その他）

遺構名	8SD2	9SD3	9SD4	YG24SD4
調査区	TD8-T2 ⑨	TD9-T1 ⑧	TD9-T4・T5 ⑩	TD10-T1 ⑪・⑫
幅	3ｍ	4～5ｍ	7ｍ	3ｍ
深さ	1ｍ	4ｍ	－	1.9ｍ
形状	逆台形	逆台形	逆台形	V字

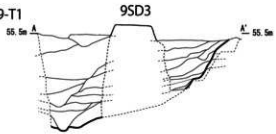
その他の遺構

この時期の遺構として9SD4の底面で確認された遺物や底面の状況及びTD9-T4・5の周囲で確認された焼土遺構が想定できる。9SD4ではトレンチ調査による一部の精査にとどめており明確な遺構として検出できていないが、多量の炉壁片や羽口、炭化物が出土している。最下部には、垂直で短い立ち上がりが平面で直線的に延び、その直下の底面には小溝・小穴様の凹部が断続的に観察できる。堀跡内部が鍛冶などの製鉄関連の施設として利用された可能性がある。なお、同様に鉄滓や羽口片などが丘陵頂部でも出土しており、顕著な遺構は確認されていないものの、当該時期において丘陵の東部周辺で鍛冶等の製鉄に関連する活動が行われた可能性がある。

⑦ TD10-T3

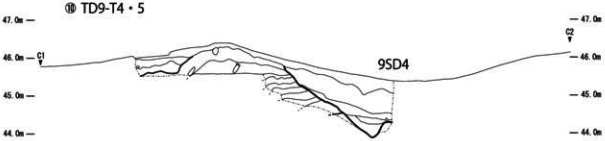


⑧ TD9-T1

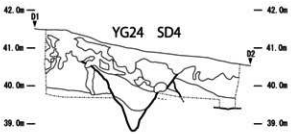


⑨ TD8-T2

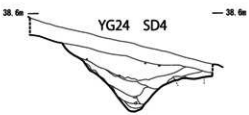
⑩ TD9-T4・5



⑪ TD10-T1



⑫ TD10-T1



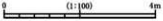


図11 堀跡の断面図（Ⅱ期）・その他

○時期

Ⅱ期とした遺構については、今回の一迹の内容確認調査では出土遺物が少ない。周辺の既往の調査成果を確認すると、高館跡第6次調査では、12世紀代の遺物のほか、主に15世紀～16世紀の遺物が出土しており、特に後者の比率が大きいことが報告されている。また、柳之御所遺跡第22次調査でも同様に15～16世紀代の遺物が確認されている。

今回の調査では遺構から時期を検討できる遺物が確認できていないが、これまでの周辺部の調査成果から、Ⅱ期とした遺構については15～16世紀代の遺構と想定する。

【時期不明の遺構】

なお、ここまで触れてきた遺構の中で、埋土の状況などから時期がやや不明確な遺構がある。それぞれの概要を記しておく。

横方向の堀と同様に等高線に平行に走るが、位置が離れる遺構が1条確認されている。10SD2は（TD10-T3）、高館丘陵の西側に位置し、2時期の掘り直しが確認できる。丘陵頂部に近い平坦面の直下という位置はⅠ期とした横方向の堀と同様だが、平面的な位置が大きく離れることや形状等の相違から時期不明の遺構としている。周囲の状況からはⅡ期とした段階の遺構の可能性が想定できる。

YG24SD4は柳之御所遺跡堀外部の調査では12世紀代の最終末の遺構と想定されていた遺構である（平泉町教委1994a）。ただし、その後の高館跡第3次調査では時期について再検討の必要があると報告されている（平泉町教委1994b）。今回の調査区においては縦方向の溝として確認されたが、下方では蛇行して走る状況が確認されている。また、今回の調査においても、相対的な新旧の理解に変更はない。遺構の構築面などから、Ⅱ期やそれ以降に含まれる可能性もあるものの、Ⅰ期の最終末からそれ以降と捉えられる。この遺構は堀外部で区画溝と想定されるYG24SD2などとの関係が想定されており、今後未調査範囲での重複関係の確認などが求められる。

8SD2は縦方向の溝でⅡ期の遺構に含まれる可能性はあるものの、土層の状況などからはそれ以降のより新しい段階の遺構の可能性が残る。

2　高館跡の変遷

(1)　12世紀代の高館跡

12世紀代の遺構を中心に既調査位置の状況も含め、高館跡の様相を示す。

調査成果から12世紀代の堀の可能性が高い遺構として、横方向に走る堀跡を位置づけられる。

高館跡の調査では各調査位置で、遺物の出土量にも大きな差が認められる（図12）。遺物の出土は、柳之御所遺跡に近い丘陵東部で多く、一方で丘陵西側では少なくなる傾向が窺える。丘陵西側は堀による区画が不明瞭なものの、東西において遺物量の多寡の差は大きく、12世紀代における高館の利用範囲を、丘陵東部に推測することができる。

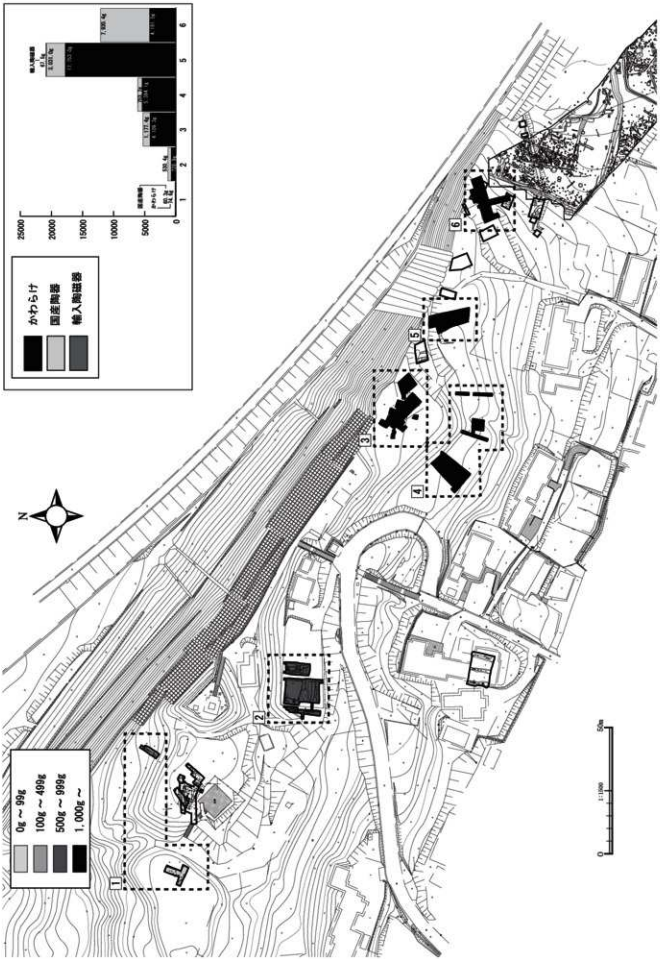

0g ～ 99g
100g ～ 499g
500g ～ 999g
1,000g ～
N
1
2
3
4
5
6
かわらけ
国産陶器
輸入陶磁器
25000
20000
15000
10000
5000
0
1
2
3
4
5
6
0
1:1,100
50m

図12　出土遺物の重量

この時期の堀の位置について、調査で確認できた位置をみていきたい。また、遺構は不明だが地形等からの推定になる部分を点線で示す（図13）。丘陵の東側から南側にかけて、横方向の堀が確認でき、丘陵頂部を囲むように堀がめぐることが把握できた。一方で、丘陵西部にはⅡ期以降とみられる地形の改変も大きく、堀での区画が不明瞭な部分がある。ここで上記の遺物量を勘案すると、現在の高館義経堂がある位置より西側では12世紀代の遺物量が少ない。これは平泉町教育委員会による既往の調査成果とも整合する。このほか、今回の調査区で最も西側に設定した調査区（TD10-T2）においても、12世紀代の遺構や顕著な遺物が確認できていない。この状況は丘陵東側周辺で、遺物などがまとまって確認できる状況とは大きく異なり、機能した範囲を示唆する内容である。また、横方向の堀を確認したうちの西端部より西側は急峻な傾斜地となっており、自然地形によっても一定の区画となることが推察できる。今回の調査成果では上述の範囲を12世紀代に主に利用され、堀で区画された範囲と捉えている。

また、堀が機能を分ける区画として機能した可能性が高く、堀より柳之御所遺跡堀外部に近い調査区（TD10-T1）での様相は、これまで確認されている柳之御所遺跡堀外部の様相と、より類似する。丘陵東部の斜面下部は柳之御所遺跡堀外部と同様の機能範囲が広がるものとみられる。

高館の利用範囲を上記のとおり推察できたが、その性格を具体的に示す物証は少ない。高館の丘陵頂部には平坦面が存在し、施設等の所在が推察できるものの、丘陵頂部は現在、義経堂の境内地として利用されていることや旧地形の削平などもあり、発掘調査を行いうる範囲は狭小で、今回の調査においても内容確認を行った範囲は限定的である。この位置では（TD7-T4・5、TD8-T1）、調査区の制約などもあり柱穴などは確認できるものの明確な建物を復元できていない。また、高館跡の出土遺物もかわらけのほか、国産陶器や輸入陶磁器類を少量ながら含むもので、平泉の他の遺跡で確認されているものと大きな差は認められない。また、遺跡の性格を示すような特徴的な遺物も得られていない。ただし、かわらけ類のみでなく、輸入陶磁器類なども少量ながら含むことは注目できよう。

これらから、12世紀代において、丘陵部上方が利用されたことがわかり、大規模な堀に区画されることからは、重要な機能をもつことが推察できる。一方でその性格については、得られている考古学的情報からは明確にできない。今後の重要な課題である。

より標高の低い下方の位置では調査事例も少なく判然としないものの、高館跡第５次調査で確認された溝などもあり、現在の高館義経堂への登り口などが位置する丘陵斜面の南側には関連する遺構の所在が想定される。今回の調査で丘陵頂部周辺を中心とした範囲の様相が明らかになりつつあるが、周辺状況など今後の調査をふまえた検討が今後の課題である。

(2)　中世後期の高館跡の予察

12世紀代の遺構より新しい時期の遺構について、周辺の地形状況もふまえて図示した（図14）。縦方向の堀のほか、より広い範囲で同時期とみられる地形が観察できる。なお、12世紀代に位置づけられる堀跡は、現状では堀としての顕著な窪みを残さず、平坦面として観察できる。これは堀の土層状況からは、構築及び自然の埋没による土層の上層に、より後世段階における造作が窺える。その主な時期に、既述の遺物などの出土状況からは中世後期段階を想定することも可能と考えられる。

当該時期の遺物も調査範囲では決して多くはないが、既往の調査成果をふまえれば、主要な範囲から外れている可能性も想定される。また、鉄滓や羽口など鍛冶等に関わる遺物が比較的まとまって出土していることは、この時期の高館丘陵東部において、それらの生産活動が行われた可能性が高い。今回の調査区の設定からは外れるが、丘陵部の平坦面はより西側でも確認できる。これら丘陵西部で

図13　12世紀の堀跡

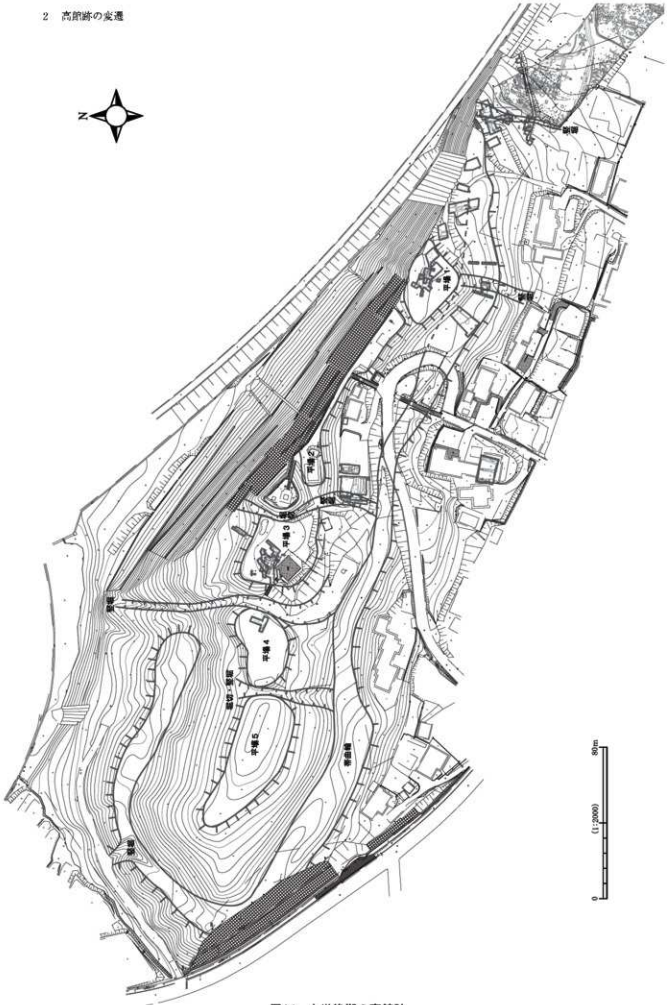


図14　中世後期の高館跡

は帯曲輪状の範囲がめぐるなどの地形的特徴が観察でき、中世城館としての様相が想定できる。今回の調査範囲からは外れるものの、平坦な範囲としてはこちらの部分がより広い範囲を確保できる可能性が高い。

また、より下方の位置などでも遺物の出土や地形の観察からは遺構の所在が想定される。今回の調査では奥州藤原氏が柳之御所遺跡を拠点とした12世紀代の周辺地域での様相を主な調査課題としたため、より広い平坦面などが所在する西側の範囲については調査対象としていない。平泉町周辺でも中世城館の調査は少ないながらも行われてきており、当該時期の様相についても今後の課題としてあげておきたい。

3 柳之御所遺跡と高館跡

(1) 柳之御所遺跡と高館跡

① 柳之御所遺跡の概要

柳之御所遺跡は堀に区画された堀内部地区と、その外側に広がる堀外部に分かれる。

【堀内部地区】

堀内部地区は北上川沿いの河岸段丘上に位置する平坦面にあたる。堀に囲まれた範囲は概ね5万㎡程で、標高は23m前後である。

遺跡は12世紀前半から12世紀末の奥州藤原氏の衰亡まで、平泉の拠点的な範囲として機能した。なお、現状の資料から、12世紀後半においては、堀に囲まれたこの範囲が『吾妻鏡』に記される「平泉館」の可能性が高い。

【堀外部】

堀外部は、北上川沿いの河岸段丘上に位置する平坦面で、概ね5万㎡ほどの範囲に遺構が広がるとみられる。遺跡は堀外部の広い範囲に分布するが、そのうち柳之御所遺跡堀内部地区に近い位置は、堀外部地区として一連の機能を持った可能性が高く、概ね史跡指定された範囲がそれにあたると想定できる。標高は24m前後である。

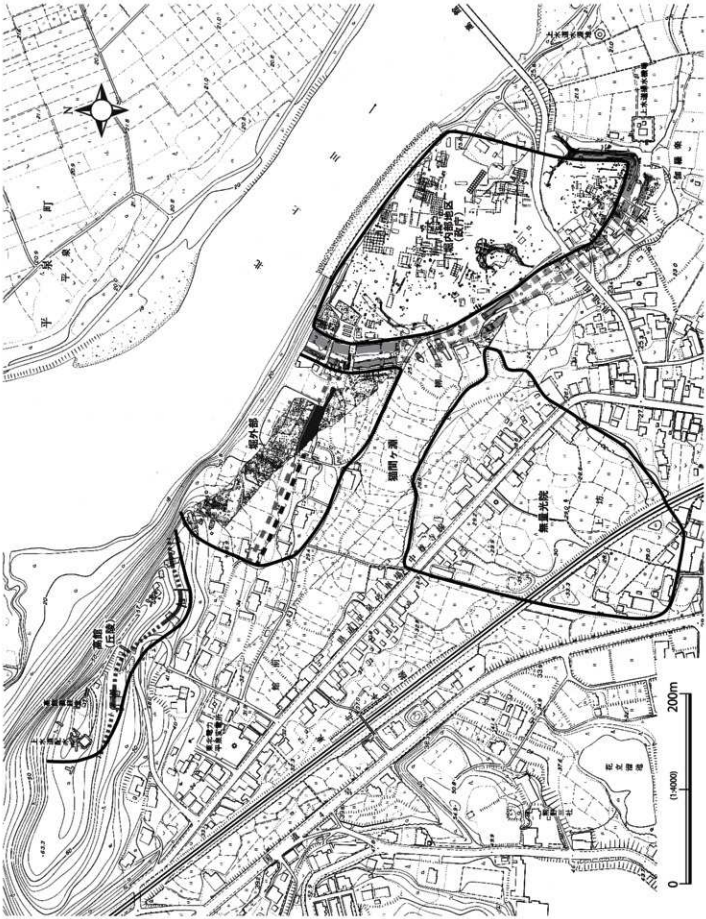
大きく2時期にわかれる道路跡が確認されているほか、道路跡に沿って溝や塀によって区画された様相が窺える。区画された中には掘立柱建物などが確認されており、四面庇の大規模な道構が確認された範囲もある。また、12世紀前半から機能した範囲があるなど、変遷も捉えられている。

高館の丘陵部に近い位置では造成された平坦面に、複数時期の遺構が所在する状況が確認されている。

② 柳之御所遺跡と高館跡（図15）

柳之御所遺跡は堀に区画された堀内部地区が政庁域と考えられ、堀外部は道路に沿って関連する遺構が所在する。また、位置によっては焼土などの存在から工房的な性格が推察可能な位置もある。

高館跡では12世紀代の遺構として堀や整地が確認されているほか、柱穴等から建物跡等の存在が推定できる。堀は標高40～42m程の位置に等高線に平行して走り、その斜面下方は整地が行われる。館の丘陵は標高45m程の位置に頂部の平坦面があり、柱穴などが確認されている。堀等の構築年代を決定する資料は少ないが、土器類の特徴からは12世紀後半にはこれらの遺構が構築され、機能したことが想定できる。


N
平泉町
平泉駅
北上川
柳之御所遺跡
高館
高館
高館

高館跡と柳之御所遺跡は近接した位置にあたる。地形的には平坦な河岸段丘上と、丘陵頂部として明確に分かれるものの、後者からは前者の全体を眺望できる位置にあたる。現況では樹木の繁茂などにより捉えづらいが、高館の丘陵部は平泉から北方の北上川上流域を眺望できる位置で、また南方の平泉の中心域も広く眺望できる位置にあたる。柳之御所遺跡堀内部地区の政治的な性格を勘案すれば、そういった拠点的な性格をもつ施設と無関係な施設が政庁域を一望できる位置に構築されることは考えづらい。地理的な連続性と、堀などの遺構から、これらの遺跡が関連した機能を持っていたと想定できよう。

これらから、12世紀後半において、柳之御所遺跡堀内部地区［政庁（政治行政の中心・居館）と柳之御所遺跡堀外部［関連する居館等］と高館跡［堀に囲繞された施設］の３者が近接した位置で同時期に機能したことがわかる。各範囲の具体的な機能分化には不定な部分が残るものの、地理的な位置関係の密接さを勘案すると、これらの諸施設が密接な関連性をもって機能したことは十分に窺える。特に、遺物の出土傾向で柳之御所遺跡に近接する位置での出土が顕著に多くなることは、遺跡の機能が柳之御所遺跡との関連性を重視した内容であったことを補強する可能性があろう。

柳之御所遺跡の調査により、居館の形態やあり方を把握する上で重要な成果が得られてきたが、高館跡の調査により当時の居館の様相を把握する上で重要な成果を得ることができた。政治行政の中心である範囲と近接して、関連施設が所在した可能性が高いことは、奥州藤原氏の権力基盤やそれを明確にする居館のあり方を示す内容と考えられる。高館跡の丘陵頂部の具体的な性格には不確定な部分が残るが、堀外部や平泉の拠点的な範囲の今後の周辺域の調査もふまえて今後も検討が進められるべき課題でもある。

(2) 平泉における柳之御所遺跡とその周辺

12世紀後半において、政庁とみられる位置の周辺で３つの地区が密接に関連したことが窺える。地形的な特徴から下記の３つに分かれる範囲が、関連して機能したことが想定される。

政治行政の中心【平坦面】－関連する諸施設【平坦面】－堀に区画された施設【丘陵部】

また、高館の機能の中心を柳之御所遺跡に近い東側に想定したが、一方で西側には中尊寺が位置する関山丘陵へと向かう。その間なども小規模な発掘調査成果が蓄積されており、それらや今後の調査成果を含めたより広範な範囲での検討も今後の課題のひとつである。

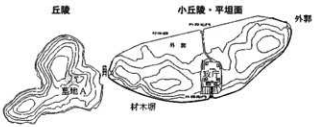
ところで調査目的で記したように（岩手県教委2020）、近年の秋田県域における調査の進展もあり、秋田県大鳥井山遺跡の事例などから、奥州藤原氏の居館との類似性が指摘されている（横手市教委2009）。そこでは古代の城柵である払田柵跡と清原氏の城館との連続性が指摘され、それがさらに奥州藤原氏の居館である柳之御所遺跡の在り方に受け継がれるという考え方が示されている。これは平坦面に位置し、堀に区画される範囲と、隣接する丘陵頂部とが関連性をもって利用されるという、居館の立地と形態上の類似からの想定に基づくものである。

大鳥井山遺跡では小吉山地区と大鳥井山に分かれる（図16）。平坦部にあたる小吉山地区は、２重の堀と土塁に囲まれ、地区がさらに２つに分かれる状況が把握されている。大鳥井山は平坦面の南側に位置する丘陵部で、斜面の下方には堀が確認されている。丘陵頂部には大規模な四面庇建物が１棟確認されている。

両遺跡の類似はこれまでも指摘されており、類似点として下記があげられる。

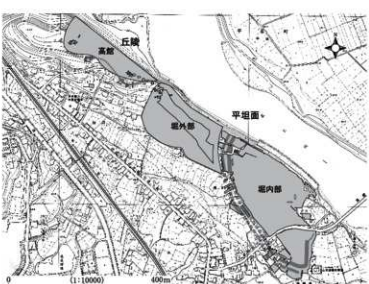
・平坦面と隣接する丘陵頂部とが密接な関係をもって機能する。両者が機能を分担しつつ、同時期に活動が行われる。

・大規模な堀によって遺跡が区画される。



払田柵跡（入間田・坂井編 2011）

大鳥井山遺跡（入間田・坂井編 2011）



柳之御所遺跡全景

図16　関連遺跡の平面形態

・河岸段丘上に立地する。

一方で相違点や課題もあげられる。

・大鳥井山遺跡では堀に囲繞された範囲と丘陵部が接するが、柳之御所遺跡では堀外部を間に挟む。大鳥井山遺跡の平坦部も北部と西部及び東部で分かれるが、この地区による差異が柳之御所遺跡の堀内部地区と外部の差と、同等の性質上の懸隔と位置づけられるかは課題が残る。

・柳之御所遺跡と大鳥井山遺跡では、柳之御所遺跡堀外部が間に入ることもあり、面積はより大きくなり、両遺跡の様相は異なる。

・時期的に高館跡の利用を12世紀前半まで遡らせうる根拠は現状では得られていない。

奥州藤原氏と清原氏との関係をふまえれば、これらの関係を過小に評価することはできない。特に柳之御所遺跡調査開始当初から注目されてきた、大規模な堀に区画された景観と、段丘上に立地するという地形的特徴は両遺跡を構成する重要な要素である。この点では居館の選地や堀による区画について、柳之御所遺跡に至る系譜として把握できる可能性は高いとみられる。

一方でこれらの相違点、特に柳之御所遺跡周辺の初期の12世紀前半から中葉にかけて把握できる状況については相違点も多い。高館跡までも含めた柳之御所遺跡の全体と、大鳥井山遺跡の全体が、類似し系譜として位置づけられるかは判然としない。両遺跡の現状の見かけ上把握できる類似性に対して系譜を求められる可能性は十分にあるものの、全体構造も含めて即モデル化などの評価が当てはまるかどうかは今後の調査成果に期待する部分も大きい。これは文献史学の研究成果などで示される奥州藤原氏の政治的な位置や支配様相などの変化も含めた把握が求められよう。相違点などを含めて時期的な変遷の中で位置づけられるなどの評価もあり得ると思われるが、これらの事例がどこまでモデルとなったかどうかは判然としない。ここでは、柳之御所遺跡及び高館跡と、大鳥井山遺跡について、両者の類似点は存在するものの、現状では時期的な関係や規模などの属性では差異が存在することを指摘しておきたい。

今回の調査により平泉における居館の様相を検討する上で重要な成果が得られているが、奥州藤原氏の系譜や周辺遺跡との関連性には課題も残る。今後、堀外部の新規の調査成果や既存の内容の再検討を含めた様相解明とともに検討が求められる。

（櫻井）

4　まとめと課題

○高館跡第７～10次調査のまとめ

・12世紀代とみられる等高線に平行して走る堀跡を確認できた。堀跡は、斜面の中央から上部に位置し、丘陵頂部の平坦面をめぐるように走る。幅７～８ｍ程・深さ２ｍ程の大規模な堀で、現状の確認位置からは全長200ｍ程の長さが想定される。

・遺物の分布状況から、丘陵東部の柳之御所遺跡に近い位置を12世紀代に主に利用された範囲と想定できる。

・柳之御所遺跡と同時期に大規模な堀に囲繞された施設が高館跡に存在したことが確定できた。政治行政の拠点として機能した範囲に近接し、それを眺望できる位置にあたる点は高館跡が政庁域と関連した性格をもつことを示唆する内容である。12世紀後半に柳之御所遺跡堀内部地区と堀外部、丘陵頂部の高館跡が同時期に機能したことがわかり、地理的関係性から密接な関連が窺える。当時の居館形態を理解する上で重要な成果と捉えられる。

・12世紀代の遺構より新しい時期の遺構が、縦方向の堀を中心に確認できた。時期を特定する材料は少ないが、これまでの調査では15～16世紀代の遺物が確認されており、この時期に想定できる。
・遺物は12世紀後半からの資料を中心とし、12世紀前半代の資料やそれをさらに遡る11世紀などの古代の特徴をもつ資料は得られていない。

○調査研究等の諸課題

・遺物量が少ないこともあり、12世紀代において高館跡の機能が開始された時期には不確定な部分が残る。ただし、現状で得られている資料中には12世紀後半以降の特徴を示す資料が多い。
・建物跡等の所在が想定される平坦面の残存が地形的にも極めて不良のため、12世紀代の高館跡の機能を特定する材料が得られていない。斜面部の柱穴などには、この段階の遺構を含む可能性があるものの、具体的な機能等を確定しうる資料は遺構遺物ともに得られていない。
・中世後期に城館として機能したことが想定されるが、その範囲など未確定の課題も多い。今後の調査等が課題となる。
・柳之御所遺跡と関連性の高い範囲として位置づけられる高館跡について、遺跡としての今後の保存管理や活用の在り方は、重要な課題である。関連遺跡の調査成果のほか、既存の文化財指定やその保存活用計画等もふまえて十分な検討を継続していく必要がある。

（半澤・菊池・櫻井）

参考文献

入間田宣夫・坂井秀弥　編2011『前九年・後三年合戦』高志書院
岩手県教育委員会2018『柳之御所遺跡　堀内部地区内容確認調査』図版編　岩手県文化財調査報告書第154集
岩手県教育委員会2019『柳之御所遺跡　堀内部地区内容確認調査』本文編　岩手県文化財調査報告書第155集
岩手県教育委員会2020『高館跡－第７～９次調査　総括編１－』岩手県文化財調査報告書第157集
及川　司2017「柳之御所遺跡」『東北の名城を歩く　北東北編』吉川弘文館
平泉町教育委員会1989『柳之御所跡発掘調査報告書－第20・22次発掘調査』　岩手県平泉町文化財調査報告書第15集
平泉町教育委員会1990『柳之御所跡発掘調査報告書－第24次・25次調査概報－』
岩手県平泉町文化財調査報告書第19集
平泉町教育委員会1994a『柳之御所遺跡発掘調査報告書』岩手県平泉町文化財調査報告書第38集
平泉町教育委員会1994b『平泉遺跡群範囲確認調査報告書－高館跡第３次・柳之御所遺跡第44次発掘調査－』
岩手県平泉町文化財調査報告書第39集
平泉町教育委員会2003『平泉遺跡群発掘調査略報』岩手県平泉町文化財調査報告書第81集
平泉町教育委員会2005『平泉遺跡群発掘調査報告書』岩手県文化財調査報告書第92集
横手市教育委員会2009『大鳥井山遺跡　第９次・第10次・第11次調査』横手市文化財調査報告書第12集
横手市教育委員会2016『金沢柵推定地陣館遺跡　総括報告書』横手市文化財調査報告書第38集
横手市教育委員会2016『金沢柵推定地陣館遺跡　総括報告書　補遺編　横手市文化財調査報告書第40集

報告書抄録

ふりがな	ひらいずみいせきぐんはっくつちょうさほうこくしょ　やなぎのごしょいせき　たかだちあと
書名	平泉遺跡群発掘調査報告書　柳之御所遺跡　高館跡
副書名	第81次発掘調査概報　高館跡第７～10次内容確認調査総括編２
シリーズ名	岩手県文化財調査報告書
シリーズ巻号	第160集
編集者名	菊池實広　平澤武彦　北村忠昭　櫻井友梓
編集機関	岩手県教育委員会
所在地	〒020-8570　岩手県盛岡市内丸10-1　TEL019-629-6488
発行年月日	令和３年３月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
やなぎのごしょいせき 柳之御所遺跡	いわてけんひらいずみしょうやなぎのごしょいせきあと 岩手県西磐井郡 ひらいずみちょうやなぎのごしょいせきあと 平泉町柳之御所遺跡内	03402	NE76-0190	38度59分28秒	141度7分35秒	2019 0601～1021	800	内容確認調査
たかだちあと 高館跡	いわてけんにしいわいぐんひらいずみちょう 岩手県西磐井郡 ひらいずみちょうやなぎのごしょいせきあと 平泉町柳之御所遺跡内	03402	NE76-0055	38度59分47秒	141度6分53秒	2014 0601～1130 2015 0515～1130 2016 0515～1130 2017 0417～0930	611.7	内容確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
やなぎのごしょいせき 柳之御所遺跡	居館跡	平安時代	・道路状遺構 ・溝跡 ・土坑 ・柱穴	かわらけ 国産陶器(渥美産・常滑産・瀬戸焼系陶器) 中国産磁器(白磁・青白磁・青磁)	・二つの道路状遺構の新旧関係を把握することができた。 ・道路状遺構に伴う柵跡等を確認することができた。
たかだちあと 高館跡	城館跡	平安時代	・堀跡 ・溝跡 ・整地層 ・柱穴　ほか	かわらけ 国産陶器（渥美産・常滑産など） 中国産陶磁器（白磁・青白磁・中国陶器） など	・高館跡の五陵を囲る堀跡の位置が把握できた。 ・12世紀代に高館跡が機能したことが明確に示され、その興隆範囲の想定が可能となった。 ・中世城館としての高館跡と12世紀代の機能とが把握できた。

要約

柳之御所遺跡第81次調査

柳之御所遺跡の堀外部地区の調査で、平泉町教育委員会の過去二度の調査で確認されていた道路状遺構の側溝を第80次調査で追跡調査した結果、二つの道路状遺構を確認した。第81次調査においても引き続き、道路状遺構の追跡調査を行った結果二つの道路状遺構の先後関係を示すことができた。

高館跡総括編２

高館跡の内容確認調査の発掘調査報告で、本書は調査成果の総括にあたる総括編２である。

柳之御所遺跡に隣接する高館跡で、柳之御所遺跡と同時期にあたる12世紀代の堀跡を検出し、その時期や位置を特定する材料を得ることができた。調査成果から、遺跡は丘陵頂部の平坦面として確認できる範囲が大規模な堀によって囲まれることが確認できた。遺物の多くは12世紀後半代とみられる特徴をもち、堀の時期等を推定する材料を得た。これにより奥州藤原氏の政治行政の中心として機能した柳之御所遺跡堀内部と、関連する堀外部が機能した段階と同時期に、隣接する高館跡においても大規模な堀を廻らす施設が所在、機能したことが把握できた。また、12世紀代の遺構を壊す、より新しい時期の中世後期とみられる遺構を確認することができた。これらの成果は既往の高館跡の調査成果をより具体的に示す内容で、高館跡の様相を明らかにする成果となった。

岩手県文化財調査報告書　第160集
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

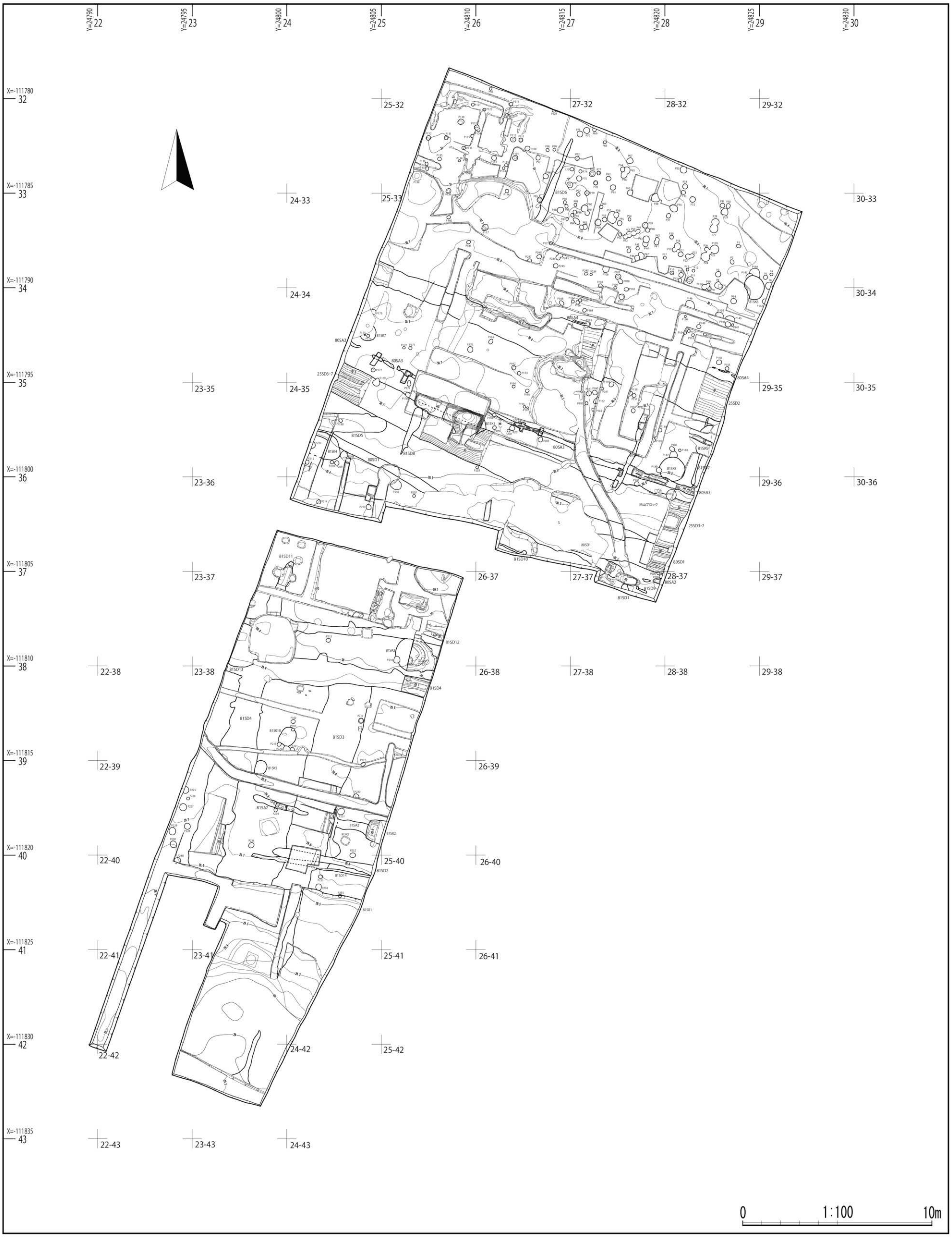
— 柳之御所遺跡 第81次発掘調査概報 —

高　館　跡

— 高館跡 第7～10次内容確認調査 総括編2 —

印刷日　令和3年3月26日
発行日　令和3年3月26日

発　行　岩手県教育委員会生涯学習文化財課
〒020-8570　岩手県盛岡市内丸10－1
電話（019）629－6171
印　刷　株式会社　一関プリント社
〒021-0031　岩手県一関市青葉一丁目7－24
電話（0191）23－4586

©岩手県教育委員会2021

柳之御所遺跡第81次調査平面図(1/100)